

特63
601

學 生 文 庫

第廿九編

常山紀談

下

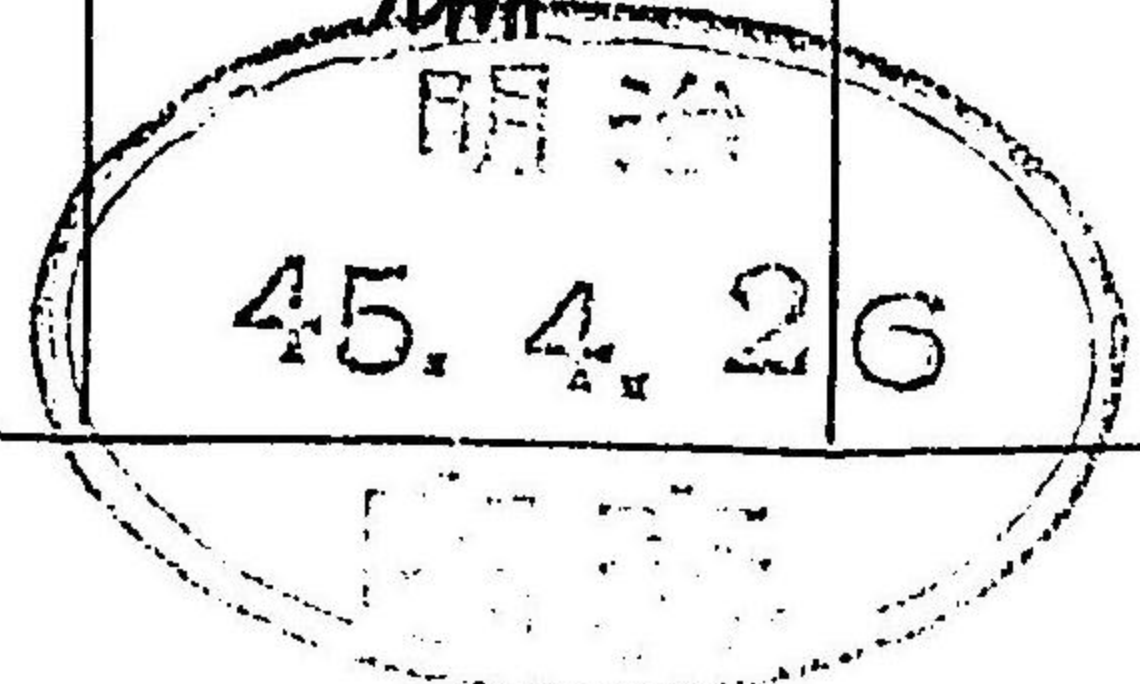
編

明治

45.4.26

大町桂月校訂

東京至誠堂發兌



學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。即ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危険なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娛樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を讀め。書に讀まるゝこと莫れ。

大町 桂 月

常山紀談下卷に見す

常山紀談下卷出で、常山紀談茲に完結せり。常山は戰國時代以後、徳川時代の初期に至るまでの間の武士的行爲を収録して、具體的武士道を示せり。當時の武士に取りては、實に金科玉條也。物換り、星移るといへども、人の道は急變するものに非ず。外部の變更はあるべけれども、精神は依然として古今に通ず。當年の武士道は、今日の紳士道ならずんばあらざり也。下卷の『武邊は律義者でありといふ事』の條に、

律義なる者ならでは、武邊はせぬよし、昔より云ひ傳へたり。加藤主計頭清正、剛の者をほしく思ひ、一生の間、目利きに心を盡し、人相までを稽古致されしかども、其術を得られず。唯律義者に武邊者多しと云はれしとなり。又加藤左馬助嘉明も申されしには、氣さきのけなげなる者は人の目を驚かすほどの働をするといへども、踏みつめたる武功は律義

なる者にあり。たとへば頼みもなく、且那の威衰へて人々二心を持つ中に、獨り義を守りて心がほりなき強みは、律義者ならではなき事なり。詔ひ者はたとへ萬一に一旦の武邊ありても、曾て頼みにならず。且那の世頭を心掛け、知行を取りて、人に笑はるゝをも恥とは己れも知れども、其恥を恥かしとも思はぬ者は、且那を殺しても身の爲めのよき事ならば爲すべきなり。偽と貧とは品かはれども、落着は同じ事なりと云はれしなり。新太郎様にも常に、詔ひ者に知行を興へおくは、盜賊を抱へおくと同じ事なりと仰せられしよし。智者の詞、割符を合せたるが如し。世上の輕薄才子顔色なし。小智小慧小才ありて毫も誠意なきものは、到底成功なし。國を富ます所以にもあらず、兵を強くする所以にもあらず。中卷の『天野康景廉潔高國寺の城を去られし事』の條に、

駿府の城經營の時、竹をからせ積み置き、足輕に守らせしに、御領地の百姓、竹を盗みしを見咎めて斬り殺す。代官井戸某、百姓を殺したる解

死人を出せと天野にいふ。天野、盜を殺す事罪に非ず。守る者罪あらば、先づ天野罪に行はるべしと云ひければ、井戸訴へけり。東照宮、足輕を誅せよと仰せ出されしに、天野始めの如く申しを聞き召し、天野は不道のしわざする者にあらず、仔細あらんと仰せられけるに、本多上野介正統、天野に逢ひて、仰をいなむは、臣たる者の道にあらず。臣として君命を承らざる事やあると云ひけるに、天野さては臣たらずば苦しうも候はじと云ふまゝに、三萬石の祿を辭して、慶長十二年三月二十九日、高國寺を去つて行方しらず成りにけり。

罪なき人を殺さずとて、三萬石を棒に振りし康景の精神は、鬼神をも哭せしむるに足る。昔は斯る正義の士ありき。知らず、今の世にも之ありや否や。

同中卷の『駿府城中へ水を引かんとせられし時の事』の條に、

駿府の城中の池に、阿部川の水を引入れよと仰せありしに、水筋に小まき寺ありければ、外の處に引移さんと申しけるを、東照宮、寺を移す事

なと、いめ、水を入れるにも及ばずと仰せられけり。此ほどの寺移し候はんに、いか計の費の候べきといへば、それは大なる僻事なり。田の爲に水を引かんには左あるべし。吾庭の水はなぐさみなり。夫に人を勞することやある。無益の事に地を捨つるは、敵に取られたるに同じ、百姓の苦みなりと仰せられぬ。

げに、公益事業の爲めなら、人に恨まれても厭はじ。私の快樂の爲めに人を苦しむるは、紳士たる資格なきもの也。今の世の貴顯富貴の徒、金あるまゝに勝手次第なる事をなして憚らざるものに、ちと家康の精神でも煎じて飲ませたきもの也。

大町桂月

新常山紀談卷下目次

卷の二十

四〇八 福島正則信濃國へ赴かれし時の事……………五九五

四〇九 正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事……………五九六

四一〇 井伊直孝直諫の事……………五九八

四一一 明の鄭芝龍援兵を乞ふ事……………六〇〇

四一二 井稻葉正勝諫言の事……………六〇〇

四一三 大納言頼宣弼援兵の總大將を願ひ給ひし事……………六〇一

四一四 酒井忠勝直言の事……………六〇一

四一五 豊田川に橋を掛けられし事……………六〇二

四一六 板倉重宗京都所司代の事……………六〇二

附板倉勝重器置の事……………六〇二

四一六 重宗訴訟を聞かれし心得の事……………六〇六

四一七 板倉重矩の事……………六〇八

四一八 毛利勝永大阪に入る事……………六一〇

四一九 池田忠繼朝臣士を懐けられし事……………六一二

四二〇 芳賀内藏允武者振の事……………六一三

四二一 佐竹勢今福口を攻むる事……………六一三

四二二 井杉原常陸武功の事……………六一四

四二三 上杉景勝志貴野口合戦の事……………六一五

四二四 上杉家の士大將に御感狀を賜ふ事……………六一七

四二五 井伊直孝陣代の事……………六一八

四二六 本多伊豆守出陣聯句の事……………六二〇

四二六 東照宮御父子御陣替の事……………六二〇

四二七 後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事……………六二一

卷の二十一……………六二二

四二八 大阪にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事……………六二三

四二九 東照宮志貴野御巡見の事……………六二三

四三〇 小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事……………六二四

四三一 眞田が丸を攻めたる時の事……………六二五

四三二 塙圍右衛門阿波の陣へ夜討の事……………六二六

四三三 木村畑田屋牧野四士武功の事……………六二九

四三四 木村重成感狀を辭せし説……………六三〇

四三五 稲田九郎兵衛武功を語りざりし事……………六三〇

四三六 細川三齋夜討評論の事……………六三一

四三七 大阪城中軍評定の事……………六三一

四三八 堀直奇見切の事……………六三三

四三九 山本權兵衛功名の事……………六三四

四四〇 毛利孫左衛門野村越中を詰る事……………六三四

四四一 井伊木村挑戦重成討死非伊家諸士功名の事并横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事……………六三五

四四二 脇五右衛門某氏三彌武功の事……………六四〇

四四三 増田兵大夫討死の事……………六四一

四四四 青木長屋生け捕らるる事并井伊家赤備の來由……………六四一

四四五 藤堂家合戦渡邊勘兵衛功名の事……………六四二

四四六 井渡邊始末の事……………六四二

横田佐久間井伊の陣へ御使にゆく……………六四二

四四七 片桐丹後守一番首を取る事……………六五〇

卷の二十二……………六五一

四四八 松平助十郎先登戦死の事……………六五二

四四九 安藤彦四郎討死の事……………六五二

四五〇 本多忠朝討死の事……………六五三

四五一 孕石備前廣瀬左馬助討死の事……………六五五

四五二 廣田圖書が事……………六五六

四五三 毛利勝永軍配相違の事……………六五七

四五四 伊藤武藏守馬印を拾ふ事……………六五七

四五五 郡主馬が事……………六五八

四五六 野村越中才覚の事……………六五九

四五七 長曾我部盛親生け捕らるる事……………六五九

四五八 大野道軒生け捕らるる事……………六六一

四五九 渡邊内藏助が子城を落ちし事……………六六二

四六〇 齋藤織部落武者を助くる事……………六六三

四六一 澤原孫太郎節義救免を蒙る事……………六六四

四六二 丹羽左平太才覚城を落つる事……………六六四

附左平太初陣義氣の事……………六六五

四六三 大阪御陣中御支度の事……………六六六

四六四 本多落合功を論ずる事……………六六七

四六五 後藤又兵衛が事……………六六七

四六六 古田重勝滅亡大河内元綱先見の事……………六七〇

四六七 石川重之功名附隠遁の事……………六七一

卷の二十三……………六七二

四六八 直江山城守闇魔王に書を贈りて詠訟人を斬る事……………六七五

四六九 安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事……………六七五

四七〇 土屋數直執政の事并土屋忠直成立の事……………六七六

四七一 塚原卜傳劍術鍛錬の事……………六七八

四七二 東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事……………六七九

四七三 銚延越前組下に慈愛ありし事……………六八〇

四七四 烏丸光廣卿行狀の事……………六八〇

四七五 中院通村公江戸にて和歌を詠み給ひし事……………六八一

四七六 本多忠義書翰評論の事……………六八二

四七七 義經の鞍の事……………六八二

四七八 根來法師賞功の定并大澤仁右衛門が事……………六八三

四七九 大音主馬之助先登を論ずる事……………六八四

四八〇 永田治兵衛功名の事……………

四八一 附陸井合戦の事……………六八四

於萬の方塙圍右衛門を扶持せられし事……………六九一

四八二 奥平家の士の妻髪を切りて節を守る事……………六九二

四八三 優婆塞の馬の事……………六九三

附信玄馬を擡げれし事……………六九三

四八四 森寺藤左衛門池田家興立の事并森寺政右衛門武勇の事……………六九四

四八五 伴玄札殉死を止むる事……………六九七

四八六 番大膳二條城へ使に参る事……………六九九

卷の二十四……………

四八七 熊澤了介の略傳……………七〇一

四八八 小櫃典五右衛門會津神公を諷諫せし事……………七〇四

四八九 水戸義公御事業の概略……………七〇六

四九〇 渡邊數馬報讐始末の事……………七〇九

四九一 多賀孫左衛門同じく忠大夫仇撃の事……………七一五

四九二 大久保家の婢女主の仇を撃ちし事……………七一八

四九三 林田左文劍術妙手の事并馬爪源五右衛門先見の事……………七二〇

卷の二十五……………

四九四 石井兄弟報讐の事……………七二二

四九五 尼崎幸右衛門が女親の仇を撃ちし事……………七三二

四九六 伊丹康勝格言の事……………七三六

四九七 佐藤直方直言の事……………七三八

拾遺卷の一……………

一 長篠合戦に武田勝頼人数を出だす事……………七四一

二 家康公兜の心得御示の事……………七四一

三 家康公合戦心掛御示の事……………七四二

四 小幡景憲物語の事……………七四二

五 野間左馬之進田螺を以て勝負占物語の事……………七四三

六 老功の士相言葉物語の事……………七四四

七 家康公駿府にて相討御吟味の事……………七四四

八 柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事……………七四五

九 紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大阪攻御先手を望まるゝ事……………七四六

一〇 高麗攻南大門合戦物語の事……………七四七

一一 越前黄門秀康卿伏見邸屋敷へ於國……………

- を召さるる事……………七五二
- 一二 津田長門入道遺物語の事……………七五二
- 一三 島原落城の砌平塚勘兵衛比類なき働きの事……………七五三
- 一四 大阪落城の時細川玄蕃頭鎌合官上の事……………七五三
- 一五 伊藤伊右衛門武田勝頼を討ちしな津田幸菴物語の事……………七五四
- 一六 塙團右衛門持道具の事……………七五六
- 一七 筑前岩出城攻秀康御年十四歳にて武勇御心入の事……………七五七
- 拾遺卷の二
- 一八 越後浪人大井田監物の事……………七五八
- 一九 家康公駿府御花見の事……………七六四
- 二〇 朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事……………七六五

- 二一 加藤家足輕具足著さる事……………七六七
- 二三 加藤家騎馬武者馬上鐵砲の事……………七六七
- 二三 藤堂高虎家中具足の事……………七六八
- 二四 藤堂家の士梅原庄右衛門刺物類當の事……………七六八
- 二五 讃州源英公の家士西尾右兵衛が事……………七六九
- 二六 高麗陣の時中央太郎兵衛南大門一番のりの事……………七六九
- 二七 高麗陣清正が家來矢木八右衛門矢疵の事……………七七〇
- 二八 大猷院様日光山繪圖御覽の事……………七七〇
- 二九 關ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事……………七七一
- 三〇 上杉浪人門田造酒之丞物語の事……………七七七

- 三一 丹羽五郎左衛門物語の事……………七八〇
- 三二 榊原の家人黒田彦左衛門の事……………七八一
- 三三 淺野左衛門家人永田治兵衛働の事……………七八二
- 三四 信玄豆州韭山とりつめ山縣同心辻彌兵衛働の事……………七八三
- 三五 三州吉田城迫合信玄廣瀬幸を得る事……………七八三
- 三六 攝州花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事……………七八三
- 三七 輝政公武將の重寶を示さるる事……………七八四
- 三八 家康公尾州小牧合戰御勝利の事……………七八五
- 三九 家康公同合戰御自證の事……………七八五
- 四〇 福島正則關ヶ原出陣日柄の事……………七八六
- 四一 同役吉村亦右衛門高名を失ふ事……………七八六

- 四二 同役岐阜落城の事……………七八七
- 四三 同役田中兵部大夫長胤の中間水練の事……………七八八
- 四四 同役石田三成浮田秀家が諫を用ひざる事……………七八八
- 四五 同御合戰毛利秀元戰場にて東方へ返る事……………七八九
- 四六 同御合戰終り御詮議の事……………七九一
- 四七 同翌十六日江州佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事……………七九一
- 四八 同牧方表に御旗を立てられ首御賞檢の事……………七九一
- 四九 備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事……………七九三
- 五〇 瀧川左近將監二益極暑に馬上にて

川を渉るとき水を飼ふ事……………七九三

拾遺卷の三

五一 相圖の旗といふ事……………七九五

五二 武田信玄相圖の旗を用ゐる事……………七九五

五三 保科彈正信州高遠に籠城の事……………七九六

五四 上杉景勝最上義元と合戦の事……………七九六

五五 美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鐵砲迫合の事……………七九七

五六 甲州山縣同心長坂重左衛門の事……………七九八

五七 信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事……………七九九

五八 輝政公岐阜攻具吹右衛門が事……………七九九

五九 朝鮮陣の時兵器を塗り馬糞にて乾かせし事……………八〇〇

六〇 松永彈正久秀が馬の事……………八〇一

六一 輝政公關ヶ原行軍順見の事……………八〇二

六二 大河を渉る心得の事……………八〇二

六三 大阪陣の時利隆武者奉行の事……………八〇三

六四 同役池田の諸士類當なき事……………八〇三

六五 兜の頭心得の事……………八〇四

六六 上杉謙信馬印の事……………八〇四

六七 大阪夏陣井伊家の士小笠原傳兵衛手柄の事……………八〇五

六八 信玄嫡子義信と不和の事……………八〇六

六九 大阪にて石川宗左衛門江坂清次郎組討の事……………八〇七

七〇 藤堂の士田中權右衛門組討の事……………八〇八

七一 大阪冬陣上泉義郷指物の事……………八〇八

七二 東照宮と越前少將忠直卿御不和の起原の事……………八〇九

七三 大阪の役木村長門守を井伊家へ撃ち取る事……………八一〇

七四 松平讃岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事……………八一

七五 米倉丹後が子彦十郎鐵砲疵妙藥の事……………八二

七六 佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戦の事……………八三

七七 上林彌五郎が事……………八四

七八 佐久間河内守物語并渡邊内藏助が狂歌の事……………八五

拾遺卷の四

七九 岐阜攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事……………八四

八〇 家康公慶長五年七月會津御發向の事……………八五

八一 秀吉尾州進發の事……………八二

八二 朝鮮陣中加藤清正馬の糞下知の事……………八三

八三 秀忠公三州田原御狩の事……………八三

八四 細川家鐵砲口墜入の事……………八三

八五 秀吉岐阜攻の事……………八三

八六 源君久世三四郎堀部三十郎へ物見仰付らるる事……………八三

八七 豊前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事……………八四

八八 清正の士腰兵糧を持たずして不興の事……………八五

八九 直江山城守伊達政宗に加勢を乞ふ事……………八五

九〇 赤井悪右衛門武勇の事……………八三六

九一 源君長久手御馬揃の事……………八三六

九二 大阪夏御陣眞田左衛門佐幸村勇戦の事……………八三七

九三 同時木村長門守敗北の事……………八四〇

九四 同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事……………八四一

九五 信玄の士小幡豊後物見の事……………八四一

九六 島原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事……………八四一

九七 源君御扈從中根左源太勘氣御免の事……………八四二

九八 島原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事……………八四三

九九 大阪陣渡邊圖書印知の事……………八四四

一〇〇 島原攻並河九兵衛足輕下知の事……………八四四

一〇一 伴助右衛門水戸家へ召し抱へらるる事……………八四五

一〇二 島原落城足輕陣佐右衛門手柄の事……………八四七

一〇三 松山新助の勇將中村新兵衛が事……………八四八

一〇四 大阪攻の時平野村失火安藤治右衛門運參の事……………八四八

一〇五 城和泉守長盛譏言の事……………八四九

附 雨夜燈

一 權現様豊臣太閤に御對面の時の事……………八五二

二 權現様花女を御使にて台徳院様へ菓子を進ぜられし事……………八五二

三 新太郎様夏目氏の忠死を御賞歎の事……………八五三

四 本多三彌木下肥後守義經辨慶を批評せられし事……………八五四

五 板倉周防守大猷院様へ草鞋を獻ぜられし事……………八五六

六 芳賀内藏允忠功の事……………八五六

七 飯田角兵衛其主肥後守を諫めし事并新太郎様備後守様へ御教訓の事……………八五八

八 松前伊豆守用意の事……………八六〇

九 古の名將學問和歌を嗜まれし事并酒和田喜六器量の事……………八六一

一〇 武邊は律義者にありといふ事……………八六五

一一 常憲院様越後家の訴訟御審斷の事……………八六六

一二 土倉市正中村忠左衛門を勧めし事……………八六六

一三 毛利元就大内義隆に諫言の事……………八六八

一四 稻葉一徹文學に依て死を免れし事……………八七〇

一五 中院内府幼き宮に後見の事并本多佐渡守謀計の事……………八七一

一六 名將たち質素にして下情に達せられし事……………八七三

一七 威恩を以て國を治められし事……………八七六

一八 佐藤五郎左衛門咄の事……………八七七

新訂 常山紀談 卷下 目次 終

新常山紀談下

湯淺元禎輯錄
大町桂月校訂

卷の二十

四〇八 福島正則信濃國へ赴かれし時の事

正則配流の時、正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷、墓門へは鳥居左京亮打ち向ひ、皆士卒物具
 したりけり。楚の邸へは最上源五郎義俊打ち向へり。蒲生の士ども正則公命を承りたりと聞きて、い
 そぎ邸を阻下あるべしといひ及れければ、正則仰にも及ばずとて、信州に赴くべきにて候ふとて、熊
 澤半右衛門守久・上月新八兩人をよび、奥筋の風俗常にかさつなり。蒲生・鳥居の者ども門内へこみ
 入るに於ては、吾が士ども無禮を咎めて事の破も有るべきなり。汝兩人門内に在りて理を盡すべし。

それとも聞き入れずばかけ來りて告げ知らせよ。自害すべしといはれしに、半右衛門これは畏まり難き仰をも承りけるといひも果てぬに、正則我れ今日公儀に背き、かく成り果てし故、おのれさへあなどるやと大に怒られしに、半右衛門驚かず、新八に向ひて只今仰の如く、出羽・奥州の風俗のがさつなるは勿論なり。立ち向ひいかに理を云ひたりとも聞き入るべからず。其の時かけかへりなば追つ立てられ、逃げ入りたると同じ事にて、末の世までも恥辱なるべし。さらばこみ入る奴ばら腕の力のついかんほど切りあひてそれを注進なし、其の後殿はいかにもならせられんやと云ひけるに、新八ももとより同心に候ふと答へしに、正則悦んで打ちうなづき、二人がいふ所尤も至極なり。幾重にも穩に理を盡くし、承引せずば志のごとくせよといはれしかば、兩人畏まり承り候ふとて座を立ちて、門内に出でむかひけるに、事故なかりしかば正則信州に赴かれけりとぞ。

四〇九 正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事

正則常に物あらく、人を誅する事を好めると世の人といひあへり。或時近習の士少しの咎ありて城内の櫓に押しこめ、食物をあたへず餓死せしめんといはれしに、其の士の恩を受けたりし茶道坊主

罪なくてかゝる有様をいたみ、潜に夜焼飯を携へ行きたり。彼の士われは罪ある故に斯く成りたり。汝只今の振舞を殿開し召されなば、われよりも罪重からん。又飯を喰ひたりとて命助かるべきにあらざれば、とく歸れといひしに、茶道云ひけるは、同じ罪に行はるるとも後悔なし。われ先に既に殺さるべき事のありしに、君の救にて一度たゞかり候ひぬ。恩をうけて報せざるは人にあらず。こなたも又よわけなる心おはして、吾が志を空しくし給ふ事こそ口惜しけれといへば、彼の士悦んで、さらばとて是れを食す。夜ごとにかくの如くしたりけり。程經て死したるならんとて、正則矢倉に行かれしに顔色少しも衰へず。正則さては飯を送りたる者あらんと怒られしに、茶道來り某こそ送りたれと申す。正則はたとにらみて、おのれ何故にかくしたるや、頭三ツに切りわりなんと膝立て直されし時、茶道少もさわがず、我れ昔罪を得て既に水せめにあひて殺さるべかりしに、彼の人の申しひらきたりしゆゑ、今日まで思ひがけず命存へ候ひき。其の恩を報ぜん爲毎夜しのびて飯をほこび候ふといふ。正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感するにあまれり。かくこそあるべけれ。彼の士をもゆるすべしとて其のまゝ矢倉の戸をひらきて罪を宥め茶道をも深く賞せられけり。されば暴悪の人と世に稱しければ、かゝる義に感ずる事の切なる故に、士の思ひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身をすて奉公しける

もげに故ある事にこそ。

四一〇 井伊直孝直諫の事

台徳院殿諸大名をめし、土井大炊頭利勝をもて來年嗣君に世を譲らせ給ふべき旨仰せ出だされしかば、皆祝し奉りたる處に、井伊直孝默然として有りしかば、利勝かたへに招き、いかなる事ぞと問ふに、天下亂の本たりと存すれば目出度事とは存じもよらずと申す。子細はいかにと問ふ。されば其の事に候ふ。大阪の亂幾程なく江戸石壁のいなみ日光の土木、天下の諸大名以外の外に困窮せり。又世を譲らせ給ひなば、諸大名献上奉る物に費多く、將軍宣不の饗禮を取り行ふべし、愈々困窮に及び下を削ぎ民を苦しむるのみ更にせんかたならん。是れ民のなげき亂のもとと存するなりと申されしかば、利勝尤もなり。此の旨有りのまゝに申すべしとて直孝を御次の間にともなひ、利勝御前に參りて、しかじかのよし申したりければ、即ち直孝を御前に召され、汝が申す所尤もなり。されども既に仰せ出だされれば易へ難し。猶是れより憚る所なく申せと仰せられしかば、直孝臣が申す旨然るべからず、思し召し候ふにより聞し召し入れられず候ふか、臣が言尤もと思し召しなば、御用ゐなから

ん事仰とも覺え候はずと申されけるに、暫く御詞なかりければ、利勝臣既に年老いぬ。壯年の者直言を申し候ふ事治世長久のもとに候ふ。明日諸大名を召し掃部頭申す旨尤もなるにより相とどめらるべきよしを仰せ有りて、然るべう候ふものと申されければ、台徳院殿則ち諫に従はせ給ひけり。其の時直孝臣が申す旨用ゐさせ給ひ、辱き旨謝し奉りて退出せられけり。台徳院殿の諫に従はせ給ひし事、直孝の直言美を盡くせりと人申しけり。

〔又一説に、台徳院殿世上太平といへども嗣君いまだ幼穉におはします、總郭を築かるべしと仰せ出だされしに、直孝一人とかくの詞なかりしかば、各々退出の後いかなる故ぞと問はせ給ふに、仰の旨心得難く候ふ。嗣君幼穉におはしませども、治平の時なれば一郭滅せられ候てこそ、人安堵致すべけれ。嗣君幼穉により郭を増されなば、人々危ぶむ心を生ぜん事必然なり。且つ御上京も候て過分の財用を費し、五三年も儉約ならざれば償ひ難く有るべきに、又費を多くなしたらんには、郭は堅固に成り候ふとも武備有るまじく候ふと申されければ、翌日諸大名を召し、掃部頭申す旨尤もなるにより、昨日の仰せ出だされば相駭めらるるのよしを仰せ出だされたりといへり。孰れか是なる事をしらす。〕

四一一 明の鄭芝龍援兵を乞ふ事 並稻葉正勝諫言の事

大猷院殿の御時國姓爺日本に援兵を乞ひければ、諸長臣を御前に召し出だされ、是れを捨て置かれ
なば日本の恥なり。援兵を遣はさるべき旨仰せられしに、小事ならざる故に各、兎角を申し出てかれ
られし處に、稻葉丹後守正勝援兵の事然るべからざる旨再三申されければ、色を變じ内に入らせ給ひ
けり。明日又召し出だされ、昨日申しし處思し召にかなはざりしが、つくづく御思慮有りに申す處
理なり。援兵に及ぶまじき由仰せ出だされたり。

〔明の末鄭芝龍といふもの萬曆年中日本に來り、肥前松浦の平戸にあり。又長崎にもありて、崇貞
年中に明帝より召し返されけり。平戸に在りし時妻とりて子を生む。其の子を鄭彩といふ。芝龍
官を得て長崎の奉行に告げて妻子を迎ふ。公に申して許されを蒙りたり。明没びし時大祖の苗裔
を福州に建てて元を隆武と號す。清と度々戦ひに及んで勝難き故に援兵を乞ひたりしなり。明
帝朱姓を賜ひければ國姓と稱し、爺は老成を尊むの詞なり。芝龍が事明末の書に詳にしるせり。〕

四一二 大納言頼宣卿援兵の總大將を頼ひ給ひし事

正保元年は明の崇禎十七年なり。明朝亂れ陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり、一揆を起し北
京へ攻め入り、明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡をささげて加勢を乞ひける
に依りて、紀伊大納言頼宣卿異國より加勢を頼み申す事、日本の武威四海にかゞやくとも申すべし。
諸浪人を集め候ひなんには數十萬も候ふべし。それに西國中國の大名小名差し加へられ然るべからん。
拙者に總大將仰せ付けられ候はば何事の悦か是れに過ぎん。異國に攻め入りおもふまゝに日本の武勇
を見せ候ふべしと願ひ奉り給ひけれども、御加勢の事やみければ、兼ねて仕へ申しし武功の物しども、
清兵と一軍して老後の思ひ出とせんといさみける人々、殘多き事よといひあひけりとかや。

四一三 酒井忠勝直言の事

大猷院殿の御時晴の猿樂有らんとする前夜に、大雨にて御前に見えわたるべき塀の白土壞れしに、
〔一説に、朝鮮來聘使者出づべき夜、櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたりともいへり。〕

いかげんと人々云ひける處に、松平伊豆守信綱白き奉書の帛を以てはらせられしかば、みな其の地智のほごを感じあひける處に、酒井讃岐守忠勝一説土井大炊頭伊豆守に向ひて、讃岐守が存する處は、實人にはならざる事はならざると知らせ奉るぞよき。仰せ出だされんに何事も仰のまゝならんと思し召されんに、驕奢をみらびき奉るにてこそあれ。其の時はいかがし給はんといはれしに、信綱ふかく心服せられけり。

四一四 墨田川に橋を掛けられし事

江戸の墨田河に橋なかりしを酒井忠勝申して橋を掛けられけり。要害の爲あしかりなんと云ふ人あり。忠勝天下を治むるに人を以て要害とすべし。人苦しんで何の益か有るべき。人を苦しめて要害とせば、江戸は一日ももちこたへ難しと答へられけり。

四一五 板倉重宗京都所司代的事 附板倉勝重器量の事

板倉周防守重宗卿の所司代たりしが、江戸に下りける時松平信綱對面し、公方にも政事に御心を盡

され候ふ。京都の事も委細に聞し召したく候ふ。是れより後は同職にさし越され候ふ書狀、京都の事詳に記され候へといひしに、周防守百二十里の行程隔たりたる事、何程に聰明におはしますとも、及びごしなる事は得知ろし召されじ。其の故に周防守を京に指し置かれ候ふ事なれば、申し上ぐるに及ばすと答へたるを、さては周防守は致し身のなりと感ぜさせ給ひけり。

〔重宗の父伊賀守勝重といふ。初は四郎右衛門とて祿五百石なりしに、京都の所司代を仰せ出だされ二萬石賜はりけり。是れば本多正信が薦め申しし故となり。勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ、重職の任を身にうけ候ふ事に候ふ程に、歸りて妻なるものに相談りて、若し同心せずば職を固辭申し上ぐべきよし申しけるに、正信打ちうなづく。勝重家に歸りて、かゝる仰を奉りしなり、重き任なれば内縁を頼み訴する者あるべし。公私に付きて口をそへられずば、仰を長まり奉らん。もし少しにてもいろはれんとならば、只今其のよし申して京には赴き候はじといはれければ、こはいかなる事をのたまふぞ、仰をかしまらせ給へ。女の身いかで公の御事にたづさはり申すべきといはれしかば、さらばとて出づる時はかまの腰をぬらしてきられしを、それはいかにといはれければ、勝重さればよくあるべしと思ひしなりとて重々にいましめて、後仰を奉りたりと

世にはいひ傳へたり。勝重尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長職和尚が弟子にて長祐といひしが、還俗して四郎右衛門といひけり。勝重嫡男を重宗次男を重昌といふ。二人とも江戸にあり。或時大猷院殿訴訟をひとつ巧に構へさせ給ひ、二人をめて判断せよと仰有りけり。重昌仰を奉り、理非分明に決定して退出す。重宗や、久しく思慮して後、重ねて決断の旨を申し上げ候はばやとて退出し、二三日過ぎて後御前に参り判断の旨を申したるに、弟の重昌が申したるに相同じ。人々兄にまさりたる重昌なりとほめあへり。其の後勝重京より江戸に下りし時、大猷院殿かの訴の判断の事詳に示させ給ひ、重昌が才器を御感あり。勝重承り内膳正はわか氣にて思慮なく候ふ。周防守は國家の政事を取り候ふとも其の任に叶ふべし。其の故は訴を判断する事は政事の一つの條目にて候ふ。政事は至つて重き事にて一言を以て天下の利害にかかり候ふ。苟にきはめ申すべき事にはあらず候ふ。政事は大事とくりかへし思慮いたし候へば、重宗は政事とり候ふとも仕損ずまじく候ふ。只打ち見たる所を以て己が智慧を人に見せんと存ずる所は、重昌がわか氣と申すものにて思慮なく候ふと申しければ、御感淺からざりきとなり。其の後伊賀守年老いたり。所司代の職に任ずべき才をえらび候へ。汝が替にせばやと仰せありしに、勝重子にて候ふ周防守

所司代の任にかなひ候ふよし申したりければ、内々其のごとく思し召されしと仰有りけり。周防守は斯くともしらで御小姓にてありしに、父伊賀守がかはり仰せ出だされけり。周防守上京せられしに、伊賀守衣服をあらため、左右の職に居る人を並べ置き、記録をも悉く取り出だし、周防守を上座にまれき、講んで江戸辯論の事を窺ひ、今日より所司代なれば萬事引渡し候ふといふ。周防守只今まで御側に仕へ奉り、世の有様ゆめゆめ存じ候はず。仰にも父を見ならひ候へとの事なりと申されしに、伊賀守いやや其の職に居るべき者なりと掴み出だされし故、かゝる直任の仰は奉りたりと覺ゆるなり。人の心は面の同じからざるが如し。我れに付きそひ居たればとて、我れにはなるる時ば自ら決断するより外の事なし。汝が不才を隠しなば、五畿内はいふにや及ぶ。西國までも禍有るべし。ちつともかざる事有るべからず。只不才をあらはすを第一とすべし。不才をしるしめされなば、其の任に當るべき人を擇ばれて仰せ付けらるべし。更に恥辱にあらず。今日より所司代の職に居るべしといはれしかば、周防守其の詞に隨はれぬ。勝重は町家をかり置きたるがそこに引き移り基を打ちて口ずさみに、今度の所司はきびしいものよ。われをあひしらひたるが如くならば、必ず罪さられなんとて其を打つてありきとぞ。」

四一六 重宗訴訟を聞かれし心得の事

周防守重宗京都の職に在ること凡そ三十餘年。人敬ふ事神明の如く、愛する事父母に似たり。父子誠まことに同じ名臣めいしんとぞ聞えし。されば重宗は寵恩ちゆうおんも殊ことに厚く從四位上じゆゑにのほり、官左近衛少將くわんざいこんのせうしやうにすまれけり。重宗職に任じて後毎日決斷所けつだんじよに出づる時、西面の廊下さいめんのろうかにして遙ほるかに伏し拜をらむ事有りて、決斷所に出で、此の所に茶磨ちやま一つすゑ置き、あかり障子しやうじ引きたてて其の内に座し、手づから茶ちやひきてちやを聞きく。人皆不審ふしんしあへりけるに、遙ほるかに年經ねんねいて後問ふ人ありしに重宗答へて、先づ決斷所けつだんじよに出づる時、西面の廊下ろうかにて遙ほるかに拜する事は、愛宕山の神を拜するなり。多くの神の中殊ことに愛宕は靈驗れいげん新あらたなると聞きし程に、所願じよくわんありてかくは拜しぬ。其の所願じよくわんは今日重宗が訴うたをことわらん、心の及およぶは私わたくしの事あらじ。若しあやまりて私わたくしの事あらば忽ち命をめされ候へ。年頃深く頼たのみ奉るうへは、少しも私心有らんには世にながらへさせ給ふなと、毎日祈誓いのちかざりするにて候ふ。又訴うたをわかつ事の明かならぬは、我が心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動かざらんやうにこそあらめど、重宗それまでの事は及び難く、唯心の動くと静なるとを試みるには茶を挽ひきてしる。心定まりて静しづかなる時

は手もそれに應こたじて磨あのめぐる事平なかにして、きしられておつる所の茶いかにも細やかなり。茶のこまやかに落つる時にいたりて、我が心も動かぬと知り、其の後やうやく訴をわかつ。又明障子あかりしやうじを隔へて訴を聞く事は、凡そ人の顔かたち、打ち視るうちみよりにくさげなるとあはれまじきとあり、誠まことしき有り、かだましきあり。其の品多しなほほくしていくらと云ふ數をしらず。見る所の誠まことしきと思ふ人のいふ事は眞實まことときかれ、かだましきと見ゆる人のなす事は何事もみな偽いつはりと見ゆ。あはれまじき人の訟うたは枉まがげられたる所有るかと思はれ、にくさげなる人の争あそひはひが事ならんと覺ゆ。是等の類は目に見る所に心のうつされて、彼の詞ことばを出ださぬうちにはやわが心の中に邪よこしまならん、正しからん、よからん、直ちかならんとおもひ定むる程に、訴の詞に及びては、我がおもふ方に聞きなす事多し。訴のなるに至りてはあはれまじきに憎むべきあり、にくさげなるに憐あはれなるあり、誠まことしきに詐いつはり有り。此のたぐひ殊ことに多し。人の心の測はかりがたきかたちを以て定めん事叶ふべからず。古の訴訟そしやうを聞くには色を以てすといへども、それは重宗が及ぶべきにあらず。又さらぬだに、訴の庭にわに出でんにはおそろしかるべきに、まして生殺せいさつを司つかさどれる人を見ては、いよせくて自らいふべき事をも得いはで、罪にも科なにもあふ人あるかと思へば、所詮しよせん互たがひに面を見も見られもせぬにしかじと思ひて、かくは座をへだつるにてこそあれと答

へられきとぞ。

四一七 板倉重矩の事

板倉内膳正重矩のいはく、

〔重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死ありし内膳正の子周防守重宗の從子なり。膳にて長
 卑く、以の外見苦しき人なりしかども、有徳賢才のきこえありて、寛文二年祿二萬石増し賜はり
 大阪の御城代たり。寛文五年大雨にて、雷天主に落ちて火出でて焼け上りしかば、大阪のさわぎ
 大かたならず。萬治三年雷火ありし時、鹽硝の蔵に火入りて死人多かりし事を聞きたりし故なり。
 内膳正町奉行彦坂登岐守・石丸石見守兩人に、鹽硝は昔藏の中へ入れたる由ふれさせられしかば
 騒ぎ静まりけるとぞ。内膳正豫め警備の備かたく下知し置かれし故、尼ヶ崎の青山大膳亮、人
 數をひきゐる大阪に來り、其の備を見く深く感ぜらる。此の旨江戸へ聞えしかば、御書を賜はり稱
 美ありければ、内膳正即ち家士を集め、是れ皆汝等が功なりと譲られきとぞ。同年の冬江戸にめ
 し一倍の祿を増し賜はり、執政の職を仰せ蒙られけり。同八年京都所司代牧野佐渡守正親のかは

り仰せ出さるる内、しばし内膳正をもつて京都の事を司らしめ給ふ。上京の後参内の事あり。
 此の禮儀御簾を半巻き上げらるる例なれども、内膳正恐懼すべき事なれど、天顔に咫尺し奉るの
 名ありて其の實なし。御簾を高く巻き上げられ候へと奏聞ありしに、尤もなりとの勅にて御すだ
 れを高く捲き上げらるる事、内膳正一人なりきとぞ。其の後又一萬石増し賜はり、下野の烏山の
 城主たり。重矩若きより詩歌に心をいせ、學問を嗜み、熊澤伯繼が門人にて嘉言善行多かりき。
 京都にて加茂川洪水の時、白川より加茂川四條の間へ堤をつかせ、また鞍馬の往來市原といふ所
 に水流れ、往來の民なりしかば、田地をもとめ川筋を除き、山路を開かれしかば、内膳死後に
 及びて、此の地の百姓も仁徳を慕ひ、如意谷に内膳正の位牌を設け跡をとぶらひきとなり。』
 財寶を奪ひとる者をむかしより盗と名づく。我れつらつらおもふに大名に盗おほし。下士民の善あ
 るをあげずしてすつるは、是れ人の善を盗むにあらずや。親族朋友にも善あるを稱せずして過ぐるは
 是れも人の善を盗むなり。中にも君たる人は下の善をあぐべき職に在り。是れ天より命せられたる任
 なり。人の善を盗みて天命の任をかかは、盗の大なるものなり。われもし人の善を盗まんやと是れ
 のみ心を盡くすよと語られける。又伯父周防守が語りしに、人の生質さまざまある中に、見たる處の

にくき者あり、愛すべき人あり、此のにくき人を見ては、善言もあしさまに聞きなすぞかし。況んや直言をいへばいよいよ憎むものなり。又愛すべき人のいふことは、よからぬ事もよく聞きなすものなり。これ心得べき事なりと、父なりし伊賀守常に戒められしは格言なりと。又語られしは儉と吝と相似て其の本大に異なり。儉は事の費をいとひて奢侈ならず、用ゆるべき事に財を用ゆるをいふ。吝は是非の別なく一向に物を惜しむなり。又戒められしは、わが心に叶ひたる者のいふことは何事もよく聞え、行路のよからぬも心づかず、又我が事を憚る所なく直言する人は、道理の至極せるを外になし、其の詞の無禮を罪とす。是れ皆事を過つものとなりと、其の前一萬石の中世だ貧しかりしに、新に儉約の法を定め、先づ自らの事を第一に守られし時の歌、

もとめなき心もことおのづから任せて過ぐる身こそ安けれ

四一八 毛利勝永大坂に入る事

關ヶ原亂の後、毛利勝永は土佐へ流罪せられしに、大坂に事起ると聞き、或る夜妻にいひけるは、我れ罪ありてかゝる所に居住し、汝にも斯くうき事を見する事ぞとよ。されども我れ志

あり詞にあらはしがたしと語りければ、妻のいはく、世の變はいかなる人もはかるべからず。かく成りてなりとも更に悲しむべきにあらず。妻は夫に従ふ道とこそ聞きて候へ。其の御志を承らばやといふ。勝永は我れ武名を傳へて數世に及びぬるに、かく沈み果てなん事口惜しき事なり。命を秀頼公に奉りてんと想へども、我れ愛を忍び出でなば憂きがうへにも猶うき事や、御身の上に添ふらんと涙を落しけるに、妻つくづくと聞きて打ち笑ひ、月矢取の妻となりていかでかかゝる事を恐れんや。はや此の曉船に乗りて武名を肩くし給へ。君のため家の悦び何事かこれにしかん。わらはが事な思ひ給ひそ。いかにもなり給ひたらば、此の島の波に沈み候ふべし。運命めでたく頓て逢ひ奉らむ。急ぎ給へといひければ、勝永悦んで小舟に取り乗り、大坂に至り籠城しけり。其の後山内對島守より豊前が妻を固くいましめおき、かくと告げられしかば、東照宮聞て召し、勇士たる者の行感賞すべきことなり。豊前が妻罪する事有るべからずと懇に仰有りければ、豊前が妻大坂の城中に入りけりとぞ。

「一脱に」父豊岐守勝信も土州に流されしが病死しぬ。勝永土州に在りて年月を送りけるが、時々其の従士宮田甚三郎を大坂にやりて、其の従弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問はせけり

り。かゝる所に大野より秀頼兵を起すの旨告げやりしかば、勝永土佐守忠義を欺き、關東へ忠な致すべし。先非を改め舊領に復せん志なりといひて、土州より船に乘らんとしけるが、甚三郎を呼びて、我れ大阪に著きたらば、嫡子式部次男藤兵衛共山内家より殺害すべし、如何すべきといひしかば、宮田夜に入りて陸に上り、式部が乳母の子小原文左衛門と相謀り、難なく式部藤兵衛をつれて舟に乗りければ、勝永悦んで船を出だし、ともに打ちつれて大阪に至れりといへり。

四一九 池田忠繼朝臣士を懐けられし事

池田左衛門督は東照宮の御女北條氏直の北の方にておはしけるが、北條家亡びて後國清公に再嫁ありて生まれ給へりしかば、東照宮の御外孫なり。大阪冬陣には十六才なり。一旦利平に成りて師を返されし後、軍に従ひし士ども寄り集りて物語する時、一人の云ふ、若き殿の此の度の軍に、日比と大に違ひて賭事の下知兎角いはん詞もなし。中にも今まで詞に出ださぬ事一ツあり。仕寄場にて寒氣はげしきに、さぞ苦勞ならんとて、小き手桶に酒を入れて給はり、又綿入の肌着を賜はり、此の事ゆめゆめ人にな泄らしそと仰せられし志の忝さ忘れがたけれど、語るなと仰せありし故今迄は泄らさざり

きといへば、一屋十四人手を打ちてわれわれも其の通りなりき。我れ一人のあひしらひなりと思ひしに、皆斯くの如きはためしすくなき事なりと感しあひけりとぞ。

四二〇 芳賀内藏允武者振の事

大阪冬の城攻に興國公の攻口は天満橋の邊なりしに、先陣の士大將波多野掃部・須加左京竹把を付くるに、兵少くして夜にならばいかにも調ひがたき候ふ。日のうちとならば兵を増し給はり候へといひしかば、其の様を見て來れとて芳賀内藏允先陣に行く。芳賀は甚染の羽織著たり。先陣の兵も家屋の焼跡十蔵の陸に控へ居て、橋より上にするしの株の候ふ、見られよといへば、芳賀すゝみ行く。芳賀近頃籠せらるる者ぞ武者ぶり見よといひあへり。芳賀馬よりおりて徐に川岸を歩むを、城中より打ち出だす鐵砲川水にひびきわたれり。芳賀ちつともさわがず足の數をかぞへて歸り、いかにも兵少くてはかなひ候ふまじというて旗本に歸る。この芳賀はもと祐筆なりしが、岐阜落城の日國清公勝軍の書を芳賀に書かせられし時、籠に將机に倚りておはす。芳賀公の前に跪いて在りしに、城中の燒き立つる火藥硝の庫に入りて、其の音山嶽の崩るるがごとく、敵押し寄るかと思ひしに、芳賀が

筆把りて書きし様、少しも疎く體なかりしかば、事によせて試みらるるに器量大なりければ、頼に用
かられて祿二千石賜はり後國政を執りしに、度々直言を申し諫め争ひて、ことよく治まりけり。

四二一 佐竹勢今福口を攻むる事並杉原常陸武功の事

大阪冬陣に佐竹義宣今福口を攻むる。士大将濹井内膳先陣して柵の木を打ち破る。佐竹に付けられ
し軍の目付安藤治右衛門・屋代越中守先がけして、安藤さわやかに物具せしを、柵の中より鐵砲にて
兜の上を打ちかする。安藤折りしきたれば頼に打ちかけて立ち上り得ず。屋代父子・伊藤右馬允馳け
來り、いかに安藤、日比は年若しとて自慢せしにはたがへりといひて柵を打ち破る。木村長門守重
成城より助け來り、柵を隔ててにらみ合ひたり。木村は黒き平袖の羽織を着し、柵に取り付きてあは
れ鎗にてたゞき崩さばやといへども、鐵砲の足輕ちり亂れて來らざりしに、井上忠兵衛といふ者、鐵
砲持たせ馳せ來りければ、あの鳥毛の羽織著たる敵はものしよ。打ち落し候へと下知して、柵の木に
鐵砲をもたせて濹井が胸板を打ち通す。木村嘆いてがかり寄手を追つ崩す。平塚五郎兵衛濹井が尻を
ふみ越えしを、木村が従者首を取らんとすれば、平塚其のひえたる首何にせんといひて敵を追つたつ

る。戦官使者を上杉景勝に遣はして加勢を乞はれしかば、杉原陸常横合に兵を出だす。杉原は大阪に
師を出だす時、吾が物具以外の外古くて、日本櫓の弓取に笑はるべしとて、猿樂の半臂を用意せしが、
其の日物具の上に着て魔の緒を腰に結びてさげ、七百計をひきわて川の中の洲に進みしかども、水深
かりしかば、玉藥を惜しまずこみかへこみかへ城中を打ちしります。軍兵を下知するに進退思ひのま
まなり。杉原が士卒を下知する有様を、諸松の陣なりを静めて見物す。響へば馴れたる雀の子を呼ぶ
に似たりといひあへり。東照宮遙に杉原が出立を御覽じ、上杉が家は古風なるゆゑ、甲直垂を着たる
なるべしと仰せ有りしは、半臂を遠く御覽有りての事なり。其の後上杉家の士大将に御感状を賜はる。
杉原御前にて講んで上を包みたるなとき散み終はり、始の如く包み、本多正信の方を見やりて感じ仰
け候ふ詞、殊更に悉く覺え候。景勝武功を賞せさせ給ふゆゑに陪臣までかゝる仰を承る事、謙信弓籠
の遺風を天下にあぐる所に候ふといひて退出したりけり。

四二二 上杉景勝志貴野口合戦の事

志貴野にて上杉景勝先陣柵をやぶり、井上五郎左衛門を始として敵百計打ち取り大和川まで攻め入

る時、景勝直江を呼んで城兵援け来るべし。先陣はいかにと問ふ。直江先陣は士卒少く候共安田上
 總介、二陣は隅田大炊介長則に定め候ふと申す。いやいや隅田を先陣にして、二陣を安田に繰りか
 へよと下知せらる。是激の道なるべし。かくて安田は先陣を二陣にくりかへられ、口惜しき事なりと
 齒がみをなし、隅田が軍兵は安田に踰えて功名せんと勇氣陪しけり。廿六日曙に隅
 田押し寄せ多切豊後守眞先かけて首を得、北條清右衛門等も討死し、遂に打ち勝つて井上五郎左衛門
 を討ち取り、柵二重破りたりけるな、城中より大軍我れ先にとはせ向ひ、大野修理治長・木村主計頭
 宗重・渡邊内藏助・竹田永翁等競ひかゝる。隅田は百挺の鐵砲を一の木戸口に立て固め打ちたてさせ
 けれども、城中よりの加勢眞黒に成つて切つてかゝるを半時計さへて戦ひ、鐵砲の物主石坂新左衛
 門二足も引かず討たれ、終におし立てられぬ。二陣の安田は兼ねてよりかたへに陣をおし出しし故、
 隅田が士卒景勝の旗本前へ崩れかゝる。景勝三陣の士大將杉原常陸親憲金の輪拔の立物打つたる兜な
 著、金の輪の馬印を取つて、大將の仰で隅田人數兩方へわかれ候へと呼ばはりて、馬じるしを打ちふ
 りて下知しければ、隅田が兵忽ち兩方へわかれて引き取りけり。杉原敵をおもふ様に近々と引き受け
 て、前に立てならべたる鐵砲を雨の降ることく打ちかけしかば、安田二町あまり脇にひかへたるが、

横合に鎗を入る。隅田も忽ちもり返し、城兵を追つ崩す。隅田は初に討ち負けたるを口惜しくおもひ
 て、従者九人にて敵の中に紛れ入り、首二ツ取つて歸る。景勝進んで押し詰めんと見えしかば、久世
 三四郎乗り來り、俄に城を攻め死傷多からん。後陣の堀尾山城守忠晴と入り代られよと仰せ候ふぞ
 といふ。景勝聞きもあへず弓取の先をあらそふ時一寸ましといふ事あり。今朝よりはげしく軍して取
 り敷きたる所をい人に譲りて退く事や候ふとて少しも動かさず。丹羽長重景勝の陣に行きて見れば、景
 勝將机に倚りて城中をばたと睨み、物具もせずして青竹を杖につき、左右に軍兵三百計鎗を横たへ跪
 きて、紺色に日の丸の旗毗の文字の旗二本に淺黄の扇の馬じるし押し立て、しづまりかへりて長重を
 見むきもせず。長重も勇將なるが、後に人に語りて景勝を譽められたり。

四二三 上杉家の士大將に御感狀を賜ふ事

東照宮志實野にて功名せし景勝の士大將に御感狀を賜はりしに、安田上總介は横鎗を入れて城兵を
 打ち破りし功大なりといへども、直江と不和なりし故に其の功上に達せず、御感狀賜はらざりしかば、
 其の後人に向つて此の度御感狀を拜受し給ひて目出たく候ふ。上總二人は申し立つる人なくて、さば

がりの武功むなしくなりて候ふ。されどもおとりしことは候はず。是れほどの武功に申し違ふるまで
もなし。且、殿の御爲に命を捨てて軍仕り候ふ。露ちりばかりも公方の爲にする事に候はず候へば、
是れより後、殿をこそ大事におもひ候へ。公方の御感状何條面目に存すべきやと語りしとぞ。

四二四 井伊直孝陣代の事

大坂の事起りし時井伊掃部頭直孝を召して、兄右近大夫直勝の陣代を仰せ出だされける。
〔直孝は直政の三男にて、母は松平周防守康親の従者の女なり。直孝六ツに成りし時母の方より直
政に選りけるを、百姓の許に置かれけるが、十三の時民家に、盗の入りてさわぐを聞きかけ出
でて、暗夜のことなるに盗山へ登りけるを追つかけて、高股を切つて落されけり。かくて人あま
た来りて、盗をば打ち殺しぬ。直政に申せば、寄せて、冬の事なるに北に向つたる座敷の雪の入
る處に跪かせて置かれたり。雪ひさを降りうづめどもちつとも動かず。直政悦んで呼び入れら
れ、犬の子をあたへられけり。十四の時直政病重くて死に及ぶ時、其の生ひまきやしるかりけん
磨に甲を添へてかたみにあたへらる。直孝は上州にて一萬石を賜はり、大番頭を命ぜらる。直政

の長子父の跡を嗣ぐといへども、多病にて公事勤勞しがたしといへり。]

直孝しばらく仰に任せず。まづ宿所に歸り、彦根の長臣を集め仰はしかじかなれども、各、我が下
知に従ふべくは陣代を勤むべし、しからずば仰を固辭し申すべしといへば、昔いかでか下知に背くべ
きといふを聞きて後、仰に任せて陣代仕り候ふべしとぞ申されける。井伊の家に兵庫といへる物しの
年老いたる有りしを直孝呼び出だし、汝日比軍術に長せりと聞く。相傳ふべき事やあると問はるるに、
兵庫年老い候うて今日をしらざる體、戰場に打ち出でざる事遺恨に候ふとて、懐より一巻の書を取
り出だし、大將たる人志を決断して狐疑なく下知あるべきかと問ふ。直孝聞きて教はいかにも我が思ふ
處に、他歧なく決断すべしと答へられければ、兵庫臣が年比思慮せし處只是れのみにて候ふ。兩端を
持して兵の道行はるべからず。外に申すべき言なしとて其の書を焚きけるとぞ。

〔元和元年の春、直政の領國直孝相嗣がるべき旨仰せ出ださる。安藤帶刀をもて再三辭し申せども
許されず。十八萬石を分ちて、直勝に三萬石直孝に十五萬石賜はりぬ。其の後五萬石増し與へられ、
台徳院殿・大猷院殿五萬石づつまし賜はり、中將に任ぜられけり。〕

四二五 本多伊豆守出陣聯句の事

越前忠直大阪に師を出た時、士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり。將机によりて聞き居りしが、勇將麾下無二弱卒といひしに、かたへより高祖帳中有二張良一といふを聞き、門出のめでたさよとて打ち出でけり。

四二六 東照宮御父子御陣替の事

大阪冬の軍に、東照宮は茶白山、台徳院殿は岡山に陣所をうつし替へらるゝ事あり。諸將も城近く陣を寄する時、若し騒ぐならば城より撃つて出づる事あらん。陣を整へしづまり候へと、五の字の御使番乗りめぐりて仰を傳へし處に、井伊直孝陣所を替ふると、鐵砲を押しならべ城中に打ちかけ、岡の聲をあげ只今城に攻め入らん體なりしかば、台徳院殿直孝兄が陣代となり、人そばえしけるよと怒らせ給ひ、本多正信を東照宮の陣に使を命ぜられけり。御前に参り未だ詞に出ださざる處に、直孝は父の子なり。けふ陣所を換ふる時味方を競はせんとて、鐵砲をうたせしよと仰せられければ、正信承

りかくまで思し召し召しの同じきと申すもあやしきほどに候ふ。直孝がふるまひ感じ思し召し、参りて其の由を申せと仰せ候ひきと申して出でにけり。

四二七 後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事

大阪にて城兵千波を燒きける時、後藤又兵衛備前勢必ずつくべし。若き人々待伏して功名あれといひければ、後藤が詞たがはじとて待伏しけるところに、敵つけ來らず。後藤が功名だてと嘲りけり。後藤積もときんはたがふ事あるものなり。備前勢付けざるは、花房助兵衛まだながらへて居るならんといふ。

〔按ずるに、此の時備前は池田左衛門督領せさせ給ひければ、花房が事を司るべきにあらず。若しや花房をもて付け給ひしか。そのいはねをしらず。〕

此の時戸川肥後守達安を始として烟まざれにつけんといひしに、花房聞きて、城中に後藤といふ功者あり。必ず兵を伏せ置きたるべしと止めて付けざりけり。烟消えて見れば、花房が云ひし如く果して敵待ちかけ居たり。其の後和平に及んで肥後守が弟彌左衛門後藤に對面し、様々の物語する時、千波の

事を云ひ出だし、備前勢の付けざるは如何にと問ふに、兩人のはかりし事更にたがはざりければ、人聞き傳へて稱しけり。花房助兵衛職之は、秀吉の心に忤ふ事ありて、佐竹が許に流され居けるに、東照宮御心を付けられ、花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預け置きしを、後に榊原康政養ひて飛驒守といふ。助兵衛老衰席上にも人に扶けらるゝほどなりしに、東照宮の仰にて大阪の軍にも従ひたり。乗物にて攻口に向ひ、急ならば吾が乗物を敵に向つてすてよ。爰を墓と思ひて出でたりとぞいひける。東照宮御打ち廻りの時、道のかたへに乗物を置き其の中に躑居したりしを、戸川肥後守かくと申ししかば、花房大事の時とおもひ、武を好む事老いぬれども忘はおとるはず、賊に大丈夫なりと仰せられけり。

卷の二十一

四二八 大阪にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事

大阪にて台徳院殿諸將の攻口を御打ちまはりありて、有馬豊氏が陣所にて井樓に上らせ給ふ時、御馬印を城中より見て火矢大銃を打ちかくる。井樓を下りさせ給へと申せども、聞かぬ體にてまします所に、水野日向守参りて物見と巡見とは別に仔細の候ふ。陣々悉く御覽あるべければ、一所にのみましますべき様なし。志貴野を御巡り然るべしと申せば、則ち井樓をおりさせ給ひけり。

四二九 東照宮志貴野御巡見の事

大阪にて東照宮志貴野を御打ち巡りあり。上杉の攻口にかからせ給ふ時、鐵砲をならべ立てたるが、一同に城に向けて打ちかけたり。大將巡見の時の故實なりといへり。景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を酒ぎ、きらびやかに掃除して、景勝、直江只一人打ち具して、平伏して御目見申したりければ、東照宮いかにみな骨折りたるぞと御言をかけられしに、童いさかひにて骨折り候ふ事もなき旨答へ申

されけりとぞ。

四三〇 小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事

眞田が丸を攻むる時小田切所左衛門、

〔一説に、嘉兵衛といふ。後齋伊豆といひ、又道仁といふ。武者修行して名高し。長久手にて直はだのはたらきあり。松川の軍にも武功あり。加賀利常に仕へて大阪の軍にも従へり。〕

城ぎはに近く寄せたるが鐵砲にあたり、其の玉をとり出だし脇に並びたる平野彌次右衛門に見せて打ち笑ひ、物語する體平生の如し。又玉一ツ額に中るを取り出だしたれば血流るゝに、兜は大事の物よ、此の兜は信玄公の許に有りしなりといひて、少しもひるみたる色なかりしとなり。平野も小田切と相ならびたる武者ふりを、敵味方ともに譽めあへり。平野が従者九右衛門といふ者矢面にたち、鐵砲額りに打ちかけしかば、かすり手十八まで負ひたる大剛のふるまひを、城中より高聲にて稱美して、姓名を承らんといふ。平野則ち五右衛門に吾が氏を譲りあたへしかば、五右衛門大音あげて平野彌次右衛門が下人五右衛門といふ者、是れまで付きたる褒美に、只今氏を譲られて平野五右衛門と申すなりと名乗りけるとぞ。

四三一 眞田が丸を攻めたる時の事

十二月四日雲深く眞田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻め寄せける事、軍令を背きたれば如何すべきと、台徳院殿仰せ有りしかば、先づ伺ひ奉り然るべからんとて木田正信東照宮の御陣に参りけり。東照宮いかに今朝は將軍にも悦びに有るべきよ。掃部頭堀原へ押し詰あ敵に威を示して、味方を勇めたるよと仰せ有りしかば、急ぎかへりてかくと申す。頓て御本陣に御出あり。其の道筋掃部頭陣を打ち過ぎさせ給へば、直孝出で迎ひたるに、睨みて通らせ給ひぬ。孕石備前にかくと告ぐれば、孕石聞きもあへず、其のごとく物に心得ざる大將は、此方よりもきつとにらみかへすが然るべく候ふといふ。程なくかへらせ給ふ時直孝出で迎ひければ、今朝の軍賞譽の御詞有りて打ち過ぎさせ給ふな、孕石聞きて合點ゆきたらんには其の筈の事なりといひけり。
〔はじめ陣を移しかふる時、井伊鐵砲をうたせし事ありし時、木多正信申しし事と相同じ。一事を二事に云ひ傳へたるなるべし。〕

四三二 塙圍右衛門阿波の陣へ夜討の事

大阪冬の陣に塙圍右衛門重之・阿波峰須賀の陣所に夜討せんとばかり、

〔圍右衛門は遠江横須賀の人なり。加藤嘉明に奉公して祿千石、足輕を預かりしに、關ヶ原の時嘉

明塙に下知してそびき來れといはれしに、塙行きて見るに、諸將皆陣々を整へてひかへ居たり。

君命とはいへども敵に後を見せん事口惜しく思ひ、種ヶ島の鐵砲を並べ散々に打ち立てて歸りけ

れば、嘉明汝は勇のみありて進退の理を辨へず。大將と爲りて士卒を下知する事は思ひもならず。

汝を遣はしたるは我が過なりといはれければ、塙敵弱ければ詮方なく、無理なる答を敵り候ふ

とて、夫れより怨をふくみ伊豫を出奔しける時、其の家の中に、

遂不_レ留_二江南野水_一高飛_二天地一_一閑鳴。といふ二句を大文字にて書きたり。嘉明怒りて

塙が行先の奉公をかまはれしかば、塙所々にて落ちぶれ、後には京の妙心寺大龍和尚の許に居て

僧となり。名を鐵牛といふ。けさの上に刀を横たへ鉢を招く。人或はにくみ或は誹りけるが、遂

に秀頼にまねかれたり。〕

年十六歳已上、五十已下の士八十人をすぐり出だす。従者各一人と定めたり。塙と御宿越前と門口

に鎧を入りまじへて、一人づつしづかに出だしけるが、鎧を取るとて従者をよびさわがしければ、塙

怒りて刀にてせよ、何鎧とる事やある。首な取りそ。敵の旗を取るとして武器を奪ひとれと下知し、

どつと押し寄せたり。峰須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を着、兜ばかり著て馳せ合はせけるを、木

村善右衛門突き伏せしに、稲田修理透間なく走り來り、木村と突き合ひ奇手馳け集まり防ぎ戦ふ。米

田監物は池田左衛門督の陣所を押へ居しが、これもかけ來りなめて攻め入りしかば、奇手おひおひ

にかけ集まりしかば引き返す。生駒又右衛門首とりて大野主馬が許に持たせやり、猶進んで中村が倒

れたるを見て、首をとらんとする所を、修理が子九郎兵衛十五才なりしが生駒を討ち取りたり。

〔此の夜討の前峰須賀の士大將樋口内藏助今夜々討に入るべしといふ。若士どもいかゞして見定

めたるやとさしやく所に、中村右近餅を焼きて振る廻はんとて、内藏助をかたへに呼び入れ、何

とて夜討有るべきかと問ふ。内藏助さればとよ、城の橋残らず焼き落したるに、本町口の橋はか

り焼かざるは夜討すべき爲なり。今日狭間より外をのぞき見る體見ゆるゆゑ、夜討入るべしと答

ふ。皆さあらんといふ。隣の陣の小屋稲田修理に餅をふるまはんと云ひ遣はす。修理其のまゝ來

る。道はまはるなれば七八十間もあるべきに、とく來られ候ふといへば、修理間のしきりの板ある所に藪をこみおきぬ。それをはづして來りたりと答ふ、果して其の夜半夜討入りたり。右近先に出づる。修理おしつゞき出でたり。右近は兜ばかり著たるに、從者物具を持ち來りて著せたりともいへり。右近刀をふり廻し敵の鎧を切り拂ふ。修理大音あげて右近とともにはたらき、右近は鎧七八本にて突き伏せたり。といふ説もあり。右近が子若狭は阿波の留守に残し置かれしに、其の背に右近修理に向ひて、若狭此の度戰場に出でざる事を口惜しく思ひ、度々來るべき旨いひおこせしを、軍法を破る罪をおそれ呼びよせずと語る。修理尤もにこそあれ。いひやりてとく來られよと告ぐべしといふ。そこにてとく若狭は陣屋近きあたりに來りてかくれ居しかば、よび入れて其の討手に逢ひたり。右近父は次郎左衛門とて信長の屬從阿波守につけられて、祿于石士七人添へられけるとぞ。

塙はかれて支度して夜討の大將塙團右衛門と書きたる木札を道々に撒かせけり。和平の後今福口の南に、長二尺あまりの木に塙團右衛門と書きて建てたりしを、人々あやしみ問ふに、塙加藤嘉明我れにくみさがし出だして、誅せんといはれしと聞くゆゑ討手を待つといへり。塙が好あふ面々あまた訪

ひ來りけるに、水野勝成の士黒川三郎右衛門尋れ來りしかば、過ぎし昔の交りを思ひ出だして來られしこそ悦びなれ。林半右衛門は日比親しみ深かりき。いかにして一度の音づれもせぬにやいぶかしきといひければ、黒川聞きて林は池田の家に奉行して今天満橋の陣所に在り。かくと尋ねて見んとて歸りしが、林にしかじかといへば、林さればよ我れ塙と相約せしは、たとへ大國を領すとも手づから鎧を提げ、思ふまゝに軍せずば男子にあらじ。といひつるに、塙夜討せし時橋上に將札に腰かけ、馬じろし押し立て塵を取りたりと聞く。年四十八老いたりといふべきにもあらず。むかし相約せし詞に、たがひたれば使を遣はさざりきといふ。黒川又塙が方に行きかくと語りければ、塙林がいふこそ理なれ。されども我れ嘉明に士卒を下知せんことおもひもよらずと罵られし事口惜しく、一度塵をとり軍を下知して、嘉明にしらせばやと思ひて、其の夜も手づから槍を横たへ、突いてかゝりたくおもひしかどもさはせざりき。既に志を遂げたれば、重ねて軍のあらん時には、鎧刀の折るるほど戦はんといひきとかや。

四三三 木村畑田屋牧野四士武功の事

塙が夜討の時木村喜左衛門・細角大夫・田屋右馬助・牧野湖太四人鎗を合はせしに、田屋は薙刀なり。田屋をば鎗といふべからずといひしに、御宿越前聞きて鎗も薙刀も柄は櫛の木にて刃も同じ事の形かたちの少したがひたる故に、名は同じかられども、薙刀は短ければ、敵に近き事鎗より一等近し。鎗といはんは何の仔細しさいがあるべきと秀頼に申して、四人とも鎗を合はせたる感状を興へられたり。

四三四 木村重成感状を辭せし事

大野主馬しほのが組の士此の夜討に、功名あり。木村長門守を頼みて感状を賜はらん事を申す。木村聞きて上にもよく聞し召したれば、感状かんじやうにおいては定めて下し賜はるべし。但し感状拜領して誰れに披露せられんや。一本槍いっぽんやりの士ならば又他國の主君に奉公せん時の肩目かためにすべし。大野兄弟は大阪の長臣たる身、君と存亡ぞんぼうを共にすべき人の何のための感状をやといひしに、主馬しほの恥ぢて詞なかりけり。

四三五 稻田九郎兵衛武功を語りし事

東照宮後しんた稻田こがねに御感状を賜ふ。太平の後御旗本の人々、稻田に逢ひて大阪夜討の時の事語りし事

いひしに、九郎兵衛聞きて十五の年の事隔りてみな忘れたりとして、強ひて問へども一言もいはず。公方こうほうより賜はりたる感状の詞をとへども、存ぞんじ寄らざる賞しょうを得て深くをさめ置き、再び見たる事なければ、これも忘れたりとして語りし事なり。

四三六 細川三齋夜討評論の事

細川三齋さいさい病を養ふとて吉田に寓居せられける時、渡邊睡庵すいあん防ひて物がたりする時、大阪にて、塙が夜討せし時、峰須賀の士に感状を賜りたるは、如何なるゆゑにや、夜討は虚を見て、討つ事、古今ここん同じ。虚まよありて、討たれしに賞有しょうりしは、いぶかしくこそといふ。三齋聞きて夏なつ又事有るべきに、遠くとほ慮おもんばからせ給ひて、諸將の軍兵をすゝめはげまさんとの故なるべきにやといはれけり。

四三七 大阪城中軍評定の事

大阪和平破れて後秀頼軍評定の時、第一座に長曾我部、次に真田、其の次に毛利豊前守列坐せり。秀頼ひでより大野修理を以て、今度の合戦各所存しよぞんを問はれけり。真田先づ長曾我部に申され候へと辭し申け

るに、長曾我部聞きて真田殿ならで、かゝる圖を申し出さるべき人有りともおもはれず。先づ申され候へと答へけり。真田さらば申して見ん。去年の軍には城固く、兵糧又多かりき。日敷を過ぎば、必ず西國の内に、心をよする人もあるべきか、奇手の中に、心替も有るべしと、何れも存じ寄りたる處に、おもひの外に、和平に及んで、惣堀はうめられぬ、今度は守り遂ぐべき道有るべしとも存ぜず。只打ち出でて軍する程ならば、君御出馬候ひて、伏見の城を攻め落し、即ち御上洛候うて、洛外をば焼きはらひ、宇治勢田の橋を引き落し、所々の要害をかたく守り、まづ洛中の政を御沙汰有るべし。其の後勢ひによりて、合戦の謀候ふべし、親は申し納めぬ。若し御運盡きさせおはしまし候ふとも、御上洛にて、一度天下の主と號し奉り、洛中の御政務を執り行はれんにおいては、後代の名聞是れには過ぎ候ふまじといひしに、長曾我部を始として、みな然るべしと同心しけるに、修理秀頼公の御旗を出だされん事、かるがるしきに似たりとて、背はぬ色を見て、修理が母を人質に出だし置きぬ。いかなる所存にやと人々疑ひて、議決せずして、やみにけり。かゝる所に修理が母の人質に出し置きたるも、返し賜はりぬ。すてに關東の人數伏見に著くと聞えしかば、秀頼又諸大將を集めて、再び軍の評定に及びけるに、長曾我部、また最前の如く、真田にゆづりければ、真田駿河大御所の軍

だて常にはやりたると承り候ふに、少しも遠はず覺え候ふ。其の故に、昨今伏見へ着陣して、軍兵の疲なも休めず、はや茶臼山におし寄すべきと申す沙汰は、はやり過ぎたるに候はずや。伏見より大和路をおさば、行程十三里なり。彌疲れ候ふべし。明夜は、軍兵いかに存ずるとも、兜を枕にして、一れぶりせぬ事や候ふべき。一夜討すべき圖に當りたると存じ候ふ。左衛門佐罷り向つて一擧に勝負を決すべしと申しければ、後藤又兵衛、いかに此の謀然るべう存じ候ふ。されども、真田殿をもて、夜討の大將とせんに、萬に一つも討死あらん時、人々力を失ひ候はん。今度國々の諸浪人馳せ集まる事、偏に真田殿一人を目あてに仕り候ふ。夜討をばかく申す又兵衛罷り向ひ候ひなるといへば、真田、とかくわれ罷り向ふべしといふ。後藤は有無に後日の合戦大事なれば、真田殿残りといまられよと争論して、終に一決せて、やみにけるとなり。

四三八 堀直寄見切の事

大阪夏の軍に、水野日向守勝成に、大和口先陣の大將を命ぜらる。堀丹後守直寄、松倉豊後守重政大和口に向ふ。五月五日、夜ふけて、勝成敵るせ來ると見えて、松明多く見ゆ。懈るべからざるよし

を、諸將にいひ遣はす。丹後守聞きて、日向守は物になれたると聞きしに、功者ともおもはれず。寄せ来る敵何ぞ松明を多くともさんや。敵にはあらじ、といふ所に、日向守又使を以て、松明みな消えたり。敵にはあらじと、告げ知らせたれば、丹後守さては敵なり。何ごころもなく、火をともしつれたるが、功者ありて、消させたるならん、といはれしが、果して後藤又兵衛なりけり。

四三九 山本権兵衛功名の事

松倉豊後守重政、後藤又兵衛が陣を切り崩す。松倉が士山本権兵衛義安、十八歳にて鎧を合はせ、首をとりにけるひまに、鎧を敵にとられたり。其の鎧じるし、敵の中に見えしかば、今は是れまでなり、討死せん、と云ひすて、敵の中へ入りて、鎧を取り返し、其の鎧にて又敵を突き伏せ、首を取りて、歸りけり。

四四〇 毛利孫左衛門野村越中を詰る事

大阪冬の軍に、池田左衛門督の使番、毛利孫左衛門先陣に行きしに、村山越中毛利に向ひ、我れ今

朝より、敵近く居てつかれたり。指物を敵々鐵炮に打ち破られぬといふ。毛利我れ五百人の士の中より選んでほるを許されたり。汝に誰かされんや。汝竹把の外に出でずと覺ゆ。指物の先のみまけたるは、其の證なりといへば、村山答ふる詞なかりけり。

四四一 井伊木村挑戦重成討死井伊家諸士高名の事

井横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事

巷原助右衛門は井伊家の士大將にて軍奉行なり。大阪夏の軍に五月六日に道明寺に向ひて先陣たり。井伊家の士大將川手主水成次は去年の冬より直孝をうらむる故有りて、討死せんと思ひ定めたり。出でたちたる日、父子最後の盃したりとかや、金の鬘口の指物にて眞先にかけて出づる。山口伊豆守重信

〔山口修理亮重政嫡子伊豆守重政、二男長次郎弘澄は御堪氣を蒙り、蝨居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出でたり。〕

遠山甚次郎・懸阪彌五郎・満座七郎右衛門もおとらじとさきがけす。

〔二説に、内藤新十郎・佐久間藏人・山口左馬介三百計り、面もふらず切りかゝり、井伊が先陣を押し崩す。此の時井伊家の剛の者なるは鎧を合はするの士ありといへり。山口伊豆守は川崎和泉守を討ち取りたり。木村重成は田の中なる小高き所にひかへて下知しけるを、山口目にかけて、睥をつたひよりて、沼の有りけるにふみ入りて、畑の上なる重成と鎧を合はせ、山口爰にて討死しけるといへり。〕

木村長門守重成が一陣鎧の鉦を描へて待ちかけたれば、川手を突き伏せたり。菴原は場の上に折りしきて居たるが、川手が倒るゝ時腰にさしたる金の磨のひらめくを見、つと立ちあがりかゝり候へど下知する詞の下より、入田金十郎走り出で、眞先かけたる味方の斬り伏せられたる屍をふみ越えて大音あげ、一番鎧と名乗り鎧を入れけるを、敵三十人餘り取り巻きたるに、えいえいと呼ばはり面もふらずたゝきあひたるが取り巻かれ、廿一ヶ所甲冑を突きさかれ、既に討死すべき所に、戸塚左大夫を始として兜のしころをかたむけ、黒けむりを踏みたて、井伊が軍兵一同にぞつと押しかゝり、木村が陣を切り崩す。菴原は十文字の鎧をよこたへ、進んで木村を目にかけて立ち向へり。木村菴原を二槍まで突きたりしに、菴原鎧のしほ首を握り、珠數を手に懸けたるが、念佛をとなへて野猪のあれた

るが如く、木村が鎧の下に走り入りて突き伏せたり。安藤長三郎かけ來りて其の首給はらんやといふ。菴原聞きて大阪落城日あらし。敵の大將の首とる事易からじ。あたふるぞといへば、安藤木村が首を取り、菴原ほろかけたる武者を討ち取りて、其の首に母衣絹添へて奉る事軍法なり。大御所の賞験に備へんに母衣絹につままれ候へとて、母衣絹を安藤に與へしかば、菴原が従者母衣の出しにしたる白熊金のれぢ竹は菴原が許にとめけり。

〔二説に陣所に馬盜あるべしとかれて警めしに、安藤長三郎不敵者にて用心もせず馬を盜まれ、翌日の軍に井伊家の軍兵木村と戦ひける時おくれたり。敵敗北に及びて長三郎走り付きたるを、助右衛門見てあれに腰かけたるは能き敵なり。討ち取れといへば、長三郎動かすして死人の如くなる者討つて功名にあらずと答ふ。菴原しふれば長三郎あゆみより、詞をかくれども只首とれといひてのみ立ちあがらず。長三郎則ち突き伏せて首を取る。是れ木村討重成なり。長三郎を賞して五百石あたへらる。此の軍に千石の賞をあたへらるゝ者ありければ、長三郎憤りて立ち去りけり。將の首を取りたれども其の法を知らざる故賞少しと直孝語られきとかや。長三郎は安藤帶刀の従子なり。又後井伊の家に歸り仕へて千石の祿をあたへられけり。〕

川手・満座・山口は軍の場に死し、遠山は敵の首を取りて、菴原に見すると立ちながら死す。豊阪は小溝の中に倒れしかば口の中に暖まりありて、百姓の家にかけ入りたりしが息出でてたすかりぬ。みな敵に逢ふ事早かりしかども、軍奉行の菴原が下知なき以前ゆゑにわけがけとし、八田を一番鎗に定められ、東照宮御感状を賜はりけり。

〔金十郎は一番鎗を合はするのみならず。山口左馬介・山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討ち取りたりといへり。御感状に黄金御馬を添へて下さるともいへり。〕

木村が首を御前に出だすに、髪にたきしめし奇南香の薫せしかば御感あり。木村が兜は四方白にて鉄形の立物打ちたり。

〔安藤を伏見に召し青江の御脇差を賜はる。又一説に、台徳院殿長三郎に黄金二十枚時服三ッ賜はるといへり。〕

菴原が子の主税助北ぐる敵を追ひかけて組討しけるに、助右衛門はせよりて、いかに主税こゝろしづかにせよ、爰にて見物するといひけり。主税是れに力を得、脇差を抜いて刺し通し、よわる處に従者はしり來り、遂に其の首を取り、横地修理・西郷伊豫是れを見て、東照宮に主税が幼年の武功を稱し

申しけり。後に人々子の敵にくみたるに、援けざりしは如何にと問ひけるに、菴原たれも子はかはゆきものにて候ふとのみ答へけり。

〔直孝木村と軍する時中に堤あり。又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に、久貝因幡守・高安筑後使をもて敵と味方の中に堤の候ふ。是れをとらば味方勝ち申すべし。とく御旗本を進め給ふべしと申す。東照宮怒らせ給ひ、これほどの事思慮なくて、我が先陣の大将のつとまるべきか。敵堤をとらずばすて、敵にあたへてこそ勝つべけれ。高虎とも覺えぬもの哉と仰有りし處に、小栗又市はせ來り、直孝只今敵にかゝり堤の候ふに、此の堤をとらば勝たんといさみ候ふと申す。東照宮さぞあらん必定勝ちなりと仰せられけり。又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ。渡邊勘兵衛敵とせり合ひし時、高虎馬を御旗本に乗り來り、御旗を寄せられよとて申しあへぬに、横田甚右衛門馬上より大音あげ、御旗本寄せられよと申すは何者ぞ、あれ追つちらし候へと罵りければ、高虎馬を乗り歸る。是れも激勵の術なるべし。東照宮山入庵を召して關東の武者共軍になれて、物いふ詞のおもしろきと仰有りしかば、入庵只今の一言横田ならではと感じ申しけり。一説に、東照宮の御旗本へ藤堂高虎乗り來りて、敵の大軍を押し出だし候ふと申すを、横田甚右衛門聞きもあへず、

何の御下知を待つことやある。とく切り崩して討ち取り候へと云ふ。東照宮無禮なりと怒らせ給ひ。高虎にはよく見切つて、味方に手負討死なき様にはかり候へと仰せらるゝを、甚右衛門大音あけて敵を殺すに味方に手負死人なき事やある、とく切り崩され候へと罵る。東照宮横田推参なりと以ての外に怒らせ給ふ。高虎は我が陣に乗り歸る。和泉は見えぬかと仰の後、横田を御側近召されければ、人々いかにと手に汗を握る處に、横田の耳に御口を寄せられさしやかせ給ひてけり。其後いかに仰せけるぞと、横田に問ふ人ありしに、和泉を汝再三罵りたるは、一段然るべけれど、一戦をとげよとは遠き御慮有りて仰せがたきとの事にて、ありし由語りけるとかや。

四四二 脇五右衛門某氏三彌武功の事

五月六日井伊家の士脇五右衛門今日の合戦は跡より段々におし詰め來れば、大かたの事にては功名遂げがたし。若き人々力のかぎりはたらかれ候へといふ處に、直孝の近習の士三彌といふ若年の士首二つとりて脇に見する。脇もまた二つとりけり。翌七日三彌又首二つとりて脇に見すれば、脇もまた二つとりたり。後に老功の武名の聞え有り。人々あつまりたる處にて、三彌何れも老功の人とて崇め

其の身も泰なる體をふるまはるゝ事ぞかし。大阪の軍に事替はりたることも候はず。老功とて崇め候ふは何の故ぞやといふ脇聞きて、此の度汝の功名の如くなる事度かさなりたる者ぞといへば、三彌さては仔細もなし、吾が功名の如きはいと易き事なりといひけりとぞ。

四四三 増田兵大夫討死の事

増田兵大夫は長盛の子なり。大阪冬の陣に城中よわると聞けば涙を流し、奇手の攻めあぐみたる人いへば大によろこびけるを、東照宮聞し召し誠に長盛の子なりけり。豊臣家の恩を忘れざる志尤もなりと感じ仰せられ、夏の陣に御救を蒙り、城中に入り秀頼より賜はりたる赤地の錦の羽織を着、若江の軍敗軍の中に獨ふみ止まり、澤田但馬が從者と引つ組んでくみしきたる處に、藤堂高虎の士母衣の者磯野平三郎はしりよりて討ち取り、其の首を得たれども名をしらず、刀を分捕したるが秀吉より長盛に給はりしもの故、兵大夫とはしられきとぞ。

四四四 青木長屋生け捕らるゝ事井井伊家赤備の來由

木村が一輝放北しける中に、青木七左衛門黒母衣かけ、長屋平大夫は白母衣かけて、直孝の軍兵の中にまぎれ入りしに、井伊家の赤色の物具に違ひたれば、からめ取り東照宮の御前に引きまゐる。長屋は今福にて一番鎧を合せ、青木はけふ四郡にて一番首を取りたりと名乗り申す。其の體あはれ剛の者よと見えしかば、二人共たすけられ、美濃にておのの五百石の祿賜はりけり。

〔井伊家のあかき物具は直政の時よりはじまれり。甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵皆一色に赤かりしを、東照宮御覽じてこのませ給ひ、直政に仰せられて甲冑をはじめ旗・鎧・鞍・轡にいたるまで、みな一色に赤いろなり。夫れより後もかくの如くなりしゆゑ、井伊の家に新に奉行する士あれば、武具奉行軍令を見せて、物具みな新に赤色にして、百石に二十兩具足びつに納め、奉行の士受け取りて城中の庫に入れ置き、其の價は祿の中より返しけり。此の故に井伊家の武備かくる事なし。若し去つて他國にゆく士あれば、奉行の士武具を返しあたへけるとなり。井伊家の軍令とて、赤いろの武具の事しるせる書も今世に傳はりけり。〕

四四五 藤堂家合戦渡邊勘兵衛功名の事 井渡邊始末の事

藤堂高茂の士大將渡邊勘兵衛了は、

〔了は若き時阿閉淡路守に奉公し、十七歳の時一日に首六つ取りたり。阿閉の家にて剛の者といはるる士、十幅一丈の鶴の丸を繪に書きたる母衣をかくる者六七人有りしに、了に此の母衣を許されけり。後中村一氏に奉公せしが、小田原の北條を攻めらるゝ時、山中の城を俄に攻め落すべき様を見て、一氏を進めて頓て打ち破り、成合平左衛門に一氏の馬じるしを本丸の隅矢倉におし立てさせ、中村式部少輔一番乗と呼ばはりけり、秀吉の形織を一氏に與へられしかば、我れけふの功名は汝故なりとて、羽織を了にあたへられしに固く辭しければ、羽織の片袖をあたへんといはれしにそれをも辭しければ、遊生院鹿毛といふ馬を了にあたへらる。其の後増田長盛に奉公せしが、關ヶ原の時は大和の郡山の城に在り。關ヶ原の軍破れて郡山の城を受け取らんと、筒井伊賀守打ち向ふ。城代橋本兵衛・鹽屋徳順等、了と共に城を守るに、了は三の郭を口とす。大將なれば盜賊商家に入りて女わらへをなやます。了五百計の兵を打ち連れうち巡りて、盜を切刃殺し追ひちらす。或夜盜賊城外の町家に火をかけんとせしを、了出でてあまらず討ち取りしかば、これより盜來らず。敵おし寄すると聞えしかば城外の商家を焼き拂はんといふ。了自燒は

時ありはやまりて焼かば、商賈騒きてうるたへんも不便なりとて止めけり。城兵雜人を合はせて三千餘なりしに、士三十人下部八百計駈落ちしけれども、了に従ひたる者は一人も逃げ出でず。又城中の士百餘人金銀をあたへずば、出奔せんといふ。了大に怒りて城中の蔵に有る金銀は皆殿の物なり。殿の仰なくでいかでか出だすべき。且つ此の城を墓所と思ひ定めたる身の金銀何にかはせん。出奔せんとの用意ならん。錢一文もわかつべからず。かゝる者に兵糧米を費さんより、とく出奔せよと罵りて、三の廓より妻子を本丸へ入れければ、横巻儀右衛門もついてしかしたり。藤堂高虎・本田正純郡山におし寄せて、此の時長盛は高野にて殺されしなごいひふらす。大阪よりは来る士卒を合はせて九千餘人ありしを、了下知して持口を配り、日夜打ら巡りて怠を戒む。凡そ將なぐてたて籠るものは、各々相欺ひてこゝろに成ること常なるに、了が下知よりしづまりて城に將あるが如し。長盛高田遠江・山川半兵衛に書簡を持たせ、城に庫の物を添へて目錄をしるし、藤堂本多に渡し候へと命ぜられしかば、さらばとて大手搦手の門の鑰を高田寄手の士にあたふ、かゝれば奉行をもて門を守らせ、本丸までも入らんと騒がしかりければ、了使をたて城中より守るべき門々を、寄手より人を付られ候ふ事はひが事にて候ふといはせ、了

下知して手あらく門の鑰を奪ひ返してけり。城をわたしし時外廓の柳町より奈良の力大安寺をさして、しづかに兵をくり出だす。よく了が法令の嚴正なりしによりて、一人も騒ぎし者なかりけり。了は跡に残り鑰を取り返しける時の寄手の人々に向ひ、さきのしわざ無禮に似て候へども、武士の義理と申す物に候ふ。若し城中の庫の物一つも失ひなん時は、増田が士どもは盜をして出奔したりと申されん事、口惜しく候うて計らひきといひければ、答ふる人なければ鑰を了に投げ出だし返して大門を啓かせ、殿して城を出で大安寺に至り、それよりみな人々分れ去りけり。長盛高野にて了が下知せし始終の有様を聞き、九千の軍兵馬も凡そ八千四もあらんに、よく下知したりとて深く悦び、感状を了に與へしとなり。了藤堂家に仕へて祿二萬石。子の長兵衛にも三千石あたへられきとぞ。

新に奉公しけれども世に譽高き者なれば、高虎寵せらるゝ事大方ならず。舊臣ども大に嫉み恨みあり。大阪五月六日の軍に了は先陣の中の手なり。六日の朝道明寺に軍を進めんやいかにと評定いまだ決せず。了矢尾平野は兵を下知すべき地利にあらず候ふ。見て來らんとて猩々緋の羽織を著鹿毛なる馬に乗り、千塚より五六町うち出でけるに、朝の物見境與右衛門に逢ひ、いかにと問へば、後藤又兵

衛とおぼしめて軍を出だし、はや水野日向守と鐵炮を打ち合せ候ふといふ。了聞きて堺に士一人添へて返し、とく旗を寄せられといひ遣はし、頼て片山まで乗り行き西の方を見れば、八尾より若江まで大阪の軍おしつゞき、しぐらうで東方の先陣に目をかけ馬の鼻を揃へて進み来る。了さてこそ思ひ馬を引き返し道明寺をさして進む味方を押し止むる。藤堂仁右衛門何故ぞと問ふ。了あれを見られ手に取るほどに近き敵を打ち捨て、道明寺にゆくやうやあるといへば、仁右衛門も尤もなりと同心しけり。高虎何とて進む味方を押し止むるやと、母衣の者をもく下知らせる。了頼て高虎の前に参りしかじかなりと申せば、高虎如何せばやと思慮の氣色なり。了何の手だての候ふべき。かゝり来る敵に辭退する事や候ふ。總がゝりにして打ち破るの外道なしといへば、さらば仁右衛門よべとて下知らせる。了聞きて此處泥にて足入り陣を備ふべき地なし。敵あひいまだ四十町もや候はん。横堤は是れより十町計りあるべし。横堤まで細なはての道三筋見え候ふ。南に向ひたる味方を西向に押し直し横堤まで進んで、そこにて陣を整へ一軍せん。北二筋の道をば下知し給へ。南二筋の道を押し行く味方は勘兵衛下知して、横堤にて押し止め、列を正し南北一つに合はせて候はんには、必定味方の勝なるべしと云ひて、馬じるしは四五町ばかり後にひかへさせ、細道を乗り行きて、藤堂仁右衛門・多名

彌次兵衛等にかくといへば、北より進む。藤堂新七・玄蕃等一騎駈に馬を乗り出し、我れ先にと西郡萱根をさして進みゆくを見て、さらば南の味方をおし止めても何の用にかたゝん。とくかゝられ候へと云ひ捨て、了は山土阿野村に向ひけり。高虎の士大將我れも我れもと八尾堀を西に地藏堂を見てかけ行きしは、了去年故有りて高虎にいとま給はり候へと云ひし事の有りしに、今朝より殿の前に出で、勝敗の利己れ一人して計りし憎さよ。渡邊にまさる武功を立てんとて、了が詞を耳にも聞き入れざるなり。長曾我部盛親は矢尾の堤森ある處にすむ所に、朝霧のまきれより物色はさだかならねども、南の方より紺地の白きもちの紋付けたる旗さよせて敵かゝり來れど、堤の上狭ければ旗を後の卑き所へおろして立つるを、敵は北ぐるといひて、仁右衛門先がけて馬に鎧を合はしてかけ行きしかば、桑名乗りつゞきて一陣の下知らせられ候ふ身に、一騎がけはひが事なりといへば、仁右衛門ふり願りて渡邊が己れ一人武勇にほころが口惜しさに、討死までよというて馬を乗りはなし、鎧を横たへ大音あげてかゝりしを盛親が兵鎗の穂を揃へ堤にをりしきたるが、盛親間遠なるに、一人も立ちあがるべからずと下知し近々となりける時、一同に立ち上りえいと聲をかけ、鎧をならべたゝきたるければ、仁右衛門そにて討死し、ついでにかゝりける藤堂が軍兵どつと崩れ、冑の緒をしめたる

士六十三騎、歩卒三百餘人討たれて、一支もなく敗北しけり。了は山土にて向ふ敵を追つ崩し、南を見れば先陣やぶれて、旗を捨て我れ先にと逃ぐる處に、横さまにかけ向ひ、盛親がみだれ足を追つ返し、仁右衛門等が討たれし地をふみしきたり。盛親は矢尾一町ばかりの西に橋を後にあて、ひかへ居たり。了いよいよ勇み切つてかゝらばやとは思へども、先に首取りたる者ごもみな旗本に行きて、了が左右二十騎計に過ぎず。かゝる處に母衣の士山岡兵部已下七八騎はせ來りければ、了頓て押し寄せて盛親が陣に切つてかゝる。山岡兵部・矢倉長藏二人は南の方にかけてはなれ、おもふほど戦ひてはれる討死をしたりけり。了が兵少ければ少し引き退く。畑の高くひきし地を便に兵を集め、盛親と互に間近く睨み合ひてひかへ居たる處に、高虎使をもて何故に引き退かざるかと七度まで下知せらる。了聞きも入れず、此の一陣にて強敵を切り崩し候ふ。旗をだに押し詰められれば、北ぐる敵を追ひて大利なるべしと答ふ。高虎また使をたて今朝死すべき所を連れ面目なくて退かざるやとて引き返せと下知せらる。了聞きもあへずかゝる廣き軍場にては勝つも負くるも所々にわかれ候ふ。味方のもの主軍の道をしらす、下知するわざもなく、まばらかけして敵に切り崩され、多くの味方を捨て殺し旗をも集めて、敗れ候ふを、殿には忠と思し召し候ふ哉心得がたし。かく申す渡邊は今朝より敵にくらぶれば

五分一又は三分一の軍兵にて、毎度うち勝ち八尾にて味方をたすけ横合に敵を破り候ふ。渡邊なくば味方は泥に追ひ入れられ、一人も残らず皆打たれ候ふべし。あさましき味方の物ぬしの有様に候ふ。盛親わづかの兵にてひかへ居るを、討ちもらさば殿の弓箭の恥なるべし。とく旗本を寄せ給へ盛親をたやすう討ち取り申さんとて、彌々退く色はなかりし處に、直孝軍に打ち勝ち赤旗おし立て、勇み進んで押し來りしかば、盛親が旗本色めきけるを、了見て時こそよけれと、どつと切つてかゝり追つたてたり。久寶寺より城兵も足をみだして敗北するを、あまさじと鐵炮を打ちかけて追ひつむれば、盛親が旗竿も悉くうち折られたり。了は三百餘人の首をととり、平野まで進んでとりかためければ、道明寺口より敗北して城中に引き入る。敵道なふさがれ詮方なくためらひ居しかば、了大に悦び、高虎の許に使をたて敗軍の敵數萬の歸路を立ち切りて候ふ。軍兵をだに賜はらば疲れ果て氣おくれしたる敵を残らず打ち破り、大阪の城をば藤堂一手の武勇にて攻め落し申すべし。疾く軍勢を寄せ給へ平野をかたく守り敵を打ち破らん事掌の中にありと云ひけれども、高虎更に用ゐず使をたて何とて引き返さるかと怒らるゝのみなりしかば、了も力なくして平野に火をかけ軍を返しけり。これも平野の煙にて城中に引き入る敵を妨ぐるの術なり。此の時高虎兵をすゝめば、眞田も毛利も城中に歸り入る事

を得まじきにと世にいひきとぞ。直孝高虎の陣所に行かれしかば、高虎對面し、けふ先陣におくれたる者の候うて同姓にて候ふ物主あまた討死し口惜しく候ふと語られければ、直孝我れ敵に勝ちて北ぐるを追ひ候ふ時、むしろの指物さして軍兵を下知せし士大將の候ひしに、強敵を切りなびけ軍兵を下知せし有様、あはれ大剛の物ぬしにて候ふ、其の人はいかにと問はれしに、高虎物もいはず。其の時了宛を脱ぎて進み出で、むしろの指物さし候ふ男は此の勘兵衛にて候ふ。天の冥加にて今日の武功を井伊殿見届け給はり候ふと大音に申せば高虎いよいよかり、憎まれしほどに、了終に藤堂の家を去つて、京都におもむき睡庵と號し、寛永年中までながらへ居たりきとなり。

四四六 横田佐久間井伊の陣へ御使にゆく事

大阪の軍五月六日に井伊直孝打ち勝ちたりしかば、東照宮より横田甚右衛門、台徳院よりは佐久間將監を使に命ぜられ、直孝が陣所に行き佐久間先に歸りて、直孝今日の軍に打ち勝ち候へ共、川手主水をはじめとして討死多く、明日の先陣如何候はんと申す。東照宮聞じ召し聞かぬ體にておはします所に、横田歸りて直孝大利を得て、明日も勝ちたる勢に乗りて残る敵をあまさず討ち取るべしと男み

申すと申せば、東照宮さぞあらんと悦ばせ給ふ時、横田すゝみ寄り、こゝに一つ思慮あるべく候ふ。直孝が軍兵過半手負ひ死人も多し。いかに心はやり候ふとも、明日の先陣はくり換へられ候へ。直孝畏まり候はずとも強ひて仰せ出だされ候へと申せば、東照宮我れも然思ひつる事よとて、加賀利常・本多忠朝を先陣に命ぜられけり。陣中の使者は心得有るべき事にこそ。

四四七 片桐丹後守一番首を取る事

片桐丹後守は越前忠直に仕へしが、大阪夏の陣に勘氣を蒙る事のありしかば、先陣に忍び行きてひかへ居たるを、本多伊豆守見て片桐は必ず討死すべし。あはれ赦され候へかしと申せば、忠直片桐呼べとて、使番須田長左衛門先陣に乗り行きかくといへば、片桐忠直の前に参り宛を脱ぎ涙を流し謹んで居たり。忠直其の時汝が日比の罪ゆるし候ふぞと詞をかけたなり。片桐今の時に至りかゝる事こそ心得れと思ふ色顯れ、忠直の方なきつと見て、馬引き寄せて打ち乗り、先陣に向ひて軍始まると宛首を得たり。越前の一番首なり。

卷の二十二

四四八 松平助十郎先登戦死の事

大阪五月七日の軍に、水野準人正が組の松平助十郎秀信、今日の一番は他人に先をかけさすべからずといふ。水野丹宮口廣き事ないひそ。誰れか汝におとらんと争ふ。助十郎各々よく聞かれよ。今度朋輩に一番の馬は吾が馬なり。上田吉之丞が弟子にて馭は許印可まできはめたれば、誰れか先を争ふ者のあるべきといひしが、果して一番に乗り出だし敵に向つて討死したりけり。

四四九 安藤彦四郎討死の事

安藤彦四郎重能は帯刀の子なり。成瀬豊後守が組にて台徳院の御小姓組なりしに、武士長生して諸方の事にあひ、武功多く死せずして世をおくるは、さまで勝れたる勇士とは云ひ難し。只潔く討死せんこそ本意なれと常にいひけるが、大阪五月七日に一番首といはれ彦四郎、一番に討死といはれ彦四郎と思ふべしといひて、しなひのさし物を巻きて井伊直孝の先陣に行き、庵原助右衛門に向つて、

是非かかれといへども助右衛門同心せず。待ち受けたる箭先にかにして懸るべきといふ。彦四郎其の箭先にかゝりてこそ、勇士とはいふべけれといへども同心せず。彦四郎さらばかゝりて見せんといふを、押し止むれども、少しもためらはず、敵の中にかかりて討死しけり。帯刀馬上に塵をとり軍兵を下知しける時、従者彦四郎が屍を引きのけんとするを見て、犬にくはせよというて乗りめぐる。北ぐる味方を立て直せしが、軍終はりて後、大に愁傷の色あらはれきとぞ。

四五〇 本多忠朝討死の事

大阪冬の軍に、東照宮本田出雲守忠朝に京口に行きて川水を見來れと仰せらる。忠朝歸りて水の勢甚だ強く候ふと申す。又井伊直孝に見て來れと仰せられしに、直幸歸りて水浅く渡りやすげに候ふと申すを聞し召し、出雲は父におどれり川水は女童もしる所なり。出雲に見せしむるに及ばず。出雲をやりしは、心有りてのことなるを知らざりし事よと仰せられけり。物見の詞は子細の有るべきに心付かさりしにや、是れによりて忠朝口をしき仰せをも受けぬるかなとおもひて、夏の軍に必死を期して、我れと同じ枕に死なんとおもふ者は起請文をかけといはれしに、加藤忠左衛門・大塚伴左衛門・

藤井次左衛門・白杵七兵衛等、起請文をかきたりける。小野勘解由は土の軍に出でんに命をしましむ人であるとしてあざ笑ひて打ち立ちけり。かゝる所に五月七日、天王寺口の先陣を忠朝に仰せ出だされければ、忠朝大に悦ばるゝ時小野すゝみ出て、明日一の幸にて討死、二には一番鎗、三には高野に入らんといふ。忠朝打ちうなづきて居られけり。茶白山の下へ進んで毛利豊前守勝永に向ふ時、小野かゝる足輕の並居様は忽ち破るべしといふ。忠朝耳にも聞き入れず、小野口ぎはの黄なる殿の何を知り給ふと嘯る時、加藤も進み出で足輕の並居候ふ有様は軍にも見ず。只大多喜にて鹿狩にはよからん。あれに見ゆるは忠左衛門が足輕なり。誠に戦に向ふ有様なりと打ち笑ふ。忠朝にくき詞かなとて眉尖刀を提げてかゝられしかば、小野只今討死して殿に見せ申さんといふまゝに、真しぐらにはせ行き、加藤は肩尖刀の鱧にてたゝかれて是れも乗り出だす。忠朝は百里と名付けたる馬にのり一文宇に進む所に、小野敵に取りまかれ鎗玉にあがりて討たるを見て、本多出雲守ぞつゞけ者共と大音あけて呼ばはりけるを、毛利に付けられし秀頼の物頭雨森傳左衛門以下七八人、透問なくかゝりければ、忠朝持鎗つゞかさりによりて、數鎗をおつとり突き伏せ突き伏せ戦はれしを、紺の羽織着たる足輕に問ばかりに詰め寄せ鐵炮にて打ち、忠朝の胸に中りしかども、忠朝うつともひるまず馬より飛び下

り、其の敵を只一太刀に切り殺す。口取に兼ねて持たせられし鐵の筋が入れたる鼻れらを左に持ち右に首を提げ敵七八人切り伏せ、多兵に取りまかれ散々に戦ひ、痛手二十餘ヶ所おひて討死せられしかば、大屋は其の屍の上に取り付きて切死にしたり。藤井・白杵を始として皆同じく討死す。忠朝の首は雨森取りたり。後家に仕へて六千石あたへらる。

四五一 孕石備前廣瀬左馬之助討死の事

大阪夏の軍に、東照宮は伏見におはし、井伊直孝は宇治の北六地蔵より軍を出だして大阪に打ち向ふ。

〔東照宮は伏見船入の矢倉より行軍の有様を見物しておはし、まじきとなり。〕
 宇治より伏見にかゝる道にて旗をばり立てず。直孝般若野宮内を使にして、旗奉行孕石備前・廣瀬左馬助に何故ぞと問ふ。二人奉り旗の事は此の二人にまかせられ候へと答へておし通る。直孝怒りて又使を立て是非はり立てよと下知すれども聞き入れず。伏見を過ぎて旗をばり立てたり。此れは宇治より伏見にゆく道、東照宮のおはします所に向ひ奉るが故にかくはしたりしなり。五月七日直孝御旗本

の先陣として、天王寺の東北にて大阪七組の敵に向ひて相戦ひ、軍危かりしかば、孕石・廣瀬に向ひて我れ年七十五、又恥をすゝぐべき時なし。討死せんと思ふなりとく引き退かれよといへども、廣瀬士の恥は同じ事よ。孕石を捨て殺し逃げたりといはれん事こそ口惜しけれとて、二人共に旗竿に手をかけ討死しけり。廣瀬は青木が組の稲葉伊織打ち取りけり、廣瀬は美濃が子、孕石は主水が子にて、共に甲斐の武田の家の士なり。

四五二 廣田圖書が事

廣田圖書は水野勝成の士にて、大阪五月七日の軍に功有りしかば、明日は殿の馬前にて相働かんといへば勝成悦ばる。明石掃部が陣を打ち破る時、廣田鐵炮に玉薬をこめ、一はなしと思ひて打ちたるにたち消えしければ、鐵炮をなげ捨てて鎗を取り、梁瀬又右衛門といふ敵にわたり合はせ突き伏せられしを、勝成はしり寄り梁瀬を討ち取られけり。後に鐵炮を見しに火ぶたをきりてありきとなり。廣田人に語りて事の急なるに臨みては、思ひの外にあわつるものなり。我れすでに先がけ殿敷多して自責せしかば、殿の前にて鎗勝を打たんとおもひ設けしにかくうるたへぬ、あつばれすべきと工みたる事のかくの如くなれば、まして不意の事をや能く思慮すべき事ぞとかなりけり。

四五三 毛利勝永軍配相違の事

大阪五月七日毛利豊前守勝永は軍をおし出だししが、住吉の松かけに白旗見ゆれば、此れ駿河の大御所なるべし。一文字に切つてかゝり、討死せんと志して兵を進むる所に、白旗見えざりしかば、長井傳兵衛・水野伊右衛門に見て來れとてやりけるが、暫くありて乗り歸り、住吉の白旗は見えずといひけり。是れは東照宮御旗を俄にまかせ給ひ、茶臼山の後にひかへさせ給ひける故とかや。勝永は小倉の城主豊岐守が子なり。勝永が子を式部といふ。父子共に秀頼に従ひ、芦田矢倉に籠りて自害せり。

四五四 伊藤武藏守馬印を拾ふ事

同じ日秀頼は櫻門に打ち出で、灘金を緋威にしたる物具著く、太閤の時より傳へられし金の切つき二十本、茜染の吹貫十本、琥珀の千本鎗を並べたて、太平樂と名付けたる七寸ありし黒の馬引き立てられし所に、先陣皆敗北しけると聞えしかば、今は是れまでなり敵の中にかけ入り討死せんと進ま

れしな、速水時之今打つて出でたりとも勝利候ふまじ、疾く本丸に入らば給へとて引き返す。かゝりければ士卒ちりぢりに成つて馬じるしを棄てたりしに、伊藤武藏守おくれで歸り入りしにこれを見て、朝鮮まで聞えし豊臣家の馬じるしを敵ひるへば、大阪城中にをのこは一人もなきと、日本國中の物笑ひとならんといふまゝに、手づからふりかたげて城中千疊敷に歸り入りけり。

四五五 郡主馬が事

郡主馬良利は秀吉の臣なり。石田權威を恣にせんとはかり、人なつけん爲に公用に金銀を出だす事あれば、必ず其の半をわけて密に私にあたふ。郡にもかゝる事有りしに、あらそふならば禍にあはんと思ひ、辱きよし石田に謝して、其の金を大阪の庫に納め置きけり。それより病と稱して出仕もせず。後に旗奉行なりしかば、大阪落城の日千疊敷に歸りて床の上に旗を置き、去年の冬藤堂高虎天王寺におし入りし時、速水寺之と謀を合はせ夜討すべきを龍臣に妨げられぬ。住吉平野の陣所に忍びを入れ、火をかけて不意に一軍せんといひし謀も用ゐられず。運盡きぬると思へば口惜しとて、從者に此の小脇差は黒田長政我れに贈られし時、用ゐる事有りて功を立てんといひし詞ある故なり。

よく長政にいひて返し候へと遺言し、其の子兵藏ともにも自害す。行年七十二歳とかや。秀吉の時より黃母衣ゆるされたり。

四五六 野村越中才覺の事

大阪落城の日、興國公隆朝臣は城の北に陣し給ふ。かれて下知なき前に軍を進むべからずと仰せ出されしかば、陣を整へて御下知をまつ所に、寄手門々に押し寄せしと聞えしかば、野村越中に見て來れと仰せらる。野村馬をばやめて行く所に、城より煙燃え上りければ、寄手攻め入りたりと思ひ、先陣伊木長門・池田出羽が陣に馬をかけよせ、疾く川を渡して攻め入り候へ仰せぞといひければ、先陣即ち攻め入りて、首六百餘を得しは野村が功なりけり。

四五七 長會我部盛親生け捕らるゝ事

長會我部盛親は大阪の城落ちしかば、落ち行きて腹の中に潜まり隠れぬて、其の臣中内惣右衛門飯を持ち行きけるに、峰須賀の士長崎三郎左衛門が足輕もと土佐の人にて中内を見識り居しかば、かくと

告げて遂に二人ともからめられたり。盛親とらはれとなりて後、藤堂高虎と軍せしに、井伊の赤旗に妨げられ、高虎が首を見で口をしきとて齒がみじけるとなり。此れは高虎使を直孝の許にやりて援を乞はれしに、直孝も木村を切り崩し、追討になりて士卒ちりぢりなれば、詮方なく戦ひは一手ざりと答ふ。高虎の土木保清右衛門に逃びてけり。木保あれに見ゆるは伊達政宗にや、疾く行きて援を乞はれよといひしかば、使道遠き所にうるたへ行く武士や候ふ。歸りて軍にあはんとて馬を引き返す。木保さらばとて赤はたなすいめけり。

〔一説に、盛親を生け捕り伏見に参り御玄關に至る。井伊直孝・安藤對馬守・土井大炊頭列座し、軍の事を問はるゝに、盛親申しけるは、六日の晩必死の軍すべしと存じ極めたるに、赤旗の横合に來りて候ふを見て、疲れたりし軍兵ゆゑ打ちまけて候ふといふ。格子の内に、台徳院殿の侍臣二三人立つて、其のかけより盛親を御覽有りしに、盛親も是れを察しけるにや、其の方をきつと見て居たりけるとぞ。中内は主君の此の期に及ぶまで附き従ひたりし忠節を感ぜられ、峰須賀に賜はり御ゆるされを蒙りたり。一説に長曾我部を生け捕りて繩二筋つけて白洲に引き居たり。台徳院殿御側の士を以て數千の大將たる身自害をすべき事なるに、まはなかりしは如何ぞと御尋

あり。盛親わるびれたる色もなく、朝の軍に打ち勝ちたれども、後の軍に赤備の軍兵に打ち合ひて、味方あまた討死し敗北せし事は非なき次第に候ふと申す。又討死するか自害するか、二つの志もなかりし事返す返すも不審なりと、再び御尋ね出だされしに、長曾我部承り盛親も一方の大將たる身に候へば、業武者と同じくかるがるしく討死すべきに候はずと申す。再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外にあらはれたり。さて其の後引き出だして警固し居たりしに、飯をうづ高くもりて長曾我部にすうる。盛親警固の士の中おとなじやかに見ゆる人を呼びて、むかしより名將もからめ捕らるゝ事ためし多ければ、露ばかりも恥とおもふ事なし。然るにかゝるいやしき食物なすうる禮義やある。とうとう首を刎れてこそよけれと云ひける時、井伊掃部頭かたへを打ち過ぎ、れを見て、法らなきふるまひもかなと大に怒り、御厨に下知していさぎよく料理を調へさせ、細なとかせ座敷に長曾我部を招き入れ、いと懇に勞れを休め給へといはれしかば、長曾我部是れこそ禮義をしりたる武將の道よと悦びて、始終少しもゆるめけるけしきはなかりけるとぞ。

四五八 大野道軒生け捕らるゝ事

大阪落城の後大野道軒（或作）を生け捕り、二條の城の駒寄にくくり付けたるを立ちよりて見る者夥し。皆いふ道軒は聞きしよりも大男なりといふを聞きて、さすがに士たる者とも覺えぬ詞かな。かねて我れをかたくいましめし如く汝達を二々からめんと思ひしに、運命盡きぬれば口をしき事なりとすこしもひるめる色なかりきとかや。

四五九 渡邊内藏助が子城を落ちし事

大阪落城の時渡邊内藏助（乳母）は矢倉にて二男三男を斬し殺し、乳母に嫡男を連れ来るべしといひけるに、乳母心得候（乳母）白きかたびらを著せまわらせ申さんといひて其の場をのがれ、漣紙に包み細をもて堀下にさげ落し、其の身ものがれ得て彼の子を市中の厠にかくし置き、日數経て逃げ去らんとせしを關東の軍兵に捕へられぬ。いろいろせめ問ひたれども、渡邊に従へる士水谷清兵衛といふ者の妾にて、我が實子に紛れなしとて其餘の事はいはず。彼の子も僅六歳なりしかども、いかにせめられければとも内藏助が子たる事はいはず。さらば金二兩出たさば助くべしといひしかば、乳母則ち菴郷渡邊に到り百姓に頼みしに、さすが菴郷を思ひ、且つは乳母の忠義を感じ、金二兩授けしかば、則ち彼の

小兒を乞ひ得て京都に赴き、南禅寺の喝食となしぬ。十八歳に及ぶ時、細川越中守忠興・一柳土佐守末榮（未榮）なごゆかりの方より還俗させられしかば、程經て、文照院殿甲府におはしましし時、此の事をなげきて遂に甲府に仕へ、渡邊權兵衛とて五百石賜はりけり。内藏助は大野に秀頼公の御命別儀なくおぼさんやうばかり見え。時を待つべしとて江州に落ち行きけるが、秀頼自害のよしを聞きて、立ちながら腹を切つて死したりけるとぞ。

四六〇 齋藤織部落武者を助くる事

大阪落城の日、奥國公の士齋藤織部黒母衣（黒母衣）かけて西國道に落ちゆく。敵に追つ付きては討ち取らんとせしに、彼の敵より願りて落武者の首とられたりとも、さばかりの武功ともいふべからず。いかに助けられんやといふ。齋藤從者にさへせたる相印の腰指をあたへて、とく落ちられ見とがむる者あらば、池田が内の齋藤織部といふ士の從者ぞといはれよと教へければ、忝（かたじけなく）きよし謝して落ち行まけり。歸陣の後齋藤が友來りて、大阪にて落武者の中に我がゆかりのもの候ふが、たすけ給ひて相じるしまであたへられし故、のがれ出で、密に参りて斯く申しきといひけり。齋藤後人に語りて

われ其の時此の若武者を討たんは易し。されども落武者の降参するを斬りたりとも、母衣かけたる我れにいかばかりの功名とかすべき。今は却つて奥深くおぼゆ。みだりに人数を殺すのみを武と思へるは、大なるひが事にてこそあれといひきとぞ。

四六一 澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

明石掃部頭全登大阪に籠りしが、落城の後討死しけるや、落ち行きたるや定かならず、明石が土澤原孫太郎右衛門を生き捕りて、明石が行方を問はるゝにしらずといふ、さらばとて拷問に及びけれども更にいはず。あまりきびしく責められて涙を流しければ、行方をいふにこそあれとて、いかにと問ふに、澤原にいひけるは關東の兩御所の運つよくおはしまし候ふを感じ奉りての事に候ふ。士たるほどの者骨なきさまるとも主君のゆくへを申すべきや。此の度大阪軍に勝てば、兩御所落ち行かせ給ふべし。其の時御邊たちをからめて今我れをせめられ候ふ如くならば、主君の行方をも白状すべき心なればこそ、かく我れを責めらるしならめと思ひて、おぼえず涙の流るゝと申しければ、人々詞なかりけり。東照宮聞し召したぐひなき忠義の士なり。よくいたはり候へとて御赦し有りけるとぞ。今細川

の家に其の子孫あり。又池田の家にもあり。澤原は備前警梨郡の村名なり。孫太郎が一族の村より出でたりといふ。掃部が居城の跡備前和氣郡和氣村東の山上にあり。

四六二 丹羽左平太才覺城を落つる事附左平太初陣義氣の事

丹羽左平太は織田信雄の小姓なりしが後秀頼に仕へ、大阪落城の時泉州貝塚まで落ち行きしに、野伏道をさへぎり取りまきたれば、丹羽我れを殺さんとにや、又甲冑を奪ひとらんとや、著たるものは剥がれなげ職なり、我れ既に日本國をみな敵にしたれば世にあらんとも思はず。出家せん僧一人呼びて給はれといへば、野伏僧をつれ来る。丹羽さらばといふまゝに立ちよる體にて僧をひしと押へ、刀を胸にあてて人質にしければ、野伏等もせんかたなくいづくまでも送り申さんといふ。夫れより紀州和歌山にゆかりの人有りけるに告げやりて、迎の人來て紀州に匿れ居たりしが、程なく敵を蒙りてけり。「左平太長久手の軍には小牧に残されしが、朋軍の石黒八十郎に年幼しとて旗をだに見ざるは口をし、後の咎はありともいさといふより馬にのり、長久手さしてかけゆく時、石黒丹羽に向ひ、けふの敵は池田ぞかし、池田の士に叔父の善内といふ母衣の士あり。行きあふならばいかにせんと

いふ。丹羽人々君の爲とはいへども、叔父を討たんもいかじなりなごいひて、後にはかけはなれしが、軍既に終はりて、落ち行く武者有りしに、丹羽追つ付いで馬より突き落せしが、母衣かけたる敵なれば名乗れといふに、石黒善内と答ふ。丹羽聞きてしかじかのゆゑありとて、落ちられよといつて馬にかきのせたる處に、高木筑後守走り來り、何とて敵を落すぞといふに、丹羽仔細を答ふ。高木幼年のはたらきといひ其の志を感じ、後に東照宮にそのよしを申し、小牧にて信雄の陣所にわたらせ給ひ、勝軍の祝に酒宴のありけるに、左平太の事を問はせ給へば、只今給仕せし小姓なりと答ふ。けふかゝる事の候ふと仰せられきとかや。其の後秀頼に仕へて大阪の軍の前關東に使せしかば、これに乗りて奉公せよとて馬を賜はりけりとなり。」

四六三 大阪御陣中御支度の事

大阪冬の軍に諸軍に兵糧を給ふ。凡そ三十萬人、一口に千五百石なり。遠國の兵には一倍を増し賜はりけり。夏の軍に東照宮松下淨慶を召され大阪のまかなひ支度・膳米五升・干鯛一枚・味噌・鹽ぶし・香物少しばかり用意せよ。其餘に及ばずと仰せられける。されば厨の入用只長持一棹にて事足り

四六四 本多落合功を論ずる事

大阪夏の軍に越前の士大夫將本多伊豆守富政が一陣に、首百七十三取りたりければ、我れにまされる首數はあらしといふ處に、落合美作守我れこそ増りたれといふ。伊豆何ゆゑぞといへば、落合聞きて本多には組に付けられし士の祿凡そ七萬五千石に及べり、かく申す美作は一萬石の祿にて首四十八取りたり。祿の多少にて士卒の多少ある事は、いふに及ばずといへば、東照宮の使番諸星金右衛門柱に於りて居れりしが、目をひらき落合の詞尤もことわりなりといひしかば、本多詞なくてやみわ。

四六五 後藤又兵衛が事

後藤又兵衛政次秀頼にまねかれて大阪城中にありけるが、夏の軍評定に政次國府越くらがり嶺に打つて出で、地の利に據りて軍するの外道なしといへば、則ち大和口の先陣して平野に打ち出でし處に、東照宮より相國寺の瑤西堂を使にて、關東の御味方に參らば播磨國を賜はるべきよしなり。政次仰

せ誠に忝しと申せども、御味方仕ら入事思ひもより候はず。今大阪の勢ひ強く關東あやふく候はゞ別に存ずる旨も候ふべし。今大阪の運かたむきて秀頼亡びん事近きに候ふ。それを見て二心をいだかん事は、弓矢取る道にあらず候ふ。此の由を申されよ。是れは物がたりにて候ふほどによく聞かれよ。今日本國に弓矢多しといへども、政次にまされる者有りとは覺えず候ふ。其の故は去年より政次を頼み思し召し候ふは、高麗まで攻められし豊國明神の嗣にて候ふ。また政次内通せば、天下分けめの軍たやすく破るべしと仰せられ候ふは、徳川殿にておはしまし候ふ。天下の勝敗を政次一人の身にかけたるは、思出ならずや、死しても冥途の面目なり。政次生きて候はゞ、一日に破るべき大阪も十日は支へ候ふべし。政次死したりと聞えなば、百日守るべき大阪も一日の中に破れ候ひなん。政次とく討死するを、徳川家の恩に報ゆべき志と存するなりといひけり。

〔後藤は元黒田長政の士大將なり。長政ある時物語の序に、今我れにかはりて軍兵を下知し、大功を立つべき者、我が士大將の中に誰れならんといはれしに、管政利人々各々の其の器量有りと申せども、又兵衛に肩を並ぶべき者は候はずと答ふ。長政あくまで勇將なりしかば、政次が武略をねたまれし故けしき悪しく見えけり。政次豊前の小熊の城に有りて、隣國細川忠興と中惡かりしか

ば、實は小倉の防なり。故有つて政次が子隱岐追ひ出だされしをよび返し給へと長政に申せども、聞き入れられず居る時、政次が二男又市を長政寵せられしが、博多の祇園の宮にて、猿樂の有りし時鼓なうてといはれしかば、小熊に行きてかくといふ。政次怒りて父子ともに出奔しけるを、忠興鐵砲二百に士を添へて迎へよせられしかば、長政と既に軍に及ぶべく成りしを、江戸より和平せられ、政次をばいづくになりとも送り候へとなりしかば、忠興政次を錢して酒宴あり。松井佐渡・有吉頼母並び居たりしに、忠興我れ黒田の家と不和なれば、これより後の事はかりがたし、長政の軍だてよく知りたるならん。いかにして討ち勝ち候ふべしと問はれければ、政次兩方に加勢もなく軍あらば、國の大小と申し必定甲斐守打ち勝ちなん。されどもたやすく勝つべき計の一つ候ふ。甲州は人に越えたる勇將にていつも先をかけられ候ふ。鐵砲にすぐれたる士五十人ばかり擇みて鎗の合ひ候ふ時、五人討ち取りなば、其の中に必ず甲州あるべしと答へて出でしな、さばかり長政を恨みて出奔せしに、今長政の武勇を譽めあげつるぞかしと感ぜられけり。長政安藝に船をとめし時、正則福島丹羽をもてまれかれしかば、三萬石の祿にて仕ふべしといふ。正則いや丹羽を始として皆二萬石あたへしに、政次に三萬石過分なりとて聞かず。丹波今政次

に三萬石あたへられたれば、政次だに三萬石なり。丹羽も他の家に行かば四萬石なりと人申すべ
 きにて候ふ。是れ臣等が武者をあぐるにて候ふといへども、正則同心なくて丹羽行きてかくと傳
 ふ。此れより前關ヶ原の軍に、浮田秀家の兵七八十人亂れ息に成りて、正則の軍の前を落ち行き
 しに、丹波ひきし地に有りてしらす。正則の旗本より告げ知らせければ追つかけたり。此の時政
 次丹羽が前に來り、引きおくれたる敵あり。なき追ひ討たざるやといふ處に、首數多取り來りしか
 ば、政次大に響めて歸りしが、丹波は政次に教へられきと世にいひあへり。丹波心に怒をふくみ居
 たりしかば、此の時語り出だし色を替へて、我れに教へたりと世にいひふれられしやといひける
 に、政次打ち笑ひ、器量の小さき人よ、我れと足下と武功相同じ。我れ足下の下知を受くべきや、
 足下又我れに教へられて功名すべきや、人のいへばとて怒られけるこそなかしけれと答ふ。丹波
 詞なくて歸り、政次は我れに大にまされり。及ぶべきにあらずと響めたりけり。」

四六六 古田重勝滅亡大河内元綱先見の事

古田織部重勝は太閤の家入、若き時より茶事なすきて、于利休が門人にて、此の事好む人は重勝を

一世の師匠とす。元和元年夏兩御所京都を打ち立たせ給ふを、待ちて、天子を取りまわらせ二條の城
 を攻め取り、京中焼き拂ふべしと大阪に心を合はせし事あらはれて、父子とも誅戮せられけり。此の
 織部正は古き珍器の全きをば好まず、されば書畫様の物もかしこを切りこを裁ち多くそなひて、
 さて補ひ綴りて用ゐしな、世に興ある事とおもふ人多くこれに効へり。松平伊豆守信綱の父大河内金
 兵衛元綱人にかたりて、此の古田は必ず禍にかゝりて死すべき者なりといひしに、果してたがはさ
 りければ、人々いかでかくは相しけると問ふに、元綱されば古の寶器と聞えし物世の亂に失ひて、
 今残れる處の物はみな神の護持にてこそあらめ、それを己れが目を悦ばしめんとて、一人の好にまか
 せそこなひやぶる事、神明必ず恐むべしと思ひしゆゑ、其の人の身も全うして終はる事を得じといひ
 たりきと答へしかば、聞き傳へて名官としきとぞ。

四六七 石川重之功名附隱遁の事

石川嘉右衛門重之字丈山は清和源氏にて、入幡太郎の第五男石川義時の末なり。世々徳川家の臣と
 して、十六の時、東照宮の御旗本に召し出だされ奉仕したり。幼小より剛雄の人にて非常なりしかば、

七歳の時此の勇は必ず日本第一と世はいはるべきにや。若し然らずば日本第一の悍惡の人となるべしと語られきとぞ。大阪夏の陣に丈山あやまん 傷寒やまを煩わづらひ重かりしに、其の母本多氏ほんた 江戸より文ふみして、汝世々御旗本に仕へ奉り、此の軍に武功なくば又對面たいめんせじとぞはげまされける。丈山人あやまんによせて是れを聞き、涙ぐみて物もいはず。五月五日東照宮とうしょうみや既に二條の城を打ち出でさせ給ひしを聞き、其の日は病殊ととに重く前後を忘わすれて有りしが、強つよひてたすけ起され、かこに掻かき乗のせられて東寺とうじを打ち過さける時御覽あり。あやませ給ひ田上たのかみ右京みぎきやうに仰おほ有りて問とはせ給へば、見て歸かへり石川嘉右衛門いしかわけさゑもんにて候ふと申すか聞し召し、彼れは病重やまくて死すべきと聞きしにと仰あり。丈山あやまん八幡やわたに至りて水を三動さんどうすくひのみて、胸中の苦くを頓とんに忘れけり。其の夜は東照宮河内の星田ほしたに御陣あり。丈山を召していと懇ねんの御詞ごことばをかけさせ給ふ。六日に大阪に押しよせ給ひ抜けがけを禁まし給ふ處、十七日の曉あけ、丈山あやまん眞先まづさきにわけがけして加賀利常かがのりつねの先陣せんじんに至り、御使ごしなりと稱して大軍の中を押おし抜け、岡山にて敵を討うち取りたれども、味方其の首くちを奪うばはんとせしかば、打ち捨てて黒門くろもんに打ち入り、佐々十左衛門ささぢうざゑもんと名乗つたる敵をうち取り、又敵一人打ち取つて、從者じゆうしやに首を取らせ門を出いづれば、馬うまに乗りたる武者むしやに行き逢あふ。遠藤但馬守とんどうたじまが士池田勝兵衛しちけだかつへいゑといふ者にて有りしが、丈山の功名こうめいを感じければ、我れは石川嘉右衛門いしかわけさゑもんなりと名乗

つて、池田首一つ得たりといへば、丈山其の姓名せいめいを刀の鞘さやに刻きみ付けたり。加賀の大軍おしつゞき來れば、又御使ごしなりと呼ばはり、押し分わけて利常りつねに行き逢あひ、討うち取りたる首を見せ申して打ち過ぎたり。其の夜本多安房守丈山ほんたあはのりかみとゆかり有りければ、筑前守利常ちくぜんしゆりつねを證しやうにせよとすむれども、我れ利名の爲ためにするに非あらず。先祖せんぞはづがしめざる志のみなりしといへり。此の軍に御近習ごんじゆの士首を得たるは、丈山あやまんと間宮權左衛門まみやけんざゑもん・豊島主膳とよしましゆぜんと三人ばかりなり。丈山御軍令ごぐんれいにそむける故、實まことに及およばず。是れより前丈山駿府すんぷに有りし時、清見寺せいけんじの僧説心そうせつしんに禪理ぜんりを聞きたりしが、出陣しゆじんの時暇いとまをとて寺に至り、此の軍に御近習ごんじゆの士首を取りたる人三人ありと聞かれなば、其の一人は必ず我れなりとしられよといひたるが果はたして然り。東照宮未だ御旗ごしを駿河すまがに返されざる中に妙心寺めうしんじに隠かくれたり。是れより學文がくぶんの志厚しこうく、日夜にちやとなく書を讀よみ經史きやうしに通とほじ詩しを能よくせり。丈山三十三の時とかや、其の後板倉内膳正重昌丈山いたくらうちぜんぢゆうしやうの流落りゅうらくをいたみ、淺野但馬守長晟あさのたじましやうしやうにかたりしかば、長晟ちやうしやう賓客ひんかくのもてなしにていと懇ねんにせられしかば、安藝あゑに行く。老母らうぼ孝養かうやうの爲ためとなり。母終はりて後寛永十三年五十四にて、藝州げしゆを去りて京師きやうしにかくれ居いしに、板倉重宗いたくらぢゆうしゆ京都きやうとに在りて丈山をいたはる事大方ならず。諸侯貴人しよこうきじんの會する時丈山を座上じやうじやうにまねきて、此の老らうは文武ぶんぶの道みちに達たせる人なりと敬禮けいらいせらる。其の後比叡山ひえいざんの麓ふもと一乘寺いちじやうじに離遊りんじゆの地ちを設たけ、

詩仙堂を作りて詩人三十六人の像を壁に繪き、書籍を友として閑居す。後光明帝御即位の時、松平伊豆守信綱賀使として京都にまゐられしに、丈山と親戚たるゆゑ、たびたび閑居を訪はれけり。承應元年七十歳に及びて、三州泉の郷は其の故郷なるゆゑ、歸るべき志あり。板倉重宗にかくといへども許さざりしかば、今よりは京都へ再び出てじ、さらば其の許へも参らじとて和歌あり、

わたらじなせみの小川は淺くとも老のなみそふかけもはづかし
 後光明帝丈山が隸書によきと聞し召し、高木伊勢守守久 勅命を傳へければ、八卦の字を書きて奉る。上皇も又隸書の大字を書かしめ酒肉を賜はる。寛文十二年壬子五月廿三日一乗寺の閑居に終はりたり。九十歳となり。其の時を覆書集と名付け、いま世に行はる。

一乗寺の閑居今は尼持たる寺になりぬ。されども詩仙堂は残り。繪像も廢せず。丈山の物具 鐘又如意丸などもありといへり。

卷の二十二

四六八 直江山城守閻魔王に書を贈りて訴訟人を斬る事

上杉家に三寶寺何某といふ者下部の罪有りて誅せしを、其の一族大に怒りて死したる人を歸し給はれと直江山城守に訟へけり。其の下部の罪死に及ばざる事にや有りけん。直江白銀二十枚あたへて跡をとへとなだめられぬも愈々用あらず。是非に歸し給はれと直江を催促しけり。直江さまさまにいへんもとかく聞き入れず。其の時直江しからば訟の如くせんとて一族三人捕へさせ、地獄に行きて迎へ來れとて、書簡一通封じて使に往けとて首を刎れさせたり。其の書簡にしかじかの仔細候うて、三人迎へに参らせ候ふ。とく歸したまはり候へ。慶長二年二月七日閻魔王冥官披藤直江山城守兼續とぞ書きたりける。

四六九 安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事

安藤帯刀の子を飛騨守直治といふ。成瀬華人正正成或時直治に紀州にて鍛ひたる刀を乞ひ得しが、

後に成瀬彼の刀の事を語りて尾張にて死罪人の有りしを試みたるが、こゝろよく切れざりき。能く出来たるに残り多し。又きたひ直させて給はり候へといふ。安藤安事事なり紀州にて心よく切れたりき。あやしき事よといひしに成瀬打ち笑ひ、紀州にて心よく切れつるに尾州にて然らざるは、尾張の人骨堅き故ぞとたはぶれしに、安藤聞きもあへず、いやいや尾張の士の腕の弱き故なり。鉛刀にても紀州にてはよくきれ候ふと答へたり。

四七〇 土屋數直執政の事并土屋忠直成立の事

土屋但馬守數直執政たりし時、金座の者共相ばかりて、金に銀を入れてふきかへられなば、日本國の金甚だ多くなるべし。金の色の損ずるのみにて、莫大の利なれども但馬守用おられじ。但馬守だに此の事を聞き入れられなば、事行はるべしといひけるを數直に申す人あり。兎角の答なくて打ち過ぎられしかば、又人をして問はせしに、但馬守是は邪なるわざなり。金を以て天下の寶とするは純物なるが故なり。其の寶を悪しくせんと思ひもよらぬ事なりといはれけるとぞ。數直大猷院殿の近習に仕へ申されし比、故有りて咎を蒙り、引き籠りて有りしに、大猷院殿上京ましましけり。數直密

に上京せられしを、親族家人相止めれども聞き入れず。京に著きてかたはらなる所にかくれ居けり。或時しがじかの事を數直にはからすべしと仰せ出だされしかば、皆厭きて數直は江戸にあり。いかにと申しければ、聞し召し尋ねて見よ居ざる事はあらじと仰せられけるほどに、こゝかしこまがしけるに、東の京にかくれて有りしを頼て召し出だして、仰に汝よくこそ來りたれ、來らせばよかりなんやとて命ぜられける事共あり。泰平の時といへども千里の行程たやすからざる事なりと思ひて、後の咎を顧みず、忍びて上京有りしに、必ずかくあらんとしるしめされし、明智の遠慮君臣水魚の遇、季世に有りがたきためしなり。此の數直は甲州武田家の士大將土屋宗藏昌恒が孫なり。勝頼亡びし時宗藏が子の二歳になりしを、駿河の富士の裾野の寺に、土屋が相知る僧有りて隠して育けり。東照宮御狩の時彼の寺に立ちよらせ給ひしを、御茶ささげて出でけるを、此の子がつらだましひ唯者にあらず。父は何者ぞと御尋あり。住持の僧氏もなき者にて候ふとかくし申しければ、再三詰り給へば、御敵をなしたる者の末にて候ふ。隠し頼まれてあはれに存じ、ひそかに育てて候ふと謹んで申しければ、出家させんよりは我れに得させよと仰ありければ、今はつゝみてあしかりなと思ひて、こゝれは武田勝頼が供して、天目山に死したりし土屋宗藏が妾腹の子にて候ふと申しければ、さる義士の

エなりける。眼ざしのなみなみならぬと思ひたるに、果してたがはざりけりとして、只具せられ、後民部少輔忠直といひしは此の人なり。數直は忠直の次男なり。

四七一 塚原ト傳劍術鍛錬の事

塚原ト傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。ト傳劍術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源院殿の師たり。其の後上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり。流の妙手也ト傳また上泉にも學びたり。ト傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、彼の弟子或時道のほとりにつもきたる馬の後を通りけるに、彼の馬はれたりしに、ひらりと飛びのきて身に中らず。見し人さすがに塚原が弟子の中にも勝れたるよといひしに違はずと、ほめてト傳に語りけるに、ト傳大に驚きて、さては一の太刀さづくべき器にあらずといひけり。賭人此の事を不審して、試みよとて類なきあれ馬を道のかたへにつなぎ、ト傳を招きてかたはらに隠れて見居たりしに、ト傳馬の後を除けて通りしゆゑ、馬はねんとせす。人々はかりしにたがひければ、後にかくと語り、さて彼の弟子の早業をほめ給はぬは如何といひければ、ト傳聞きてさればとよ、馬のはね

るに飛びのきたるはわざに利きたるに似たれども、馬はねるものといふ事をわすれて、うかと通りしはぞこたりなり。飛びのきたるは仕合といふものなり。劍術も時により、下手にても仕合にて勝つ事あるべし。それは勝ちたりとも上手とはいふべからず。只先をわすれず機をぬかぬをよしとするなり。一の太刀の位に及ばざる事途なれば譽めざりきと答へきとぞ。

四七二 東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事

東照宮御病氣重きに及びて、台徳院殿もかたはらにおぼします。御遺言はに松倉豊後守重正・市橋下總守正總・堀丹後守直倫・桑山左馬助・別所孫三郎を召され、此の五人忠ある者なり。且つ大阪大和口にて武功あり。よく將軍に仕へ奉れと仰せられしかば、皆涙を流して只とかくの詞なかりける時、又別所は涙少けれども、此の後も取りわけ忠あるべき者なり。大和口にてやさしき言をいひたりと仰せければ、別所泣き沈みてけり。此れは大和口にて城兵引き返すを追ひ討たざりし時、別所諸大將の前に馬を乗り廻し、先年筑紫にて、島津が退口を尾藤が慕はざりしを、大困怒られき。只今追ひかくべき圖をばづす事無念なり。かく申す孫三郎は馬一匹ゆる齒をばむばかりなり。いかに人々かく

は腰のぬけたるやと大音に呼ばはる。此の事を思し召しての事なりけり。

四七三 鮭延越前組下に慈愛ありし事

鮭延越前は最上義光の長臣祿一萬五千石なり。最上の家亡びて後流落しけるに、もとより家人に慈愛深かりし人にて、士二十人附き従ひ、各々乞食して養はんといふ。土井大炊頭利勝五千石與へければ、二十人の士に五千石皆あたへて、各々二百五十石なり。其の身は二十人のもとに一日がはりに養はれて、一生を終はれり。越前死すれば二十人の士大に愁傷して一字を建立す。今下總の古河城下の鮭延寺これなり。

四七四 烏丸光廣卿行狀の事

烏丸光廣卿は常の居間に書物を繕きならべ、四枚のふすま二枚ひらき、机一脚に硯ありて、三本入の扇子箱に筆あり。其の間に年月経ても人の入る事なし。故に座したるあとありて其の外は塵滿ちたり。公宴参内の時も扇子箱に硯石を入れ、手にさげ乘輿に入られけり。此の卿江戸に召されて三年

おはしけり。(高倉屋敷に有りとかや)かくて歸京あるべきよし聞えけるに、兼ねて座敷の前に庫有りしを、留守におかれし雜掌いひけるは、公久しく江戸におはして廣き所になれ給ひ、歸京の後、此の庫目前に有りてあしかりなんとて壞ちたり。庫には數十年諸家より贈りし物を積みたるなり。其の物は書院にならべ、詳に書き記して家人に分ち與へけり。かくて光廣卿歸京有りて程經しかども、庫の事はいひ出されず。雜掌庭のさまの異なるにやといひしに、げにも廣くなりぬ、庫はいかにしたるやと問はれしに、しかじかしたりと申す。内の寶物はいかゞしたると有りしに皆くばり與へて候ふと申す。それは誠によかりけり、汝は何を得たるやと問はれければ、いや一種もとらずといへば、無調法の事かなと打ち笑ひて、とりあへもせられざりきとぞ。君臣禪理を好まれし故なりとかや。

四七五 中院通村公江戸にて和歌を詠み給ひし事

大猷院殿の御時中院内府通村公御不審の事ありて、江戸南光坊にとごもりて三年おはしましけるが、秋月を見て、
ゆくかたに身をばさそはて夜な夜なの袖の露とふむさしの月

と詠せられしな、僧正感吟に堪へずして、大猷院殿に申されしかば、三年の逗留旅情さぞあらん。今は歸京候へと仰せ出だされて、内府京都に歸られけり。

四七六 本多忠義書籍評論の事

本多能登守忠義或時近習の人に、近きころ世にもてはやす書の事を問はれしに、平家物語評判の事を申す者あり。それは誰が著したるにやと問はる。由井正雪が作り候ふと答ふ。忠義凡そ書籍は賢人君子の著す處なるゆゑにこそ崇む事にはあれ。正雪は大悪逆の賊なり。よも正しき事はあらじ。其の書籍聞くと穢はしく覺ゆ。人を以て言をすてずといふ事のあれども、かゝる凶賊の何條よき言のあるべき、汝等よく心得よといはれけり。

四七七 義經の鞍の事

降須賀阿波守至領古戰場の事跡を尋ね、古き物のすたれしを求められしに、八島の軍に義經の土佐藤織信を葬りける時、最愛の太夫黒といふ馬を脚にせられし、其の鞍志波の寺に有りしな、彼の寺

の破壊したるを修補して鞍を乞ひ得たり。其の後年久しくなりて、庫を司る人くはしく其の事の由を知らず。他の鞍の中にまじへ置きたり。程經て上田半平安重とて、聞ゆる取法の上手あり。其の比たぐひなき悪馬の有りて人々乗り煩ひしに、上田此の馬にはよい鞍置いて乗りたらばよかりなるといひしかば、あまたの鞍を出だして見するに、上田いとふるき鞍を取り出だして、是れこそとて彼の馬におかせけり。上田をそれむ者何條鞍に故あるべき。いざ見よとてあつまりけるに、三浦次郎右衛門といふ鐵砲をあづかりし人、年老いたるが此れを見物に出でて、久しき名物の判官の鞍を見たるよといひしかば、其の故を問うて聞きけり。悪馬ももとより乗り得ければ、上田がよいよ名高く成りにけり。

四七八 根來法師賞功の定井大澤仁右衛門が事

紀伊國根來谷の法師はむかしより武勇を好む。定まりたる法ありて、第一の功名には感狀に玳瑁の槍二本・銅鎧三十貫。其の次感狀に槍二本・銅鎧二十貫。其の次には感狀に槍一本・銅鎧十貫文。根來の内に大澤仁右衛門といふ者三番槍を合はす。感狀に槍・銅鎧をも添へてうけ得しが、大阪にて秀

頼に従ひ、城落ちて後九鬼の家に有りしが、大阪籠城の人禁錮せられしを、土井利勝ひそかにやしなひ置かれけり。

四七九 大音主馬之助先登を論ずる事

加賀利常に仕へし大音主馬助に、若き人々あまた、いかに大音心はたげく候はんも、されども今ははしる事叶ふまじ。麒麟も老いぬればといふ事思ひ出だされ候ふといふ。主馬聞きて五町十町かけ走りて、敵の真中に只一人かけ出づる事なり易き事にあらず。早く走りたればとてきのみ益なき事なり。先にかけて行く人ありて、後につよくをまたれば、この老人もつよくべし。槍あひは儘六七間に過ぎず。主馬が如き老いおとろへたる身も、其の時心剛ならばおくれまじ。五町十町はしる事は若き人のなし易き事なれども、六七間のきはに至りて箭玉はげしければ、若きとて走られぬものなりといひしに、皆詞なかりけり。

四八〇 永田治兵衛功名の事附樫井合戦の事

永田治兵衛は平生多病なりしかば、何の用にたつべきと人のいふを以て、下部こそは健なるがよけれ。士は義と勇とにありといふを、人々せんかたなくていふ詞なかりしと、また嘲りけるに泉州樫井にて、淡輪六郎兵衛が首取りて旗本に行く。平生多病の男かゝるふるまひし候ふに無病の人たち今日功名なく候ふやといふに答ふる人なかりけり。又上田主水は宗古といひしが、石田に與みして淺野幸長にあづけ置かれしが、茶の湯をもてあそびける故、殿の國こそ大なれ、一萬石の茶湯法師を召し置かれたりと誇りけるに、幸長聞きて上田に脇差を與へ、汝を誹る者あると聞く。必ず大切の時に功名する心得あれかしと詞をかけられしかば、上田事に臨み刃に血を染め申さんといひしを、また鼠の血ならではつけ得じといひけるが、樫井にて目を驚かす軍して討ち取つたる首を捉ぐ。幸長の日出の王子の陣に至りて、士ひしと幾らも並み居たる處にて、茶湯法師におとられし人々よといひけるに、とかくいふ人なかりけり。

〔樫井の軍は大阪夏の事にて、大野主馬大將にて、塙國右衛門先陣して今泉に攻め入りけり。岡部大學塙が武功をそれみ、抜けがけして阿部野を和泉路にさして進み行き、四月二十八日夜明けて國府の東の山に畑のたつを、岡部が士どもすはや相圖の火の見ゆるといさみ、蟻通明神の北より

貞塚さして進み行き、淺野長晟は信達に陣せしに、大阪より大軍よすると聞き、樫井に引き返すを、搦我れ行きて敵の體見て來らんとて唯一騎、淡輪六郎兵衛といふ案内者を引き具して馳せ行く處に、岡部を見つげ搦馬の上よりわけがけしたりしよな、今朝よりの軍を聞かんと罵る。岡部敵なければ功名もなしといふ。互に相罵りけるがあれなる安松を焼き拂ひたらばよかりなん。又蟻通の松原に伏兵あらん覺束なきに、後陣のつゞくをまたんとて物見を出だす。長晟の士大將淺野左衛門佐安松に來りて、龜田大隅にとく兵をあげられよといへり。又搦が物見、乗り歸りて敵近く候ふといふを、岡部聞きて兜を取つて著、馬にもる鎧を合はせてかけ出だす。搦いかに後陣をまたれよといへども耳にも聞き入れず。搦怒りて汝に先を馳けさせんやといひて、是れも馬を乗り出だす。龜田は殿して引き退く處に、透間もなく追つ懸けたり。大隅は討死までと思ひ定めて、石橋によりて十文字の槍を横たへ待ちかけたりしに、淺野左衛門見て何とて軍したるくせんといふ事ぞ、とく引き退かれよといふ。上田主水は樫井の家の中にかくれ居て、左衛門をやり過し、後に残り居しに、淡輪真先かけて馳せ入る處を、永田治兵衛討ち取りたり。かくて大阪方はせよする處を、上田主水槍を提げて散々に相たしかひ、山掛三郎左衛門と引きくみたり。横

井平左衛門・横關新三郎かけよりて山掛を討ちとりぬ。龜田を始として殿の者ごと面もふらずなめきさけんで相戦ひしかば、大坂方敗北す。搦は田子助左衛門が射ける箭に痛手を蒙り、十文字の槍を取りのへ田子が己の弦を突き切る。八木新左衛門すかさず走り寄りしかば、搦家の壁にもたれて、思ふほご働きて終に討死す。大野は貞塚にて先陣の戦を聞きかけむかへば、樫井の軍散じけり。又一説に、淺野但馬守長晟紀州を打ち立ち、五千の兵にて泉州市場に著いて、大阪より四萬にて向ふと聞き、淺野左衛門敵いづくに向ふとも、市場表にて一戦せんといふ。龜田大隅後の勝こそ大事なれ。四萬の數を五千にて支へん事地利によるべし。一里引き退きて、蟻通明神の松原を前にあて、安松に先陣を押し出だし、敵を引き付け、八町なばてをくり引くに、樫井にて戦はん。此の所松原ありて敵に見すかされず。八町なばては双方深田にて、一騎打なれば多兵かりがたし。然らば一騎合の勝負にて、必定味方の勝利なりといふ。淺野聞きて敵の旗をだに見ずして北げん事然るべからず、龜田は引かれよ、我れば引くまじきといふ。龜田我れ此所に功名を遂げずば、討死せんと誓言して出陣したれば、樫井に於て一番槍を合はするか討死か、二ツの中を出です。こゝにて一戦せられよ、必ず敗軍なるべしといふ、淺野怒りて物前に不吉の

一言なりと罵りけるな、淺野左近とりあつかひ、所詮但馬守の下知にまかせよとて、前田越前を以て事のよしを申す。長晟兩人の存する所尤もなり、龜田は度々武功ほまれの物しなれば、先陣五千の下知は龜田心のまゝにせよと下知せらる。前田歸りて新くといへば、龜田涙を流し悦ひけり。軍兵を安松に引きとる處に、淺野左近・同日向・安井喜内・田子助右衛門・伊藤金右衛門等従ひけり。安松の長瀧村に陣す。市場に残る淺野左衛門・同大炊・仙石因幡・三木小左衛門、未明に安松まで兵を引き取りければ、陣すへき所なく、樫井に入りて半ば河原に陣しけり。大坂の軍は瓜生野にて勢揃し、先陣塙團右衛門、二陣岡部大學なりしが、二人不和にて、塙真先に進み行き、四月廿九日泉州貝塚にて兵糧を遺ふ。大野主馬は酒宴して打ち立たず。其の時塙は三百計の兵にて安松にはせ入り火をかくる。龜田は蟻通の北へ物見に出づる所に、淺野左衛門乗り來り汝がはかりし所甚だ感じ入たりといふ。龜田物前の積り論する事は珍しからざる事なりといふ。旗本の旗色しごるなり直されよといへば、左衛門心得たりとて乗り戻る。かゝる所に上田主水來りて今日の合戦いかにいふ。龜田昨日計りし如く樫井にて軍すべし。とかく旗本の旗色悪しく見ゆるなり。乗り歸りて直されよといふ。上田乗り歸ると旗色ひしひしと直りたり。龜田其の後上田を感

じけるは此の事なり。龜田は南の町はづれに、左の池の堤に鐵砲五十挺ふせ馬より下り立ち、敵を待つ處に敵かけ來る。龜田思ふほごに引き付け、下知して鐵砲を搏たするに生死はしらず、騎馬の兵三十騎計りうち落す。敵是れにためらふひまに、鐵砲に薬こめて一町ばかりも引き取りたり。かくのごとく三度くり引にして、樫井の町に引き取り馬を立て並べて休み居たり。かゝる處に敵味方はしらず、東の河原より歩立の弓の者をひきわたる大將馬にて乗り來る。龜田河原へ乗り出だし、是れは大阪にて誰れの陣にてか候ふと問ふ。岡部大學と名乗つて馬上にて鎗だけに成りし時、大學馬を引き返して北に向つて引き退く。龜田きたなし返せと呼ばはり、一町ばかり追ひ捨て、樫井に歸り、こゝにて討死までと獨言して、石橋に腰かけ、十文字の鎗をとり、鐵砲の者をあつむるにちりぢりになり、唯三人残り止まりぬ。三人龜田が前に來て、腰ぬけども足まとひになり候ふ。落ちたるこそよけれとて少しもひるまず。龜田大に賞する所に、上田一騎乗り來り先に鐵砲の音しけるに、はやくも引きとられたるよといふ。龜田聞きて我れと御邊と二人討死するならば屍の山をもなすべし。但州公は琵琶が嶽を越させ給ひ、自害ありしといふは誠なりや。敵進み來るともまた一時にあらずやといふ處に、一騎は赤くよるひ、一騎は二三間おくれたる

が、黒くよるひたる者かけ来る。赤き物具は塙、黒き出立は塙が手の者なり、塙は龜田に向ひ、塙が従者は上田に向ふ。龜田立ち上り飛び出でて鎗組みたり。敵の鎗龜田が兜を二打三打うつ處を、十文字の鎗にて胸板又左の脇を突いてつき伏せ、龜田が土管野兵右衛門來り首をとる。塙伏しながら菅野が足を切り拂ふ。菅野加右衛門助け來り、塙が上に乗りかゝり、兵右衛門に首を取らせぬ。上田が鎗を打ち折り、無手と組みたる處に、上田が手の者二人たすけ來りて敵をうち取る。上田は痛手おひける。龜田は猶進み出で、十文字の鎗を足にて踏み直し居たる處に、又敵一騎、かけ來り槍を合はす。菅野加右衛門鎗にて脇つばを突く。須田佐兵衛其の首をとる。差物に谷下吉左衛門と書きたり。此の時敵一人來りて龜田に向ふを突き拂ひたり。大阪方まばらがけして、先陣の大將討たれしかば敗北しけり。東照宮も龜田が此の日の軍を詞にほめさせ給ふといへり。龜田は父を溝口半左衛門とて柴田勝家に仕ふ。大隅若き時は半之丞といひて、十六の時初陣なりしが、柴田伊賀守に屬して、越前白鬼戸女河原にて、(一本に白木戸)馬上の敵を打ち取り、柴田父子感狀を與へらる。又越前丸岡の城へ一揆押し寄せたる時も功名あり。志津ヶ嶽の軍にもよい首取りたり。後淺野家に仕へ、小田原・田中・武藏忍・岩槻の城攻にも度々功名したりけれ

は、秀吉之れを賞せらる。文祿年中朝鮮蔚山にて、敵六騎と馬上にて太刀打し、一騎斬つて落し其の首を取りければ、幸長感狀を與へらる。慶長五年濃州合渡にても功名し、瑞龍寺の二の丸に先登し、度々武勇譽れ高かりければ、京都にて台徳院殿御前へ召し出だされ、龜田が働たぐひまれなりとて、御腰物を賜はり、上田も同じく賜物有りて賞せられけり。龜田後安藝東條の城主となり、一萬九千石を幸長あたへらる。仔細有りて淺野家を去り、高野山學侶花王院のもとに隠れ、寛永十年八月十三日卒しけるとぞ。

四八一 於萬の方塙右衛門を扶持せられし事

紀伊大納言頼宣の母君をばお萬の方と申す。駿河にて塙右衛門は名高き大剛の士也と聞きて、お千たちに太刀をまゐらするは常の事なり。大將の寶といふは士に過ぎたるはなしとて、鏡鍔金とて、毎年五百兩たまはりける中を二百兩分ちて、塙が流落せし内は與へられぬ。事ある時は剛の者一人にても、いとほしき子にまゐらせんといはれきとかや。

四八二 奥平家の士の妻髪を切りて節を守る事

奥平の長臣奥平源八源八父の輩同姓隼人を討ちしに相與みせる士多し。源八幼くして奥平の家を立ち去りしに、一味の面々も皆立ち去りて、源八が成長を待ち居ける。其の中に一人の士妻は稻葉丹後守正通正通の家の士の女にて有りけるが、父のもとに預け置きしに、頓て鬘討つべきに及びて、妻のもとに行きて存する旨のあれば離別するなり。いづ方にも嫁し候ひて、親の苦勞に成り給はざれといひければ、彼の妻聞きて年久しく隔なく過ぎ候ひしに、俄にかく仰せ候ふは定めて故有るべし。然らずしていとま給はりては、親に向ひていかにいふべき詞も候はずといひければ、今はつゝみがたくして誠はしかじかの仔細にて、鬘をうつに組みしたれば、其の時は討死するか、又は公の咎によりて殺さるか、二つの間に有るべし。御身は年若き人の我が死後に艱難すべければ、いたはしくしてかくの如くいひつるなりと語りければ、彼の妻もとゆひの際より髪をふつときり、鬘打すまじ給うて相見ゆるまで此の髪いろの申さじと誓言して別れけるとなり。其の後鬘討おほせて彼の士も散々に働き、助太刀して彼の妻のもとに行きて對面しけるに、もとゆひの間より髪の長く出でてもとゆひは其

のまゝ有りきとぞ。

四八三 優婆塞の馬の事 附信玄馬を擇ばれし事

越前忠直忠直叛志ありと世に聞えし比、加賀の前田利常は隣國なれば軍の支度せられしに、物具着て乗るべき馬を擇ぶに、加賀の領國の中二千疋にあまれる中にて、富田越後が馬を擇り出だす。鹿毛にて二寸五歩あくまで駿馬なり、大庭に旗數百本立て並べ、ふせつたてつして、金鼓を鳴らし鐵砲をうちしに少しも驚かず、名をば優婆塞とつけられたり。今一匹とて擇ばれしに似たる馬もなかりける。
 「凡そ大將の馬を擇ぶに心得有るべきにや、甲斐の武田の家にて氷澤といひしもの、奥州に行きて馬を求むる時、信玄一首の和歌を書きて與へらる。
 上野の中のかんこそ大將の乗るべき馬としれやものゝふ
 信玄五十疋の馬の中に軍に乘られし馬、四足栗毛・中段とて只二疋あり。甲斐山梨郡とし野といふ所の百姓、此の四足を養ひ置きしを、氷澤見て又なき馬なりと信玄に申して、五十貫の地を與へて此の馬を信玄に牽りぬ。今泰平久しくなりて馬を擇ぶの理を知る人なく、益なき觀の美に黃

金を費す事には成りぬるなり。是れみな上より下にいたるまで、軍旅に明かならざる故なり。」

四八四 森寺藤左衛門池田家興立の事并森寺政右衛門武勇の事

池田の長臣森寺秀勝は伊勢の赤堀郡秋の城主なりしが、伊勢の國司を攻め落されけり。藤左衛門秀勝其の比幼かりしを母抱きて落ち行き、尾州織田信秀の許にかくれ居たり。護國公池田輝母君を養徳院といひしが、江州より落ちぶれて清洲に來りしを、藤左衛門瀧川一益に頼みて、信長の乳母に出だしに、信長護國公と同年なれば、遊び相手となりて年をおくれり。故有りて護國公出奔し給ふ時森寺も同じく打ちつれて、赤堀に匿れ居る事五年に及べり。かくて信長星崎の城を攻めんと聞きて、森寺商の體にてもなし、清洲の城の厨に行きて物具を求むべき支度せばやと存ずれども金も銀も候はず。あはれ少しばかり給はり候へと護國公の母君に潜かにいひければ、我れも金銀のあらばこそ、此れなりともと綾や小袖三ツ出だして森寺にあたへらる。森寺いそぎ出でて銀錢六十に換へたり。古き物具を買ひたれども兜なければ、齒にて染めたる布を鉢巻にして、星崎に向ひ給ひしかば、信長悦んで護國公をもとの如くつかはれけり。藤左衛門子を政右衛門といふすぐれたるあら者なり。政右

衛門忠勝十八歳の時いづれの所にて有りしやしらず。護國公の前に有りし時、稻葉伊豫守一徹のもとより、備前の陶とてとくりを贈られけり。政右衛門見て是れは贋物なり、あらぬ物をたばかりて豫州さぞ笑はれ候ふべし。悪き奴にこそ候へ。あはれ伊豫守が目の前にて打ち碎きたらば快く候ふべしといふ。護國公汝が詞無禮なり。豫州が目の前にて碎くべくば、くだいて見よとの詞を聞くより座を立ちて、とくりを懐に入れ伊豫守の方に行きたり。かゝる事とはしらず對面せられしに、政右衛門とくりを取り出だし備前にて焼きたる物には候はず。贋物なれば返し申すといひもあへず、柱におてて打ち碎きつと走り出でければ、一徹それとてめもと下知せられしに、かけのびて歸りけり。護國公は政右衛門がつらだましひ、一定伊豫守のもとにて打ち碎くべし。危き事なりとて門内に待ち給ひし處に歸り來り、しかじかせししるしは此れなりとて、とくりのかけたる口を取り出だし見せ申して後申しけるは、凡そ君となる身は一言も謹あるべき事に候ふ。先に申しし詞は無禮なれど碎くべくばくだいて見よとはりあひなかけられ、若き男の骨をささまるゝともさてやむべきや。避れ得て歸りしは幸なり。已後は謹み給へといひけり。政右衛門美濃の竹が鼻に居し比、木全又藏といふ士ゆかり有りて森寺がもとに居たり。

〔又藏が父は五右衛門とて大剛の者なりしが、或時野伏一揆しけるに木全山の中にわけ入りしかば、それはいかにと問ふ。中へんにかまへ候ふと答ふ。程なく一揆のうち通りける所を、山の上よりごつとをめて突いてかよりしかば、小勢を大軍なりと思ひ、一揆さんさんに敗北しければ、木全が鎗にて中へんにかまふると世にいばれし人なり。〕

政右衛門又藏に心を合はせ、同國高木何某を討たんと計りけり。又藏竹が鼻の竹林にかくれ待ちしに、高木夜中に打ち過ぎける處を走り出でて唯一鎗に突き殺し、從者共を道つちらしてけり。高木が子二人父の仇報いんと聞えしに、政右衛門或年江戸に行く時荒井に宿せしに、敵道に待つと聞きて、舞阪に行く道の程三十間ばかりもべだて、凡そ八百人も待ちかけたりしに、政右衛門しつしつと乗り通りしに、敵更にとりあはねば、政右衛門從者五六人にて馬を引き返し、仇の前に乗り行く。是れに待ちたるは高木に候ふや、かく申す森寺を仇にてうたんとや、唯今何とてうち候はぬぞや。さらば参りあはんと大音にいへども物いふ人なし。政右衛門あざ笑ひながら討ち候はぬぞや。此の後我れなうたうとは存じもより候はずと罵りて打ち過ぎ江戸に赴きたり。高木は訴へて政右衛門を討たんと申しければ、いづくにてもあれ、討ち候へと許されしが、又政右衛門にもきびしう防ぎをして、仇にうた

れざるをもて勝にせよとの事なりければ、常に鐵砲五挺に火繩に火をつけ、弓十挺に箭を關ひ、さやはづしたる鎗五本土士三十人うち連れけり。秀吉の時出仕しけるにもかくの如し。刀をも殿中に携へよと許さる。伏見の城を築かれし後、諸大名出仕有りしに、政右衛門にけふは出仕すべからず仇の必ず類ふべきといひしかども、政右衛門くるしうは候はずとて出仕す。秀吉の居間の次まで刀をいつも携へけれども、其の日は從者にもたせ置きて、廣間の仇の有りける中に打ち通りて、事故なく退出しけり。後慶長四年四月に参河にて病死したりけり。

四八五 伴玄札殉死を止むる事

國清公池田三左衛門世を下らせ給ふ時、伴玄札は寵臣なりしかば、必ず殉死すべき者なりと人もいひけるを、興國公武藏守聞し召し、よく心を付けよと侍臣に仰せられけり。御柩にをさまらせ給ふ日、其の次の間なりしふすまをひらき、それに入りて又閉ぢけるをあやしみ行きて見れば、脇差をばや腹に突き立てけるを抱きおこし人多く重なりておし留め置きかくと申しければ、興國公急ぎ御出有りて、立札いかにと仰せられしかば、玄札承り御恩深く蒙り候へば御供仕りなす志にて候ふに、見つげられ

しは口をしく候ふ。御ゆるされをもち、快く死出の道に赴き申すべしと申し上げけるを聞し召し、さもあるべき事なり。されども我が士の主には成り難きを見すて、先代の供したらんには、人々思ふ様も、玄札は先殿の志をも知り、寵愛に遇ひたる身のよくよく今の嗣は劣り果てたる故、供して死したるならんといはんには、今までの士一人も我れに心服する者あらじ。我れは獨夫と成りはてん事目前なり。我れを獨夫にしなして、それを忠とも義とも思ひなんには、とく死して御供申すべし、強ひて我れをし留むべきや、我れは汝が死するに依つて、士の主には成る事あたはじ。只とく死ねよと仰せられければ、玄札涙を流し存じよらぬ仰を承り、誠に進退究まり候ふと申しければ、興國公とく死して我れを獨夫にして、先代への奉公とせよと再三仰せられしかば、玄札とかくいはず、斬りありけるが、仰の趣承り候ひぬ。士ほどの者が刀を腹に突きたてながら、さて止むべきには候はれども、只今の御詞によりて、恥をしのびて人に後指をさし候ふとも、ながらへ罷り在るべしと申しければ、さては我れ士の主になる事を得たり。汝が忠義比類あるべからず。よくいたはりてと仰せられ内に入らせ給ひけり。

四八六 番大膳二條城へ使に參る事

池田の家の士大將番大膳景次は父を藤左衛門景元といふ。尾張智多郡荒尾といふ所の人なり。大阪冬の軍尼ヶ崎の城にて、片桐が兵ども討たれしを援はざるにより、二心ありと東照宮疑ひ思召すし聞えしかば、其の仔細を申し述べんが爲使を參らすべきに、誰れかよく使せんと、各使を擇び其の姓名を書きて出だすべき旨興國公の仰せにより、數百千の士半を過ぎて、大膳が姓名をしろして出だしけり。公自ら書き記さし給ふも同じければ、さらばとて西宮の陣所にて大膳に仰せ付けらる。

〔大膳、公の御前を退き出でける時、長臣たちを始として、いやが上に重なりたる所を通らんとするに、伊木長門大膳に向ひ、今度の使は大事なり。よく心得られしやといひしに、大膳不才の身、仰の旨は承り候ひぬ。此れをといふまゝに、懐より九寸ばかりの匕首の氷の如く見ゆるを抜き出だし、至つてわざ物にて候ふ、大御所の御座近く参りて申し候ふより外は、存じ候はずといひければ、長門尤もなり。我れ行くべしと思ひしに、かくの如くなればいふべき事なしといひけり。〕

二條の城に参りければ、東照宮の御前に召されて仔細を糺させ給ふに、一々道理明かに申したりしかども、猶聞し召し入れらるべき氣色なかりければ、尼ヶ崎の地圖を取り出だし、武藏守露塵ばかりも二心なき由を申ししかば、其の時疑ひ思し召さるよし仰せ出だされて退出しけり。人々再三押し返し諍ひ奉りて、武藏守躰なきよしを申しし有様、類少き者なりと感あへりしに、東照宮も其の後大膳が事をゆゑしき者なり、誠に豪傑とは大膳なるべしと仰あり。

〔大膳はもみ髭ありて、容儀ゆゑしき人なりしかば、退出しける時髭よくもいひたりと仰せられ、其の座に有りし人々も御玄關に由ておくり、且つしる人になりたりとなり。〕
 番後祿千石を賜はり其の後千石の祿を増し賜はり、芳烈公（光厳天皇の御孫）の時に至りて政を執りたり。寛永十三年七月六日病みて死す。

卷の二十四

四八七 熊澤了介の略傳

池田の家にて政を執り、四海にほまれ高き熊澤次郎八伯繼了介は本姓野尻なり。加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて、外大父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす。守久初は喜三郎といふ。喜三郎父を平三郎とて尾張の人なり。東照宮に仕へ奉り三形原にて討死しけり。守久其の後福島正則に仕へ、正則安藤備後を削られ、信州川中島に流罪の時、正則の江戸の屋敷をかこみて、もし仰を背かば忽ち討ち滅ぼさんと成り。正則の士大かた出奔しけるが、士只七人残りといまりし中に半右衛門も留まり。正則江戸を出でて川中島に赴く時、途にて殺さるべしと云ひふらす。守久節をまもりて附き従ひ信州に参りければ、正則日比龍愛の淺かりし事を悔まれぬ。後水戸の威公に仕へけり。一利は後鍋島に仕へて島原の城攻に武功あり。延寶八年八月廿三日備前岡山に卒す。番山に葬りぬ。次郎八寛永十一年十六歳にて備前に來り、芳烈公に仕ふ。十三年島原一揆の亂起りし時、公江戸におはし、仰を奉りて岡山に歸らせ給ふ。此れは一揆猶落城せずば師を出されんが爲なり。此の時次郎八いまだ元

服せざりし故、江戸に留め置かれしが、自ら元服してひそかに岡山に歸りたり。十五年岡山を去りて近江の桐原にかくれ居たり。二十四の歳高島郡小川村にゆきて中江推命を師とし、道を問ひ歸りて又高島にゆく。其の時父野尻氏仕へを求め江戸に赴く。次郎八に母妹をそへて、東近江の人遠き所に殘しといめたりしに、家甚だ貧しくて、江州の賤しき百姓の食するゆりの雑炊を飯とし、糠を食して魚肉酒茶の味をしらず。やうやう帯子を着て寒をふせぐ事五年。相しる人母妹のありて餓死せん事をあはれぶばかりなり。中江王陽明の書を讀みて、良知の旨を次郎八に語り示す。芳烈公伯繼の王佐の才ある事をしるしめし、京極主膳に就きて復來り仕へなんやと度々問はせ給ひければ、正保二年再び備前に參りて仕へけり。餘三千石を賜はり、政を執りたり。和氣郡入塔寺は備前、美作、播磨犬牙の如く入りまじりたる地にて、次郎八請取口とす。和氣郡の人便宜の地に因りて、田を墾き士數十人を土着とす。此の時伯繼を助右衛門と稱しけり。公の參勤に従ひて江戸にゆく事度々に及べり。世の名譽高く其の道を慕ふ人多し。紀伊大納言賴宣卿・松平伊豆守信綱・板倉周防守重宗・久世大和守廣之・板倉内膳正重矩・松平日向守信之・堀田筑前守正俊其の餘の大名數を知らず。大猷院殿其の人となりな深く信じ給ひ、召して尋ね問はるべき處に、慶安四年かくれさせ給ひて謁見し奉らず。承應四年

備前大に水出で明暦年間飢饉す災あり。次郎八、日夜國中を巡り撫育に心を盡くす。伯繼日比儉にして、家中婢女寡くいとなむ事少し。唯客を愛して組の士朝夕となく來りて相語る。伯繼水理を論ずる事妙を得、國中水を通し池を作り、旱魃の防をなすに、みな馬上より打ち詠めて其の利害を定め論ずるに、數十年の後其の言皆中らざるはなしといへり。明暦二年和氣郡木谷の狩に山より倒れ落ち、此れより脚を惱めり。かくて和氣郡寺日村は其の餘地なれば、蕃山と名を更めて世を遊るゝるざしあり。つぐは山は山しげ山しげれと思ひ入るにはさはらざりけり。といふ和歌の心にて名付けしといへり。病により明暦三年祿を辭し京に赴く。其の道を慕ひて門人となりし人々は、中院大納言通茂卿・同通躬卿・野々宮中納言家縁卿・野々宮中將定基朝臣・清水谷大納言實業卿・押小路三位公起卿・久世中將定清朝臣・久我右府廣通公・油小路大納言隆貞卿・中御門大納言資照卿・伏原三位宣業卿を始として、あまた伯繼を師とし貴び給へり。此の時所司代牧野佐渡守親成人の讒言を信じて伯繼を憎む。又其の才を妬む者あるによりて、世にさまざまいひふち事どもありて、寛文七年四十九にて大和の芳野に匿れ、

この春はよしの、山の山もりとなりてこそしれ花のこころな
 とよめるは芳野にての事なり。又山城の鹿背山に引きこもり、又播磨の赤石に移り居、延寶七年六十
 一歳にして大和の矢田山にかくれたり。赤石は松平日向守信之の領地たるが、日向守領地を大和の郡
 山に移す故なり。貞享四年八月、常憲院殿の仰により下總の古河にゆく。日向守領地を古河に移す
 故なり。日向守深く伯繼を尊信せられたり。同年の冬封事を江戸に奉り、政事を更正すべき旨を申す
 により、大に旨に忤ふ事ありて永くとちこめ置くべきよし仰せ出だされけり。此の後人の來て物語す
 るにもし國政の事に及べば、かたはらなる筈を取り吹きて一事もいふ事なし。元祿四年八月十七日古
 河の城頼政部に戦死し、城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ。歳七十三なり。伯繼の學朱子王子に劣らず、
 別に一種の學をなすといへども、文學に短にして政事之才、其の長ざる處、自著せし書に見えれば、
 爰に詳にせず。

四八八 小櫃與五右衛門會津神公を諷諫せし事

會津中將保科正之は、台徳院殿の第九男にておはせしが、殊に豪氣あり。近習の人に向ひて人々の

たのしむ所を尋ねられしに、小櫃與五右衛門といへる者臣が樂しむ所ニツあり。其の一ツは家貧しく
 て奢といふ事をしらず。天より命ぜられし貧をたのしむよしを申す。其の一ツを問はるゝに是れは憚
 る所の候ふとて言はず。強ひて問はれしかば謹んで申しけるやう、大名に生まれざるを天の冥加と存
 じたのしむ處なりと答へければ、その仔細を問はるゝに、大名は天性かしくおはし候うても、臣下こ
 れを馬鹿にとりなし候ふ、稟少き身は其の節や朋友あしき事を戒め諒め候ふ故に、其の身を省みて馬
 鹿にならず候へども、大名はさばなく候ふ。臣たる者とかく忤らひては、身の爲よからじと存じて、
 其の主のよき事あれば山の如くにほめ申し、いろいろの悪しき習はしを付け候ふほごに、いつとなく
 恣になりもて行き、それよりは一言の諫をも申しがたく候ふ。いかに聰明にても學問もなく教とい
 ふ事をしらず。善事を辨へ給ふべきやうなきゆゑ、馬鹿になりはて候ふは口をしき事に候はずや。臣
 大名に生まれざるを樂と存じ候ふは此の子細に候ふと申せば、中將つくづくと聞き召してよくもい
 ひたるかな尤も至極せり。今より馬鹿に成らざる思慮すべきよとて賞美のあまり、即刻三百石の祿を
 増し與へられけり。それより山崎嘉右衛門を尊信し學問を嗜まれ、後神公と諡せしは此の中將の御
 事なり。

四八九 水戸義公御事業の概略

水戸中納言光圀は頼房卿の第三の子東照宮の御孫なり。寛永十年威公の嗣いまだ定まらざりしかば、殿有院殿の仰にて、中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三ツに成り給ひしを見て、かくと申し上げて嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる處あり。是れ嗣は兄の頼重立ち給はん事なるに、かく定まりつれば、長子の方に家を譲るべき志此れよりして起れり。是れより又學問を好み給ふの志深し。明暦三年より大日本史を撰び始めらる。神功皇后を帝紀を翻けて後に列し、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と立てらる。皆此の君の義烈なり。寛文三年頼房卿卒去あり。葬禮僧家の法を用ひず、瑞龍山に葬り威公と諡し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士ありしに、自ら其の家に至りて止めらるるに、其の理正しき故に殉死をとゞまらざりしかば、此事聞えて殉死天下一統停止の旨仰せ出だされしは此の君のゆゑなり。又兄の頼重卿の子松千代綱方をして、養嗣とせられん事を乞ひて、若し聞き入れられずば世を避るべき志なりしかば、頼重卿許諾あり。松千代の弟采女綱條をも引きとり養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜といひし文學ある者、清朝の粟

を食せずして日本に渡りしを筑後柳川の文學安藤省庵其の俸祿の半を分けて養ひ置きしを召して師とし給へり。綱方病によりて卒去ありしかども、弟綱條を養ひ置かれし故、即ち世嗣になし給ひぬ。延寶元年孔子の堂を水戸に立て給はん爲、江戸駒込の屋敷にかりの殿をなし給ふ。日本古よりの假字の文章を編みて三十卷となしたるを、天聽に達じ、後西院の帝名を扶桑拾葉と賜はり、即ち獻じ奉り給ふ。天和二年朝鮮の使臣江戸に來り、三使進物の目錄禮儀を失せる故、三條の疑問有りに答ふる問なかりきとなり。後西院の帝の勅令により、國足といへる御硯に銘を作られしかば、宸筆を下し給はりて賞美せさせ給ふ。其の御詞の中に、備武兼文絶代名士といへる句有りしを、印に彫らせられきとなり。元禄三年領國を綱條卿にゆづり給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて歌に位山のぼるもくるし老の身はふもとの里を住みよかりける。是れより常陸の久慈郡太田郷の西山に引き籠り給ひしに、山莊の有りさま萱をもて葺き、門垣には馬はひかきり、只竹がき一重にて池に蓮を植ゑ、西山のほとりに桃數百株あれば、川の流の橋を桃源橋と名づけ、鹿をばなち鶴をかかせ給ふによくなつきけり。瑞龍山に壽殿を設け衣冠を埋み、碑陰の銘を自ら作り給へり。久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂を立て、頼義・義家の神主を置かせらる。又攝州淡

川に楠正成の墓を修し、碑を立て、碑面に嗚呼忠臣楠子之墓と自筆し、陰には舜水の撰びし讀をばら
 せられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、其の文集を輯して門人源光國と稱し給へり。彰考館を
 作りて和漢の群書をあつめられしに、遠國他郷に學士を遣はし、半部一行の反故をも、見るに隨ひ拍
 ひ收め給ひけるほどに、色々の書も編集ありけり。中にも禮典類聚五百卷は日本古來よりの寶典と
 稱すべしといへり。寛文五年領國中の淫祠三千八百こぼちすて、新地の寺院九百九十七除かれ、多珂
 郡にて成野ありしに、馬を放ち牧となし給へり。地の利を盡くす術に心を盡くされ、海參白魚昆布な
 ひ沼が浦にまき、海に蛤をはなち、是れより海物多く出づ。山には漆・楮多く植ゑさせ給ひけり。
 元祿十三年西山に逝去あり。義公と諡せしとなり。
 〔國初より已來の諸侯の中に、會津の神公、水戸の義公、備藩の芳烈公、三公の如きは寔に非常の
 君と稱し奉るべし。神公の事詳なることを知らず、義公の一世の事跡西山遺事に書にしるした
 れば、只一二の大なることをしるせり。吾が藩の芳烈公の學校を作り賢才を招き、禮を以て度と
 なし給へる、異國をいはく衛の康叔・武公、燕の昭王の如き君を并せて芳烈公に比倫すべきや。
 予別にしるせる物あれば此の篇には詳にせず。〕

四九〇 渡邊數馬報警始末の事

渡邊數馬弟源大夫が仇河合又五郎を討ちけるは、寛永十一年十一月七日の事なり。もと數馬は松平
 宮内少輔忠雄に仕へて、忠雄備前岡山におはしける比、寛永七年七月廿一日城の大手にてなごり興行
 ありけり。其の夜數馬は妻の父津田豐後が方に行きけるに、河合又五郎數馬が宅に來り、こゝろ易か
 りしかば源大夫と物請りしけるが、いかなる故にや、主従四人にて源大夫を切り殺し、又五郎は脇差
 の鞘を落して行方しれず成りぬ。折節をさり見んとて群集しけるに、數馬が下部岩佐作兵衛頼ひ居し
 が、外のさわぎを聞き出でけるに、路次の内より刀を提げたる者に由あひ、何者なれば、士の家に刀
 を抜きて入りしやと詞をかけたる所に、徒目付の遠山才兵衛も來り合はせ、彼の者を切りとめけり。
 〔一説に、歩行の土三村孫右衛門通りかへり、内のさわぎを聞き走り入りて是れを聞き、又五郎を
 追つかげんとする處に、何者ともしらず玄關に走り入るものあり。孫右衛門を見て逃げんとする
 を、切り伏せたり。これは又五郎が下人にいひ付けて、源大夫にとりめをさせんためにもとし
 たるなりと、後に聞えきとなり。〕

源大夫は深手負ひて、又五郎相手なるよしひて死しぬ。豊後が方に告げれば、數馬豊後も又五郎が父半左衛門方に行き對面すべしといへども、門を固く鎖して入り得ざりける。中に長臣荒尾志摩忠雄の折習加藤主膳かけ來りて、半左衛門は二人して受け取りぬ。忠雄半左衛門をば管權之介に預けられしに、半左衛門初は安藤對島守重信に奉行せしが、故有りて忠雄懇にせられしに、半左衛門口論して相手を斬り、出奔して渡邊數馬がもとに來りしな。潜にかくして祿を與へられし身なれば、又五郎を出だして取切らすべきものと、忠雄思はれしに、半左衛門は更に其の志に非ずして、又五郎江戸に行きけるを安藤治右衛門かくし置かれけり。久世三四郎・阿部四郎五郎兩人、忠雄の許に年久しく來れる人なれば、治右衛門にかくといはれけるに、治右衛門申しけるは、半左衛門を渡されなば其のまゝ又五郎を出だすべしとの事にて、此の旨を兩人忠雄に告ぐれども、尙も覺束なき體なれば、兩人たしかに又五郎を請け取り出だすべきとの起請文を忠雄に出だす。さらばとて半左衛門を江戸に召し下して取りかふべしとの事に及びて、治右衛門朋輩ども申す旨あり。仲間を除くべき故是非に及ばずと忠雄に申す。忠雄其の欺く事を怒りて、忠雄一族の人々心を合はせ、おし寄せて奪ひとらんと支度あり。

〔伊達政宗は論ずるまでもなし、ふみ潰して奪ひとるより外なしといはれきとなり。〕
 三家の御方和平の取り計らひ有りけれどもいまだ事遂げず。半左衛門は池田備中守長幸の許にあり。かゝる處に忠雄痘瘡を病みて卒去あり。弟の松平石見守輝澄・同右近大夫輝興、三家の御方に訴へ申す旨ありけるに、長幸も卒去ありて、半左衛門は松平阿波守忠英請け取りて、阿州に赴く道にて死す。安藤を始め皆を蒙り閉門仰せ付けられけり。寛永九年七月備前・因幡國替を仰せ出ださる。此の時數馬立ち退て備前の見島にあり、又五郎がゆくへを尋ねれども知れず。數馬が姉智荒木又右衛門大和の郡山にありけるが、又五郎が伯父河合甚左衛門も同じく郡山に在りて、暇を申して奈良に出でける故、又五郎が行方を聞かぬ爲に、數馬又右衛門方にゆきしに、又右衛門數馬一人しては危し、助太刀せんとして明くる年の三月まで荒木がもとに止め置き、三月又右衛門暇を乞ひ得て郡山を出にけり。是れは甚左衛門が悪口しけるによれりともいへり。さて數馬・又右衛門は攝州丹生の山田に妻子をあづけ置き、四月に江戸に赴き、所々捜りけれども行方をしらす。甚左衛門をば時々見かけしかども賊の仇にあらずれば打ち過ぎけるを、甚左衛門は嘲りけりとかや。かくて又丹生の山田に歸り、明くる寛永十一年大猷院殿御上京により京都に赴き、方々尋ねけれども行きあはず。また丹生の山田に歸り、其の

後又五郎有馬ありまに行くゆと聞き、有馬ありまにゆけども行きあはず。奈良ならに甚左衛門が妻子ありければ、十月朔つひ日奈良ならに行きて潜ひそにまゝに甚左衛門が方に又五郎かくれ居て、十一月六日江戸に赴ゆくしなれば、其の夜おし寄すべきとせしが、奈良ならは商家の事なり。途中ちゆうちゆうにて討つべしとて、數馬・又右衛門主従四人、甚左衛門がほとりに立ち明かしけり。六日の朝先は甚左衛門、中は又五郎、その跡に櫻井半兵衛、是れは又五郎が妹婿なり。弓鐵砲の上下二十人なり。七八町ばかりもついでて行くに、又五郎其の日は伊賀の嶋が原といふ所に宿す。四人見知られてはと裏の道もなき所をふみ破りて、三町ばかりも行き過ぎ宿をからんとすれば、怪みて、島が原へ心得られざる人こそ四人宿をかりつれと告げ遣はず。その由を又五郎が旅宿へしらせたり。數馬も又右衛門も敵にさとられずと、夜深く出でて山こもりして伊賀の上野小田町にしばしの宿をかり、最後の酒もりして待ちかけたり、肴はなしやといへば是れをなりともとて鬪を三ツ田だす。昔頭なし。數馬めでたしといひて、主人に酒の價をとて、金子二十兩ばかり投げ出だし興ふれば驚きたり。是れを限なれば何のためにせんといふ處に、主人の女房かつたぶしを出だす。數馬心の付きたるよとていたゞきけり。又右衛門着たる羽織はねおりを脱ぎて主人に興へ、庭に飛び出でてをどり上りをどりあがりしたる有様、すくやかなる男のけふを限りと思ふけしきあらは

れて、只鬼おになごもかくあらんと見えしと人後に語りけり。七日の朝又五郎島が原を出でて上野にかゝる。又五郎は思ふ仇なれば數馬討ちとむべし。甚左衛門は又右衛門立ち向ふべし。半兵衛は又右衛門が若黨わかしら武右衛門、數馬が若黨わかしら孫右衛門兩人かゝり合ふべしと相定め、間近まぢかくなりければ、又右衛門眞先なる甚左衛門に綱つなをかけ飛びかゝり、
 「一説に、又右衛門いかに甚左衛門日比のどうだぬきを見んといひも終はらず、一刀に切るといへり。」
 馬より切つて落す。甚左衛門刀半抽なまひきかけしを、二の太刀にてうち留めたり。半兵衛は鎗じやうの上手じやうと聞えしかば鎗をとらせず、馬より下りんとする處を、武右衛門一太刀切りたりけれども、あさ手にており立ちたり。從者鎗おつとり、半弓はんきゆうをも射かけ、透す間なく切つてかゝりしかば、二人爰を最後と相働さける所に、又右衛門かけ來りて多勢を切りまくり、半兵衛に渡り合ひ終に切り伏せたり。此の時又右衛門刀を打折りけり。其の刀伊賀守金道いがのしりが作なりけるとぞ。數馬又五郎と切り合ひける處に、又右衛門は從者を追つちらしかけ寄りて、數馬よくせよ助太刀すけだちはすまじきぞ、かなひがたくばかばらんと詞ことばをかけければ、

「一説に、又五郎がうしろへまはるといへり。」

數馬飛び込んで又五郎を討ちとめたり。かゝる處に藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野に在りけるが、數馬が親類なりしかば、かけ來り其の外上野の士あまた集まり、數馬・又右衛門主従とも嘉兵衛方に引きとりぬ。又五郎・甚左衛門は其の傍に死し、半兵衛は息かゝり居けるを引き取りたれば程なく死す。數馬十三所手負ひ、武右衛門痛手にて其の夜半に死す。又右衛門手負十所おひたり。斯くと藤堂家に聞えて、三人は嘉兵衛方にしげらく有りしを、藤堂式部がもとに年月を送る。式部死して藤堂出雲に預けらる。寛永十五年六月江戸より仰せ出ださる旨ありて、數馬・又右衛門も藤堂家に下し賜はりけり。かくて、江戸の彦坂平六郎數馬が一族たりしがゆる、藤堂家に申し乞ひて松平勝五郎光仲のものともらひ賜はりたり。因幡に赴くにより同年八月七日上野を去る。藤堂玄蕃月五張組の騎士二十人、玄蕃が騎士五人、藤堂出雲外に母衣の者組の騎士四十人、彦坂嘉兵衛鐵砲頭三人、鐵砲九十挺、弓頭二人、月四十張、田中源兵衛歩行の士二十人引き續いて、伏見因幡の屋敷に送られしかば請取のため、因幡の士横川治大夫父子鐵砲二十挺、渡邊越中鐵砲二十挺、伊吹源太兵衛父子鐵砲二十挺、宮崎平太左衛門弓十張、伊賀の者五人、片上彌三兵衛父子鐵砲二十挺、松尾惣左衛門父子伊賀の者六人、

福田權兵衛歩行の士二十人、宮脇徳兵衛田中六郎右衛門、其の外月の者二十人出で逃ひて因州に赴く。伏見より川船にて下り、海上の船は備前芳烈公のもとより出だし給ひ、松平輝澄の方より船を出だし、大小三十艘播州坂越より陸路を經、地主より馳走の士出で迎へて草深き所をからせ、道筋山々道見を出だし、夜は霧をたかせ、鳥取の城まで三とまりにて引きとらせられけり。仇討ちける時數馬二十七、又右衛門三十、河合武右衛門四十、岩本孫右衛門三十八歳とぞ。

四九一 多賀孫左衛門同じく忠大夫仇讐の事

京極若狹守忠高雲州松江に有し時、其の士に箕浦備後・内藤兵庫・多賀孫左衛門といへる者あり。備後が末子與四郎といひしは容貌美麗にて、兵庫が子入左衛門と情交淺からず。孫左衛門が子孫兵衛斯ともしらで與四郎に心をかけたりしに、曾て無二にいひかはしたる者ありと答ふ。それまでにてはうはのそらなり、名を聞きてやみなんと重ねていひしかば、名を聞かばもし其の人に書やせんと、密に入左衛門に告げて、孫兵衛備後の宅に時時來ること幸なれとて、或夜與四郎が部屋に呼入れ懸にもてなし、醉の後入左衛門出逃ひて孫兵衛をさし殺しとせめを刺し足のうちを刺きて屍を城下

の鹽津川にすてたり。夜中しる人なし。鹽津川の下に屍の流れ寄りたるを見て離れがしわざともしられざれども、自然に箕浦・内藤に指さす人も有りたれば、孫左衛門聞きて證據なしと雖も、かゝる類は天命にて虚説なき物なり。會議を遂げられよ、沙汰に及ばずば備後・兵庫を相手なりと設に及ぶ、忠高目付を以て密に聞けば果して實なり。多賀が詮理なれば棄て置き難けれども、内藤・箕浦兩人忠ある舊臣なるゆゑ立退けとひそかに知らせて、箕浦父子・内藤入左衛門雲州を出奔しけり。孫兵衛に兩人の弟あり、此の時十三歳に十一歳なり、兄は後父の名をもて孫左衛門といひ弟は忠大夫といへり。忠高卒去刑部少輔忠知に六萬石賜はり、播州立野へ所替あり。多賀其の比京極の家を出でて兄の仇を討んとしたれども、幼かりし時の事故内藤を見知らず。父孫左衛門が介抱し置きたる浪人間市大夫恩を報ぜん事此時なりとて附従ふ。孫兵衛が妹の子三田右衛門入も相加はれり。備後は土井大炊頭に奉行しけるが年老いで死す。奥四郎は二十にて病死す。入左衛門は小笠原信濃守忠修に奉行し餘五百石與へられ、仇ある故に他所へ遣されず、勤勞もなく只あらん事快からず、人並の奉公を許されずば永く暇を給れといふによりて、江戸の供の列に入られたり。若し仇に討たればとて、小笠原家高天神にて走廻りよかりし者の子、其外徒の者六人内藤に自然の事あらば助けよとて附け置かれぬ。或時内藤、土井

大炊頭のもとへ使者にゆく。多賀聞きて歸るさに途中に出迎へたり。入左衛門人数多く引きつれ馬上にて来るを、問われこそ内藤よとなしふ。若し打ち損じたらんに、馬上にて馳せぬけんも計りがたしとて、孫左衛門・市大夫前より、忠大夫、右衛門入後より隔り其間近くなりて、孫左衛門編笠を脱ぎ覺えはなきか入左衛門と詞をかけ、頭を額へかけて切る。忠大夫二尺七寸の刀をもて飛びかかり切る。きられてそり様にふみ出したる鏡、忠大夫が拳に當りて指の骨白く出でたりとなん。さて内藤落つる處を孫左衛門たみかけて切り、忠大夫馬の下をくぐりて切りとめたり。孫左衛門始向ふより太刀付けしかば、内藤が從者幾刀となく切りけれども、さのみ深手なられば散散に切り合ひたるを、内藤が從者薙刀をもて右の肩より腕かけて切りしかば、左の手に刀を取り直したる處を薙刀にて袖口を左右へまじ貫く。孫左衛門が刀間近くなりしかば薙刀を捨てたり。薙刀はかせになりぬ數ヶ所の疵は續りつ途に倒れて立上らず。忠大夫・右衛門入、市大夫、内藤が從者あまた切り伏せ追拂ひ、忠大夫かけ寄りて孫左衛門が頭を抱き如何と問ひければ、思ふ仇討らおほせぬれば思ひおく事なしとて息絶えたり。内藤を始として其場に七人一二町逃げて倒れ死せる者二人、多賀兄弟・三田・間、四人が手に掛けて都べて九人を切り殺しけり。忠大夫疵三ヶ所三田・間も手負ぬれども三人とも死なず。孫左衛門が面

に編笠をかけ息つき居たるに、あたりの人出合ひ奉行所へ連れて行き御法の帳面に記して討たざる趣を尋ねらる。忠大夫もとより承り及びたる事ながら、萬一それゆゑに事もれて討らざらんと計りがたし、本望とげなば何の身命のなしかるべき、御法に背きたりとして刑罰にあふとも附届けに及ぶべからざると、必死に兄弟とも思ひ極めて候ふと少しも屈せず申し述ぶる。又三田は近き親しみなり間が助太刀はいかかと問はる。間承り浪人なりした、多賀が恩を以て年月を送りぬ、孫兵衛殺されし時兩人の弟幼少にて仇を見知らず候ふ故、手引きして討たせ候。多賀が多年の恩を報い候へばいかに御咎を蒙り候ふとも御いとひ申さぬ志にて候と申述ぶる。何れも申す處尤至極なりとて歸されけり。孫左衛門卅三歳、忠大夫卅二歳、右衛門八十八歳、忠大夫（年輪）孫兵衛死後廿一年の後、寛永十八年辛巳江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるは是れなり。其の比土井大炊頭の邸に近きを以て一橋を大炊頭橋といひけるとなり。多賀忠大夫後に離栖と號す。右衛門八後茂左衛門といひ老年の後茂入と稱し、正徳三年九十歳餘にて讃州丸龜に病死す。此始終は忠大夫が物語したるを書き記したるを傳へてここに記せり。

四九一 大久保家の婢女主の仇を撃ちし事

大久保長門守（一本松平用防守に作る）教寛の内所に奉公せし女中老ある時、心付過ちし事有りしを、女の年寄大に怒り罵りて打擲に及びぬ。中老親にもたしかれし事はなきものなと獨言して部屋に歸り、文書きて下女にもたせ親のもとにやりぬ。二人の女房一人は残りなんといふな、大事のこといひやる文なりとておして二人をも出だじぬ。道にてあやしき事、常に二人一度に出だされし事覺えず。顔色も具なからざりしとて文を抜き見るに、しかじかの仔細にて自害するなりと書きのせたり。さてこそ有るべけれど、一人のはじたものにはとくゆかれよ、我れは歸りておしとむべしとて、急ぎ歸りて見るに、はや自害して有りしかば夜の物打ちかけ小脇差の血を拭ひ、我が懐にさして、さあならぬ體にて年寄の部屋に行きたり。申したき事候ふ、只今部屋に來られよといひしに、程なく行くべしといひければ、歸りてはまた行き數度に及びしかば、年寄來りて夜の物をあぐれば、あけに染みて中老は死しであり、其の時女房これ今日に今日に自害に及びたるなり。主の仇といひもあはず、小脇差を抜いて刺し殺しけり。

始終を詳にいひ述べて、主の仇を討ち留めつ、思ひおく事もなく候ふとてさわぐ色もなし。

長門守女中を残らず並べて、彼の申老の下女の事いかが思ふにやと尋ねらるしに、愚戦といひ氣なげなる事といひ驚きたるよし口をそろへていひければ、さらばいかがせん、各存する旨を申し候へとなりしかば、存じよりたる事の候ふべきと申す。さらば此の度の次第ほむるに詞なしといふべきなり。年寄の死して事もかけぬれば、則ち年寄に取りたて然るべからんとて、よび出だして賞せられけりとぞ。

四九三 林田左文劔術妙手の事 井馬爪源五右衛門先見の事

松平筑前守忠之の土に林田左文といへるは、月田流劔術の妙を得たり。足輕の卒二十人預かり居たりしに、或時足輕六人人を殺して出奔す。左文は折節馬に乗りて有りしが告げ来るを聞き則ち馬にて追つ付きたり。足輕これを見て立ち向ひ追つつかれたりとは、他國に参りて申すまじ。これよりかへられ候うて然るべからんといふ。六人敵對せばたやすく切り勝つべし。今日まで頭たる者なれば切るまじとの心なるべし。林田靜に馬より下り、六人同じく人を殺したれども、必ず其罪の中輕重あるべし。さらば残らず罪にすべしとも思はれず。我れに來るは其の是非を糺し明かにせんとなりとて

歩みよる處を、一人たばかりれじというて刀を抽いてかゝる。林田刀の柄に手をもかけず足をも動かさず、卒爾なりおやまちすなといひて間近なる時、無分別者かたといひいひ、刀を抽くや否や手の下に斬り倒し、皆静まりて能くきけ、敵せし故斬りたるぞ。敵せずは何とて切らんといふを、又一人斬つてかゝれば思なる者ども、死狂ひなするがとてわざとあとしさりにしざる。踏み込む處を飛びちがへ、二大刀に斬り伏せたり。皆氣をゆるめ一度に斬りかゝらせじが爲に、かくして二人斬り倒しつ。残る三人ばかりは、盾かほと思ひて、又一人斬り伏せ、一人は手負ひて、一人は蹴倒し、手負はせたる者と蹴倒したる者とは、その帯を以つて縛り、馬に打ち乗せ先はたて、歸りたり。是れは、この者なれば、筑前一國の士多く林田が劔術の門人なり。馬爪源五右衛門は鐵砲百發百中の妙を究めたる者に、武藝を好みしが、林田が劔術を學ばず、其の故を問へども打ち笑ひて答へず。林田後答ありて死罪に行はれけり。馬爪親じき友に林田は森邪なり。何事を仕出ださんと計りがたしと思ひたりき。劔術を學ばん事は我れも好み望む處なりといへ共、已に師弟となりて、後難に臨んで坐ながら見ては有るべからず。其の森邪にくみせば士の道にそむくべし。かゝるより交を結ばざるにしかじと思ひたりしが、愚者も千慮の一得なりとぞ語りける。

卷の二十五

四九四 石井兄弟報讐の事

青山因幡守宗俊の士に石井宇右衛門政春といふ者あり。因幡守大阪御城代の時宇右衛門も従へり。赤堀遊問といふ醫ありて、其の従子源五右衛門を養子にしたるが、石井にゆかり有りて頼みたりしかば、心得たりとて天満のかたはらなる寺に置きて、常に宇右衛門がもとに來り、親しくしたりしに、年経て赤堀鎗を弟子に教へて、かなたにたせしに、源五右衛門が鎗いまだ精練ならず、人に教へんを覺束なしと石井にいひけるを赤堀鎗用ひざるのみならず、石井に立ちあはれといふ。石井汝がためにこそいへ、老いたる身の立ちあはれも無益といへども、赤堀怒りて止まらざれば、いざとて立ち合ひけるに、手もなく石井勝ちたりしかば、赤堀口をしき事に思ひ、延寶元年十一月十八日の夜、宇右衛門が出でたる隙に忍びて來りかくれ居て、かけた鎗を盗み出だし、宇右衛門が歸るを待ちて、戸の内に入らんとせしを突き通す。刀を抽いて鎗をたぐりければ、十文字の横手にかかり深手にて倒れて死す。従者何者ぞといふに、一太刀斬つて源五右衛門は逃げ去りけり。石井が嫡子三之丞は曾

にて有り合はず。次男彦七郎は臥し居たるが、出でんとすれども、部屋の戸を源五右衛門かけ置きたれば、踏み破り出でければ源五右衛門行方しらすなりぬ。三之丞暇を申して、彦七と共に青山の家を出で、源五右衛門が行方を尋ねれば、更に何方にありとも見えざりしかば、源五右衛門が父遊問も同意にてやあらん。此の者を討たば源五右衛門隠れ居らじとて、同年の冬江州大津にて遊問を切り殺し、それより京五條の橋、伏見の京橋、大津の町に札を建て重恩人を殺し、逃げ走りたるは士の法に非る故に、大津にて父遊問を殺せり。汝が爲にも仇なれば、逃げめくらん事を止めよ首を刎めし。赤堀源五右衛門とて、石井兄弟が姓名をしるしけり。されども源五右衛門出であれば、所々尋ねめぐれども、見出ださず。美濃室原村の大洞瀨兵衛が妻は三之丞彦七がなになり。是れを便にして爰に有りしに、彦七は犬飼が一族に睦しからず。遂に我れ一人仇をうたんとて室原村を出でにけり。延寶八年の冬瀨兵衛が妻死して、其の翌年正月三之丞從者孫助を安藝へ使にやりて、唯一人犬飼が家に有りて湯あみしける處に源五右衛門忍び來り、其の月の側に隠れ居て、一刀に三之丞に深手を負はせけり。頃は天和元年正月廿八日の夜の事にて、くらさはくらし、二の太刀に三之丞が刀持たる右の腕を打ち落す。三之丞伏しながら脇差を抜いて、左の手にて赤堀が股を突きそこにて死しけり。

座敷に犬飼が甥の茂七といふ者來り居たるに、赤堀飛びかゝりて一太刀斬つたり。犬飼聞き付けて十文字の鎧をとり、赤堀に突いてかゝる。赤堀わきなる堀に寄り添ひて刀をさげ、後の堀を破らんとするを、犬飼見て鎧をとり直し、後に廻らんとして透間に飛び出でて、犬飼が肩間を切る。犬飼年老いたれば、重手にて倒れしかば、赤堀を討ちもらせり。一族相集まり松明を燈し追ひかくれども行方を知らず。犬飼は赤堀が大坂にて宇右衛門に鬨打にしける時、十文字の鎧にて突き殺ししかば、其の鎧にて突き殺さんと思ひけれども、所狭くてもものにさへられ、討ちもらせりと悔みけるとぞ。従者孫助その明くる日歸りて此れを聞き、驚がみして自害せんといひしを、さまざまにいひなだめけり。彦七も此の由を聞き、彌怒りもたえしが、伊豫の親類の方に行くとて、海上にて風にあひ溺死しけり。赤堀はそれより尾張に行き、伊勢の龜山板倉隠岐守の土青木安右衛門は親類なれば、忍びて行きたりしに、頼て板倉に告げて祿百五十石與へて、赤堀をねらふ者あるべしと其の用心甚だ嚴なり。他國より來る者は一夜の宿をも禁制し、見しらざる者なれば城門の内に入れず。赤堀名を改めて水之助と稱す。宇右衛門が三男源藏友時・四男半藏吉政とて、兩人皆幼少にて、安藝の松平安藤守の土田中左近衛門・石井九大夫迎へとり、丹羽三大夫が許にて養育す。三大夫が妻は石井家より嫁せし故なり。我れ

男の身ならば、赤堀をさがし出だし首を刎れ、此の體胸をばらすべきに、女の身年老いて志を遂げざる事いふべき詞なし。二人慈なく人となりて、とく父の仇を討ちて黄泉の恨を散せよと日夜にかたり聞かせしかば、二人遊び戯るゝに心なく、ひたすらに仇を討つべき志一筋なり。従者孫助は石井家の恩を附けし身なれば、赤堀龜山にありと聞き、さまざまに身をやつし、魚を賣り或は鏡とぎとなりて、龜山に行きけれども宿とるべきやうなく、城内に入りがたければ、時々隙際に佇みける人あやしみ、赤堀が用心彌嚴なり、天和三年源藏龜山の有様を傳へ聞き、我れ既に十五に及べり、龜山に行きて父の仇を報ゆべし。いたづらに遠方に有りて、月日を過さん事の口をしきとて、一族さまざまにおし止むれども聞き入れず。忍びて廣島を出づる時思ふやう、龜山の士いか許りがあらん、殿の仰にて赤堀に心を合はすべし。天運つよく父の仇を討ちたりとも、いかでかのがれ得ん。萬死の中に一生もなき身なれば、幼少より育はれし伯母は母の思ふも深し。人に知らせずして最後の盃をせばやとて、物語の序に、近比身も壯になり酒も嗜みて候へども、思ひ立つ志のある身は少しのみ候ふ事もなし。けふ幸は外より來れる酒少しはまばらんやといへば盃をいただきます。おしいたゞきて覺えず涙の落ちけるを、おさふる袂にかくして、遺書をば婢女に授け置き、舟に乗りて備前岡山に至り、田上

某がもとにしほし居て、天和三年大阪に赴く。牛蔵は十歳なりしかば廣島に有りけり。かくて源蔵
 それより旅人の體をして龜山に行き、又京に歸りて或は關坂の下に赴きて、二年が間龜山に入るべき
 謀をたくらみけれども、中々思ひの斷らざりしかば、江戸に赴き、隱岐守屋敷の下部に奉公せんと
 すれども、此の屋敷の法殿にて力及ばず、又龜山に行き、又常州・上總・下總までも其の便を求め
 奔走す。其の艱難誠にいふに詞もなかるべしと。かくして廣島を出でて七年過しぬ。始は甚だ行路に
 行きなやみけるが、天の譴にや有りけん、程を経て後は寒暑をも能く堪へ、雨露にたち濡れ風氣に胃
 れども藥をも服せず、其の身愈々健なり。或は野山に打ち伏し、或は飢渴に及べども、志したる一
 事は膽を大にしてちつともひるます。牛蔵は今しばし成長してと、一族おし止むるをも顧みず、元祿
 元年廣島を出でて兄と一所になり、龜山に入らん謀をなす。かくて板倉隱岐守卒去有りければ、江
 戸の屋敷より取りいらん手立せんとて、牛蔵江戸に赴き、日備となりて屋敷に時々行きければ、其の
 側を得ず。
 「従者孫助は年老い病重かりしかば、藤州にゆけといへども、何の面目在りてか仇を討ち得ずして廣
 島に歸るべきといふ。源蔵汝辛苦に病み付きたり。いまだ敵討つべき時の至らぬにや、斯くも
 以て心を盡せ共、其の甲斐なきこそ口をしけれ。されども親族たちの見つぎ給はるも、一日の飯料
 米一升ぞかし。價にすれば僅に一日四分にや與るべき。日々はせ廻り口に食し、肌をおぼはんと
 するに足らざるはいふにや及ぶ。草履の價も其の中よりこそ出させ。又手よりを求むるにも費な
 きにあらず。かゝる艱難のありさまも、こまやかに安藤の一族にかり聞かせよとがきとぞ語
 りければ廣島に行きぬ。下部の身として、年久しく命を懸けより輕くして、つきたひたる志を
 いたはりけるが、終に病重くて元祿十年廣島にて死しけるとぞいふ。

源蔵江戸に赴きて、牛蔵が手だてに心を合はせ、又上方に歸り兄弟往還誠に難者如し。或時は僅
 の商人となり、又或は近江の茶う湯と云り、或は伊賀の山家の者といはれり、聞づかひ身のぶるまひ
 それぞれに似習はんとし、あがけたりけり。かくて元祿九年牛蔵板倉の士平井才右衛門がもとに下部
 となりて奉公する便を得て、龜山に平井歸りしかば、牛蔵も併して龜山に入る事を得たり。源蔵は上
 方に赴き、伊勢に行き通ひて人目を忍び、牛蔵に逢ひて仇の有様を傳へ聞き、平井病みて死す。平井
 と赤堀と親しみあれば、其の用ひに来る道にて討たんとばかりしに、いかにや有りけん、赤堀來らて
 其の手だても空しくなりぬ。其の明の春牛蔵に暇をやりしかば、又龜山の辻四郎兵衛がもとに奉公す。

江月におもむく。牛蔵江戸に供せんは志にあらずといふことも、龜山に居んには所の人請人に頼むべ
 き人なければ、辻が供して又江戸に行く。源蔵目を病みて久しく療養に日か過じしうら、牛蔵江戸
 り又龜山に歸り、忍び出逃ひて仇をうかへんと便を得ず。牛蔵又江戸に赴きしかば、源蔵も又江
 月に行きて町奉行川日攝津守のもとに参りて、仇うつゝ願の書を出たす。是れ元祿十二年十一月
 十六日なり。牛蔵は何とて來らざるかと問はるゝに、弟は所々病し候ふ所を立ちめぐり候ふ中に煩ひ
 出だし候ふ旨を申す。仇討たんと志し候ふは無久しく成りぬ。いかにも今までは申し出でざるかと問は
 るゝに、源蔵聞いて兄弟とも幼少にて敵の有家を存せず。近頃承り出したる事の候うて申し出でたる
 にて候ふ。又承り出ださざる前に申し出でんには、外へ渡り聞て仇の願、かくれ候ひなん事を恐れ
 ての事に候ふといふは尤もなりとて頼に記しぬ。さて攝津守聞き届けられぬ。江戸御城の下屬のもと
 にも、見付けたらば討ちとめよと許されしかば、尋由に禮して、又松前伊豆守の許に至りては
 れば、攝津守よりいひ送られし故、頼に記してとて首尾よく仇討たれ候へと色代す。其れより源蔵は
 龜山に歸り、奉公せんと便りを求めけれども、たとへ金銀を借しませず賄賂すとも、他國より來る人の
 奉公すべき請にたつべき人は思ひもよらず。況んや一金の貯なければ源蔵もいかんとすべさやうな

し。元祿十三年源蔵又江戸に趣きける處に、周防守のもとに夏目八兵衛といふ者あり。もと上總の人
 なり下部を召し置かんとせしかば、牛蔵よりありて夏目に告げて、駿河の者にて候ふが、伊勢の大
 神宮に参りたき志あり。給金は給はらても奉公せんとせばかりければ、夏目さらばとて源蔵を下部に
 したりけり。牛蔵此の時下村一學といふ者に奉公し、兄弟共に龜山に赴く。是れより兄弟日夜にか
 れ思ひて、心を合はせ仇を伺ひけるが、其の後の石黒仁右衛門が下部に返つて實儀なる者あり。源蔵
 が心まめやかなるを見て、甚だ心安かりしかば、請人を頼みて事よくなりぬ。かくて鈴木榮右衛門と
 いふ者に奉公しければ、夏目此の人は勝れたる者なりと詞をそへたり。牛蔵も下村に仕つけらなみな
 みなられば、主人いたはる事大方ならず。其の父に疎憎されしかば、牛蔵を若黨にして刃に衣服を備
 へて興へたり。兄弟今は龜山にありて時を待つ處に、赤堀が當番の歸路を討つべしと定めて、元祿十
 四年五月にも成りぬ。八日は赤堀が番なれば、午の刻に代はり工歸る處を討たんとせしに、とく歸り
 て志を空しくす。さらば其の明くる朝の歸路をとて各々用意したり。源蔵は殊に下部のすべき事多く
 更に暇なし。背に少の間暇を乞ひ得て町に出で、それより龜山の八幡宮は道の邊りなれば、立ち寄り
 て心しづかに着込を着、神前に向ひ、今日は必ず父の仇うたせ給へと伏し拜み、言を出づれば夜は明

けたりしかば二の丸に行き、空眠のみして半蔵を待ち居たり。半蔵は出でんとしたる時主人の用ありておそく成りたる處に、友達の來りければ、着込着る間もなく、主人より貰ひたる刀はかけ置きかくし置きたる刀をとり飛び出でて二の丸に行けば、兄は半蔵を遅しと待ち居たるに來りければ、こゝろの内に勇みけり。かくて赤堀其の日は唯一人廣間より出で歸りしかば、兄弟打ちつれて二の丸の外なる石阪門を打ち過ぎける時、赤堀が後よりかけぬけて前にたちふさがり、石井宇右衛門が子源藏・半藏なりと詞をかけ、源藏抜きうち赤堀が眉間を切る。赤堀我が刀の柄にて請けとめたれども、二の太刀すかさず切り付けたる處に、半藏かけ來り、赤堀が頭にふかふかと切り付け、たふるゝ所をたみかけて切りたりしかば、立ちもあがらず死したりけり。源藏乗りかゝり刺し貫きてとどめなまし。從者をば追ひはらひつ。兄弟は初め赤堀が父を打ちたりしより、仇を報ゆる次第しるし置きたるを、常に各一通帯の中へ入れたりしを、取り出だし、赤堀が袴にはさみけり。所は長臣板倉空右衛門が宅のあたりなり。我れも我れもと馳せ集まるべし。年頃日頃思ひ暮し、赤堀をば討ちとめたり。今は世に心にかゝる事なし。刀の目釘のつゝかんほご切りあひて屍の山をなし、年久しく赤堀を醫固せられし根をばらさんと、兄弟いひかはし、追ひくる人を待てども更に來る人なし。半藏其の時爰にて切

死せんより、城外に出でて追手をまち死狂せん。さらば京都にも聞え旅人の往來に聞えて、安藤の一族たちにも兄弟本意を透げし事を知るべきなれば、城門をたばかりて遅れんといふより早く、半藏先にたちかけ出づるを、源藏うしろより詞をかけ、汝が用の事急ぐと主人のいはれしぞ、とくいそがれよといひひ打ち連れて城門を出づれば、番人も聞き咎めず、黒門のがれ出で、京口に至り、龜山の西のその茶屋に至りければ、追ひ來る人もなければ、さては遅れ得ん事も難からじ。されど馬に乗りて追ひ來らんに、兄弟走りて息切れたらんに、思ふほど切り合はれじと靜に關川をわたり、山に登りて見わたせども追ひ來る人なければ、龜山の西南一里半ばかり行きて小屋に立ちより、草鞋を買ひもとめ津の城にゆく者なりとて道を問ひ、わらはを案内者にして十町餘りも過ぎて、椋本の松原見えしかば童をかへし、又道を引きたがへて北なる野にかゝりて食物をしたためて、ゆくゆく小川を渡りしかば、口嗽きて大神宮に向ひて幼少より思ひ入りたる仇を打ちたる事の悉さよ。廣島を出てしよりながらふべしとはゆめゆめ存じもよらざるに、爰までのがれ出でたるは神の護と伏し拜み、伊賀の上野に出で、それより山城の鈴置の道を問ひ、伏見に赴き、京に至り、諸國の一族のもとに、龜山にて仇討ちたるよし書きしるしいひおくり、岐會路より江戸に赴き、五月廿六日町奉行保田越前寺

の許に行きて仇討ちたる由を申せば、尋ね問はるゝ事ども有りて、越前守自ら出でて兄弟に始終詳に聞き、いたげらるゝ事大かたならず。饗膳給はりてそれより松前伊豆守のもとに至りしに、過ぎにし年途ひたりし人々出でて悦びあへり。青山の薬州の屋敷に行きて、石井清大夫がもとにあり。青山下野守の嫡子筑後守此の由を聞き、即ち使を以て兄弟を引きとられけり。其の後下野守の領地、其の比濱松なりしかば遠州に至り、兄弟ともに籠せられ、源藏後重き職を命ぜられけり。

四九五 尼崎幸右衛門が女親の仇を報ちし事

讃州丸龜京極備中守高豊の弓足輕尼崎幸右衛門といへる者あり。同じ弓足輕岩淵傳内といへる者、幸右衛門が妻に心をかけ、幸右衛門があらざる時、さまざまにいひたりしに、中々受けひく景色もなく恥かしめけるが、又或夜來りしに肯はずして有りし處に、幸右衛門外より歸りてこのよしを見、傳内無禮者と怒りしかば、叶はじと思ひ刀をぬきて幸右衛門を一刀切つて逃ぐる。女房は小女をいだき居しが、そこに棄てたる夫の脇差をぬいて、傳内が逃ぐるを追つかげしかども逃げのびしかば、脇差を投げつけたりしに、傳内が右の肩に少し疵付きぬ。冬の末夜にて雪はふりぬ。終に行方を知らず。

女房立ち歸り見れば、幸右衛門深手にて死したりしかば、なげき悲しむ事大かたならず。傳内は重罪の者として、尋ねられしかども行くへを知らず。幸右衛門妻は妹の夫なる關根元右衛門といふ者のかたに月日をおくれり。只朝夕に夫の最期の有様口をししく思ひつゝ歎きのあまりに病づき、翌年二月に死しけり。三歳になりける女はなほの養育にて、十三歳になりて名をりやといふ。元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに、或時こまやかに父母の事ども語り聞かせ、汝が母は我が爲に姉なるが、せめて此の子が男なりせば仇を討つべき事もあるべきに、口をしやと明けくれなげきて、空しくなりぬと語りけるに、りや大に驚き、今まで夢にもしらざる事どもなり。御いたはりよりかやうに人となりぬる事の忝きよしいひて、さめさめとなくより外の事なし。さて十六歳になりける時、兩人に向ひ江戸に参りて幸公仕らん。父母のために諸國の觀音にも参詣せばやと存するなり。萬に一つも仇うつべきあはれみなげ神佛に祈らばやといふ。兩人いろいろ止むれども中々止まるべきにあらざれば、京極家の侍村瀬藤馬といへるが、江戸に赴くにたのみてさしそへ遣はす。りやは江戸に赴き、番町の永井源介といへる御旗本のもとに奉行に出づる。源介は劍術の弟子あまた日毎に来る。りやが勤むる有様殊の外心をつけて奉行するに誠に珍しく思ひ、いかなる者の子にやと尋ねらるゝに、りや詳に事の

子細を語り、父の仇を報い申さん志に候ふよし涙を流し答へければ、源介つくづく聞きて、女なりともなごか父の仇を討たざるべき。まづ我が劍術の弟子となれとて教へ試むるに、才氣有りて思ひ入りたる志なれば、劍術もほごなく進みけり。夫婦綱、いたはり愛せり。二年に及びて主人いへるは、爰にのみ居たらんより、主人をあまた取り換へて仇を尋ねよかしと、さまざまにいひ附けたりしかば、それよりこゝかし奉公せしに、既に十二年を過ぎて主人七十人に及べり。其の後本城なる阪部安兵衛といひし御旗本の家に奉行せしに、小泉文内とて五十餘なる男の有りけるが、平生酒のみにて、壯年の事共何くれと語り出だし大言せしが、若氣にて人の女房に心をかけたりし事により、其の夫を切つて棄てたりしが、昨日のやうに思へども、早く月日も過ぎ行きけるよと物語せしを、りや聞いていか様にも似たる事もあるよと思ひ、たしかに聞き届けん物をと心の中に思ひて、それは嘘なるべしといへば、いかでか偽をいふべき、今まで人にいひつる事はなけれども、年月は過ぎつ、隔は隔りぬ。委しき事いさ語るべし。我れは元額州光龜にて京極家の者なりとて、有りつる次第をいひて、幸右衛門に子有りつるが女なりと覺えたれば、おそろふ事もなしとて肌をぬけば、やがて母の投げつけたりしと聞きし脇差の痕も見えつ。りやは只今爰にて討ちなんと立ちあがらんとせしが、もし討ちそこ

なひたらばいかいすべきと思ひ返して、何となく其の坐を立ち、其の明の目永井のもとにゆきてかくかくと語りければ、源介大に悦びて則ちりやを打ち連れて、京極家の村瀬が方に行き告げしらせたりければ、則ち備中守に申して、公に駈へたり。阪部のもとに公より糺さるるに、彌粉るゝ事なかりければ、文内を京極家にわたし給はりぬ。まづ文内をば獸に入れ置き、鳥越の下座敷に虎落をゆひ、日を定め文内を獸より出だして勝負の場に出だされたり。村瀬りやを連れ來りぬ。肌には鐵の着込を着、白ちりめんの鉢巻して、一尺あまりの小脇指に二尺三寸の刀さし、戌落の向に入。村瀬りやに用意せよといふ。其の時りやいかに文内、汝が手に懸けたりし尼崎幸右衛門が多かり、更出合ひたる事天道の冥加なりと詞をかくれば、文内おのれに語りおとされて、ふるき事をあかしたるは無念なれども、此の刀にて父も子も手にかけんとして、三尺ばかりの刀を抽いて切り合ひけるが、横に拂ふ刀にあばらな切られ、二の太刀面にあたりひるむ處を、りやふみ込んで乳の下まで切りさげ、おしふせて静に首を切り、二十餘年の間志したる仇只今討つて、父母に手向候ふと檢使にいひたりしに、感ぜざる者なし。備中守も悦びて、俸米かるき身の娘なれども、孝行氣なげさばかりの士にもいかでか劣らんとて、息女に付けられけるとぞ。

「此の物語讃州にゆく人ありて問ひ聞きしに更に塵ならず。尼崎が居たりし所は、丸龜の風袋町といひし處とぞ」

四九六 伊丹康勝格言の事

伊丹播磨守勝康は寛永年中御勘定頭三人を置かれし時、其の第一に選ばれ、農か勤め商を通じ、民と俱に利を同じくしけるはまれ高し。其の比商人の運上金を公儀にさしげ奉り、甲斐國より出づるはな昏を一人してあきなふ者ありけり。然るに又富める商人ありて内々告げて、今までの人の奉る處の金に一千兩まして運上を奉るべし。某一人に紙商ふ事をゆるし玉ふべきよしを申す。此の事尤も然るべしと議定ありしに、播磨守一人其の心を得ずして聞き入れず。執政の大臣たちにも此の由を告げて乞ふ事止まず。三年の後執政の人々播磨守にしかむかの事請ふ者あり。同職の人許すべしといへども、獨用おられずときくは誠にや。天下の富を以て見る時は、千兩の金は少きなりといへども、是れを以て國用を足すに養なしといふべからず。いかにとありしに播磨守承り、今より盜賊のおこらぬ道だに候ひなんには、いかにもゆるし申すべしと答ふ。人々いかなる仔細ぞと問はるゝに、播磨守日本の

るるこしよりまさりたる物は紙にて候ふ。申にもはな紙と申すものは、貴賤一同に、一日もなくて叶はぬ物にて候ふ。其の價の賤しければこそ、世のたすけとはなり候へ。望み請ふ者、今まで人の奉りしより千兩の金をましなん事、此の千兩はいづより出だすべき。此の紙を商ふに價を増してあきなふを、又そを買ひてあきなふ人いづらも候はんは、これらも同じく利を得て商はんとせんには、こゝに加はりかしこに増して、後には價甚だ貴くなりなん。凡そ一帖の紙價一二錢をましたらんには、富める人の憂とするにも足らず。貧賤の人一日に得る所の利誠にすくなし。僅に一二錢を重ねて妻子をも養ふ。かくあさましき者とても、今日までばはな紙やうの物を常に用ひ來れり。價忽ちにもたればとて、更に何物を以てか此れに換ふべき。然らば是れらも又おのれおのれがあきなふ物にてもあきなひ、其の價をまして其の得る處の利を以てばな紙を買ふより外の事候はじ。凡そ一物の價増す時は、萬物の價同じく貴くなる事皆定まれる事なり。價貴くなるに至つて求めんとしても得ざれば、或は飢ゑ或は寒ゆるにも及ぶべし。飢寒せまれば必ず死す。死すれども守る處を失ひ候はぬは、士より上つたの事にこそ候へ。下さまの人は飢ゑて死し寒えて死す。盜しても死す。死は一定なり、同じく死する命いかにもして、一日も世にあらまほしく思ふは、賤しきがならひなり。さてこそ盜賊の起

る事にてこそ候へ。これは只農と商との事の様に候へども、士の召し仕ふ奴婢等も、物の價貴くして求め得れば盗む事同じ。かく盗の世に盛に成りなん時に至つては、いかなる政事をもてこれをとりめ賜はんや。これらの盜は發より起る事にて候ふ。それよりも又民にゆるして利を争はしめ、其の利上に歸するやうにし給はんには、天下其の風に靡き従ひて、よき人々共に利を争ひ、各々其の欲する所を得んと思はん。これらは盜せぬ盗人にて、其の禍盜するより増りてこそ候へ。天下をたもたせ給へば天下の費ことごとく御寶なり。且つ上の費をだに省かせ候ひなんには、一年の中につむ所の御寶幾千萬兩の事にてか候ふべき。それに儲千兩の金をまさんとして盜賊起り、世の風みだらに成り候はん事、身の肉を切つて飢を救ふに、腹に満つる時身終ふるといへるに同じかるべし。大略物の價の貴くなりゆく事は、國郡に運上の多きが致す處なり。某既に年老いぬ頼て死し申すべし。相構へてこの後、かゝる事申す者ありとも、人々よくこころへ給へといひければ、人々感じあへりけるとなり。

四九七 佐藤直方直言の事

佐藤五郎左衛門直方は學問にて世に聞えけり。酒井忠清密客のもてなしに禮せられて終りけり。井

伊掃部頭のもとにまれかれて、いまだ掃部頭の前に出でざる中、長臣と物言せし時直方が云はく、大事は論なく候ふ、聊のわざも傳授ならひと申す事の候うて、師に就きて學び稽古し、思慮をも盡して後こそ得るものなるに、日本の人々は、大事のことに學ぶといふことなく、傳授稽古といふこともなく、自己の料簡にて事を済ましぬることあり。各々たちは存じ候ふにやと問ふ。皆々いかゞと問ひければ、されば國家の政にて候ふ。萬民の命にかゝり、一言にても國の安危に候ふ至極の大事ゆゑ、聖人の教へおかれたる萬世の鏡ありといへども、今の大名君臣ともこれに心づかず、只自己の思慮にて思ふまゝに政をなすは、危き事の至極なりと語りけり。直方が論ことに格旨といふべし。予筆をこゝにとむるは意なきにあらず。後の此の書を讀む人これを察せられよとなり。

常山紀談跋

湯常山先生、錄勝國以來事蹟、爲紀談若干卷、蓋先生之意謂、文武之道一已、出將入相、古之君子皆爾、岐而二之者、後世之爲也、夾谷之會、仲尼齊乘夷之勝於立談之間、魯郊之戰、再求折齊人之衝於用矛之末、其它焉湯文武之賢、周禮大司馬之所職、可徵也、夫一治一亂、天之數也、不遇文武二者、非全材也、白面書生不知軍旅、拱手讓諸武人、俗士寔可憫也、兵家者流生長太平之世、目不見兵革、耳不聞金鼓朔々然、徒欲以空言取信於一世、亦可憫也、故當今欲講軍旅以備不虞者、無若然知戰國事情、然知戰國事情、而後甲兵可試也、軍旅可明也、先生之有紀談、蓋爲之也、先生學綜古今、抱文武之大略、在治則學陶伊傅、在亂則管樂張葛、何所不可爲乎哉、雖然時命難違、屢起屢頽、終不能用牛刀於一時、抑又堂々之陳、正々之旌、風雨雲雷、交發而並至、龍蛇虎豹變幻而出沒者、人不及見之也、則我獨慙先生之志大而不能敢用一矣耳、一生精力、半在茲書、先生嘗云、

明和庚寅冬

赤磯

赤松勳謹跋

拾遺卷の一

一 長篠合戦に武田勝頼人數を出だす事

長篠合戦に武田勝頼五月廿一日に人數を出だす。信長見給ひ、敵も多勢なり三萬あるべしと宣ふ。家康公仰に、此の度の軍味方勝なり。敵丸く打ち圍むときは六ヶしく、散つて人數を多勢に見するは、勢を頼にする間大方勝なりと御意なり。酒井左衛門尉承りて尤もなる儀と感じけり。

二 家康公兜の心得御示の事

家康公被仰候ふは、小身の武士番料の具足を威させ候ふとき、胴・籠手其外は籠相にいたさせ候ふとも、兜は念を入る心得がよきぞ。子細は討死をとげたるとき、兜は首と一所に敵の手にはわたらぬのなり。然るときは死後の爲にて無きかとの仰有り候ふとなり。右の上意に付き上田主水入道宗古物がたり致し候ふは、士は討死を遂げ首と成りたるときの義を心に掛けたるがよきなり。去るに依つてさかやき杯の後さがりたるは、佗言づらになり見苦しき間、若き衆中必後高に刺りたまへ。明日は

必ず一戦と知れたる前日は、首を奇麗にいたす心得第一の由かたられき。

三 家康公合戦心掛御示の事

家康公或とき上意に、今なき人の頭をもするものども、軍法たてを以て床几に腰をかり、さいはいを以て人数を差し使ひ、手をもよこさず口の先の下知ばかりにて、軍に勝ちたるものと心得るは大きな違なり。一手の大將たるもの、味方諸人のほんのくほばかり見て居て、合戦などに勝たる者にてなしと被仰候ふとなり。

四 小幡景憲物語の事

小幡景憲の物語に、大阪陣のとき堀殊のほかかくして攻めがたきとき、本多佐渡守とかく金堀を入れて堀りぬき然るべしと、家康公に申し上げられければ、尤もなり然るべしとて仰せ付けられける。土佐或は伯耆・佐渡より呼び上せよと詮議のとき、佐渡守いはく右の國のもの不功たらん。たゞ甲州の信玄金堀度々勝利ありとて、甲州より金堀をよび已にほらせんとす。城内に此の由を聞きて、甲州

より金堀来て此の城を堀りたくとて躁きけるなり。其の内に和談に成りけり。何か五年や十年の内にて、七十間ほご有る堀をほりがたからん。此れにて敵の氣を奪ふ道理なり。遠州高天神の城に小原與次郎と申す人籠城しけるゆゑ、早速金堀にて矢倉をほり落したるゆゑ城をあげわたす。敵城へ堀はめの矢倉の下まで堀り付くるなり。是れにてくづるゝ又くづれざるときは、鐵砲の藥を百貫目にても横切火繩にて付くるなり。我が籠城へ敵ほらば、その時は必ずその城方には伏せかまり番あるなり。またほりくる方へ、此の方よりも或は三筋にても四すぢにても堀りかくるなり。此れにて大かた通るなれば、金堀妙に覺るなり。又はやき物をもて候ひくる方、ちんちんといふなり、兩方よりほり合ふとき互に分るなり。是のとき味方踊り、此方より多くこゑを流すなり。

五 野間佐馬之進田螺を以て勝負占物語の事

野間佐馬之進物がたりに、田螺を折しきの片隅に三つ又かた隅に三つよせて、兩方へわけて一夜おくとき、其の合戦勝負のまけの方を追ひこみ、かちの方は進み出づることなり。大阪陣の城中、秀頼・木村・大野を稱して盆の一方に三つ、また一方に關東方家康公・井伊・藤堂と稱して三つ、たにした

置きて一夜置くに、かならず關東方の三つの田にし、内方の三つのたにし追ひ込みたりとなり。勝預の吉凶を兆ふこと是れよりよきはなしとなり。武備志にも此の兆を出だしたり、考ふべし。

六 老功の士相言葉物語の事

老功の士の日はく、古法に相言葉を夜々に換ふると云ふこと大なる偽なりと心得べし。末々迄のことゆゑ中々毎夜かへがたし。大阪陣のとき城内相詞は出關東方は施と唱へたるに、一陣すむまで右の相言一つ宛にて濟みたる事なり。是れ證據なり。大阪落城のとき城中より女中大勢おちたるに、施とさへ云へは奇手は助くると心得て、銘々施々と囀へて出でたりとなり。

七 家康公駿府にて相討御吟味の事

家康公駿府に於て御伽衆の中より、大阪御陣以後去る五月七日若江村において、井伊掃部頭家來三人にて敵一人を討ち取り、三人相討と有之に付き、掃部頭委細に吟味相送げ候へば相討に極まり、今一人の中す口相違に付、掃部頭不忠被致仕置候へと、申し付け候ふよし申し上げられ候へば、その義

にはとかくの仰もなく何も聞えし。惣じて物毎に余計といふことなく、切りつめたる如くなるは宜しからず、就中武邊などの義は餘計の有り候ふが能きなり。仔細は織田信長未だ小身の節、佐々成政と前田利長と兩人にて敵二人をつき倒し、成政利長に向ひその方敵を追ひつき倒されたる義なれば、皆上げられ候へとなり。利長我れらは敵を突き倒したりといふ迄にて、鎧合の義は御自分なれば首をその方揚げられよと互に辭退仕り候ふ處へ、柴田榎六も馳せつき左やうに兩人辭退の首ならば、中にて我れ申し受くべしとて首を上げ、我れら高名の證據のため兩人にも來り被申よとて、三人同道にて信長の前へ出て權六申し候ふは、この兩人にて敵を突き倒し、首を取れ取るまじきとて吟味合ひ候ふ處へ参りかゝり、首を某とりて参り候ふと申し候へば、信長公御聞きなされ、三人とも大に賞美いたされ候ふよしなり。右三人ともに武邊に余計あるゆゑなりと仰せられ候ふなり。

八 柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事

天正十年十月柴田因幡守退治に上杉景勝出馬にて候ふ。景勝先手本條越前守・村上出雲守・新津加治等初合戦に出てられ方上橋といふ所迄敗軍仕り候ふ。景勝旗本迄因幡守のり懸り、大事に及ぶ所を

上杉謙信（上杉謙信）は、旗本前備にて饑りあり候ふ。景勝の紺地日の丸の旗をとり、三十間ほど先へおしいだじ、義春手廻の士も下馬いたさせ、鎧を取りて膝の上におき芝居に折りしき、備へを立て候ふに付、因幡守引き歸し引きとり候ふところへ、義春備を以て謀ひ追討仕り候ふ。このとき宇佐美民部勝行は兜付の首を二つまで高名して、その身も手負ひて旗本へ來り、勘當赦免のため景勝へ目見を願ひければ、父の仇の未と思はれ目見をゆるされず。長尾政景をこらしめたり。民部は二つの首をもち涙をながし罷りおり候ふを、上杉家の平林内蔵助・井上三郎兵衛・落合清右衛門、其の場に有り合はせよく見て後にかたり候ふ。此のとき民部は義春手に付き出陣仕り候ふ由。

九 紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大阪攻御先手を望まると事

紀伊大納言頼宣卿は文武の賢將にて其の行跡も凡人にあらず。大阪冬の御陣に二條の城にて、大阪表御手廻の御備定あり。頼宣卿十三歳になり給ふが進み出で給ひ、御先手を我れらに仰せ付けられ下され候やうにと御のぞみあり。家康公御惑にて城強くして先手せめあぐみ候は、その方仰せ付けらるべしとて御機嫌なり。五月七日大阪落城のとき、御旗本後備にて、尾張大納言直卿と紀伊大納言

も、御著陣以前合戦終はり大阪落城なり。茶臼山にて家康公御前に頼宣卿御出有りて、今日御先手にて無之ゆゑ、手に合ひ不申無念至極に候ふと頼に御落涙なされ、松平右衛門大夫正久申し候ふは、今日御手に御あひなされず候ふとも御せきなされまじく候ふ。御一代にはかやうのこと幾度も御座あるべくと諫めまゐらす。頼宣卿聞し召され、右衛門をはつたと御にらみ候ひて我れら十三歳の時が又有るべきかと御申す。家康公聞しめされ、御涙を御浮へ御感悦にたへず。常陸殿その言が金言にて候ふとの御稱美なされけると、石川榮入ものがたりけり。

一〇 高麗攻南大門合戦物語の事

高麗都南大門合戦、大明李如松三十萬騎にてきたる。小早川隆景一組二萬との合戦なり。初め李如松は吳惟忠・張世爵等十萬餘り、山海關を出で鴨綠江をわたり朝鮮に入り、小西播津守行長大將にて、大村新八・松浦刑部卿法印・宗對馬守等二萬八千にて来て籠る、平壤城を攻め破り、小西を追ひて朝鮮の都さして推し來り、朝鮮の人馳せ加りて三十萬騎なり。大友義統も嶮山城にありしが聞き逃げして落つ。小早川隆景は開城府にあり。都より五里を阻て其の間に大河あり。其のとき黒田長政

久留米秀包も白川と襄陽にあり。小西・大友もこの城に止まる。隆景は開城府に踏み止まり、大関勢三十萬を引きうけ、一戦して相果たへく踏み止まされ給ひけるを、惣大将備前中納言秀家卿、石田治部少輔三成・増田右衛門尉長盛・大谷刑部少輔吉隆より飛脚をもつて早々都へ引きとらるべく候ふ。大河に阻り難義仕ること候ふ間、此の歳へ一所につばみ然るべくと申し越され候へども、隆景は我れ日本より渡海の初めより再び日本歸朝の心なし。本朝大半治まり國家無事なれば、疊の上にて病死せんかと是れのみ心にかゝりしに、幸に此の陣出來何よりもつて満足なり。隆景年五十八死しても惜しからず、大明の三十萬にかゝり合ひ、切先より火花をちらして合戦し、討死を遂げんこと老後の思ひ出にこれに過ぎず。我れたとひ討たれたりとも日本の御弱にも成るべからず。大明三十萬を此の所にて待ち受くべしとて、少も動じ給はざりければ、大谷刑部少輔只一騎開城府へ來り、隆景に對面し、貴殿の御心底古の名將勇士も此の上過ぐべからず。但し資殿二萬ばかりにて三十萬の圍を受けて、徒に討死せられんこと本意なきなり。速かに王城にかへり、惣軍を立て備へ御身惣軍の先手にて快く合戦し、死を善道に守り給はざり、逆も死せん命忠敬ともに全からん。早く都へ引き入り給はるべしむれ諒めけるに隆景心服し、左候はゞ何時にても先手は隆景一組申し請け候ふ間、他の望許容有

るべからずと、刑部被請候はゞ王城へ引きとり申すべく候ふ。大谷そのだんは我れら諸人に立ち候ふよし申され候ふに付、白川に有りし黒田長政へ其の旨申し遣し、早々開城府へ引き入れ申すべく告げ遣しければ、長政も久留米秀包も小西行長・大友義統同道にて、文祿二年正月十五日に開城府迄引きとり申され候ふに付、隆景大谷・黒田・久留米・小西・大友同道にて川を渡りて王城へ引き入り候ふ。隆景は右の所存ゆゑ都へ入らず。南大門の外碧階館に陣どり居られ候ふ。同月廿六日大明廿萬餘夜の中に河をわたり都表へ推し詰り候ふ。其の夜の廻り番は隆景相備へ立花左近宗茂なり。家老十時傳右衛門五百餘にて曉打廻口に出づるに、大明李如松が大軍と聞紛れにはたと行きあひ、立花が勢駈けちらして引き取り候ふを大明勢追ひかけしかば、十時傳右衛門返し合はせ、五百餘散々に相たしかひ残らず打死する。雜兵四五人走りかへりて此の旨告ぐる。立花左近宗茂、則ち隆景井びに毛利七郎兵衛元康・久留米秀包・高橋筑紫へ告知す。隆景則ち王城へ注進し、備前中納言秀家卿三奉行何れも追々に南大門口へ馳せ來る。夜はや明け渡るに、遙に見わたる大明李如松が愛去ること一里ばかり、備前段々に立て見合掛からん無色なり。その勢瀧江の潮の瀾り來るがごとし。先手二里餘に成り、勢子並を立て跡も先もみな旗にて勢しきとも中々なり。秀家卿三奉行に大敵と野合の合戦い

かゝれば、都へ引き籠り防ぎ然るべしとありしを、立花左近眼をいからし、太刃に手をかけ大音上げ、かやうの大軍に籠城して叶ふべからず、とも角もあれ野谷戦にはめ然るべしと申されける。依之合戦にきはまり候ふ。諸大將先陣を望まるとに、隆景眼に角を立て我れ先陣たること最前よりの約束なり。他の望むるべからずとて、隆景をなへを配られける。先陣栗屋四郎兵衛大將にて村上正正、野島掃部等三千なり。二の先は井上五郎兵衛大將にて、佐世石見守、吉見大藏大輔等三千なり。三番は隆景旗本一萬にて備へ、立花左近・久留米秀包・毛利元康六千は奇兵として、隆景の右の方三町ばかりに引き退いて待たなへけり。其の日の合戦火花をちらし、栗屋・井上押し立てられ候ふを、立花左近横槍を入れ、大將李如松が旗本を突き崩ししかば、隆景も正面より切りかけ候ふに付、大明廿萬惣敗軍になり、首數三萬八千餘隆景一組へ討ちとり候ふ。隆景・立花手柄と申すも中々疎なり。此のとき立花左近は甲付の首ニツ直取り高名にて、鞍の鹽手に付け、太刀鐔本五六寸のつて鞍へ不入を帯び、己馬も朱になつて、先手よりしつしづと参られけるに、栗屋四郎兵衛備の前を打ち過ぐとて、其の備の細頭・村上正正・野島掃部を呼びかけ、立花申しけるは今日は立てられまじき所を推し立てられ候ふとありけるを、大將栗屋四郎兵衛聞きもあへず、立てらるゝことも立てられ返すことも返したり。

我が備は今日の合戦の花になりたると返答する。聞くもの栗屋を譽めざるはなし。扱て立花左近は隆景の旗本へ参られけるに、立花自身の高名ニツまで鞍に付けられたるを見て、隆景取りあへず、立花見ごと候ふと譽められ候へば、左近聞き給ひ、毎事仕まつるとの返答なり。よき自讃の言はなりと其の場にて聞く人かたられける。此のとき合戦未だ始まらざる時分、黒田長政只一騎歩侍七八人にて、隆景旗本へ見廻られ候ふ。隆景見て長政は幸の所へ御し候ふ。栗屋四郎兵衛・井上五郎兵衛を先手に申し付け候ふ。物馴れぬ者どもにて心元なく候ふ。實殿先手へ越され毎事御指圖下され候へと申され候。長政喜悅の色見え畏まり候ふとて、先手へ越さる。頃は正月廿六日辰刻なり。朝鮮は寒國にて寒事不斜。長政は大綿帽子を着し、甲は耶等に持せられしが、隆景の先手へ出づるとて、綿帽子を脱ぎ、兜を取つて着られしに、隠れなき例の水牛の甲なり。水牛の角本を蒸皮にて結び付けられたり。扱て兜の緒をしめ先手へ出でられ候へば、隆景旗本數千の士卒ども、長政先手へ御し候ふ上は今日の軍は勝たりと、懸軍勢勇みたるとなり。長政の年を問へばそのとき廿五歳なり。そのよはひにて如此人に隨に思はれ候ふは、中々凡人にてはあるまじきなり。長政常に宣ひしは立物指物は海老は子にして差したる斗にては、勳時か馬にのり立ち行くときにぬけて落つるものなり。立物に穴を

あけ、受子にも穴をあけ、草にて結び付くべしとなり。自分大氷牛の立ものもふすべ草にてゆひ付けられたるを、其のとき見たる人かたりき。

一 越前黄門秀康卿伏見御屋敷へ於國を召さるゝ事

伏見にて越前黄門秀康卿御屋敷へ於國といふかぶき女を召して、かぶきをどらせて御見物あり。水精の珠敷をえりにかけ舞ひたるを御覽なされ、水精は見苦しとて御具足の上に御かけ成され候珊瑚珠の珠敷を下され候ふ。於國が舞を御覽なされ御落涙これ有り。御意には天下に幾萬の女あれども、一人の女と天下に評せられ候ふは此女なり。我れは天下一人の男に成ること叶はず、あの女にさへ劣りたるは無念なりと仰せられける。

二 津田長門入道道慶物語の事

津田長門入道道慶物がたりに、日根野織部が唐冠の兜の立もの鎖道耳二尺五寸脇立なり。但し右の耳の立物は半分より折り掛けたるやうにする太刀打に構ふゆゑなり。

三 島原落城の砌平塚勘兵衛比類なき働きの事

島原落城の砌り本丸の堀下へ著く者なし。鐵砲調しかりけるに、紀州浪人平塚勘兵衛重近只一人押して堀際へ付く。尾藤金左衛門薄紅の大吹貫をさして掛け付け平塚と共に堀下へ付き、面もふらず堀を乘るところな、内より鎧長刀にてさんざんに突く。その内尾藤が口に突き込む。それにてよわる所を、又真中を鎧にて突き貫き終に討死せり。平塚勘兵衛も尾藤と同じくのり掛け候ふを鎧にて突き落され、已に討死と見えけるな、細川隆印内、乃美庄右衛門掛け合ひ、堀の内より平塚を突き伏せ居る敵をつきたふし、平塚は助かる。平塚また起き上り、堀下へ付きその働き比類なし。但し平塚勘兵衛重近は秀吉公御いとま平塚因幡守吉就が甥なり。乃美庄右衛門は小早川隆景家老浦部兵大夫宗勝が孫なり。何れも逸物の末孫ゆゑと沙汰なり。

四 大阪落城の時細川玄蕃頭鑑合言上の事

大阪落城のとき細川玄蕃頭興元鑑を合はすると申し上ぐる、後に家康公仰には、鑑合はすると云ふ

こと左やうに節をある物にあらず。此の茶白山の北に見えたる勝曼院の山に佐久間不干・筒井順慶・荒木攝津守村重籠りて、大阪の門跡建如上人より攻め候ふとき、本の鎌合ひたると聞き及びたり。其の外上方にての鎌は聞き及びに、そのとき勝曼院の鎌は昔より言ひ傳ふる杉なりの鎌と聞き召したりと仰せられ候ふ。佐久間備前守罷り出で上意の通に御座候ふ。同姓不干手にて其の日は兩度鎌御座候ふ。天正六年五月三日の合戦にて御座候ふ。朝は茶白山の西に見え候ふ。雖波の貝殻塚の合戦にて、不干が興力佐久間久右衛門・同慶之助・梶原綱三郎・水野源太郎・水岡小三郎六人鎌を合せ候ふ。その晩勝曼院の山にて、不干が内、清水亦市・江原彌介・浮見藤介・長瀬彌五右衛門四本鎌合はせ申し候ふ。長瀬は只今小右衛門と申し、加賀にまかり有り候ふと申し上ぐる。家康公聞き召し、扱て扱て利常は能き兵を抱へ持ち候ふと御意なり。長瀬小右衛門は黒母衣銀の牛の舌の出だしにて、勝曼にて、鎌を合はする後門跡降参し、大阪城衆寄手小屋見物に出づる。長瀬が小屋印に銀の牛の舌の黒母衣を見付、日外鎌を合はせたる母衣爰にありとて、小屋前に人多く寄りて見たりとなり。

一五 伊藤伊右衛門武田勝頼を討ちしを津田幸菴物語の事

福島左衛門大夫正則の内、伊藤伊右衛門は武田勝頼を討ち取りし士なり。伊右衛門が咄として津田幸菴かたられけるは、甲州滅亡のとき勝頼御父子のしれず。瀧川左近一益先手にて國中を尋ねる。田野の奥天目山の麓に落人の男女五六十人隠れこれあるよしにて押し寄せたるに、皆々兵糧をかつへ働く事不自由なり。何の手もなく討ち取り候ふ所へ、瀧川旗本より早飛脚有之、勝頼公信州高遠へとりこめ候ふ間早々その本より罷り歸るべしと告ぐるゆゑ、是れまで來たる證據に首ごもを馬に付け歸るべし。府中へ歸りたれば勝頼高遠へ籠りたるも風説にて沙汰なし。田野にて取りたる首ごもはみな瀧川へ捨つる。然る所に地下の夫ごも其の溝の前にて皆頭巾をとり、頭を地に付け一禮して迎る。みなみな見て已れらは瀧川へ何とていんぎんにするやと笑ふ。百姓ごも申し候ふはあの畑中に屋形勝頼公御父子の御首御座候ふ。数十代の御主と存じ禮仕り候ふとて泣く。皆々驚きて其の首ごもを取り上げ、勝頼公御首と云ふを城介殿御座の間の床かんなかけにのせ置き、殘の首ごもは庭におき、城介殿置ひけるは、勝頼の首と瀧川内にては誰れかとりつらん。同じくは一益が甥瀧川義大夫が取りたるならば、其の聞えも可然と仰せられ、まづ瀧川義大夫をめし、奥の口へ召され、勝頼の首を御見せ是れは汝がとりたる首かと御尋、義大夫よと見て是れは拙者とり候ふ首にては無之と申す。則ち庭へ召され

四十許りの首を御見せ候へば、その内一ツ義大夫とり出だし、是れは私のとり候ふ首と云へり出だす。則ち土屋惣藏が首なり。義大夫を御冥しなされ、伊藤伊右衛門を召して庭の首を御見せ、其の内に汝が取り候ふ首は有るかと御たづね、伊右衛門則ち殞らず見て申し上げ候は、此の内には私とり候ふ首は無志と申し上げる。御座の間へ召し勝頼の首を御見せ候へば、伊右衛門見て、私とり候ふは此の首と申す。城介殿汝がとりたる證據はいかにと御尋、首の切口に私の候ふ馬栗毛粕毛の毛血まじりとり付有之候ふ。田野より鹽手にくくり付は、道にてすれ候ふに付如此と申し上げる。御覽候ふ實に栗毛の馬の毛付きたり。その時城介殿御意には汝は冥加に叶ひたり。勝頼の首なとりたりと被仰となり。近年の事物どもを見るに、事々しく働きて討死し給ふ糧に書きたるもあれども、我れ其のときは小平治とて瀧川方に居て、伊藤伊右衛門とは服従なれば、まのあたり見たるに左様にてなし。勝頼は鐵櫃に腰をかけ太刀にて防ぎだ、かひ給へども、飢ゑ疲れ玉ひ何の働もなく伊右衛門が討ち奉ると、板倉周防守重宗宅にて津田幸菴物がたりなり。

一六 塙圍右衛門持道具の事

塙圍右衛門重之助須賀阿波守至領手へ夜討のとき、本村喜左衛門・加角大夫・牧野湖太・田屋右馬介四人繩を合はする。この内田屋右馬介持道具長刀なり。圍右衛門は長岡盛物・御宿越前守に向つて田屋が手前繩を合はするとは申し上げられまじくと云ふ族あり、いかいと問ふ。御宿が曰はく、繩も櫓の柄長刀も櫓の柄なれば同じことなり。長刀は鐵より短ければ、猶つよき働なりと愈々説いて濟むなり。本村喜左衛門落城のとき討死。角大夫は稻葉美濃守正則へ抱へらる。牧野湖太は本多中務忠刻へ奉公、田屋右馬介は五郎左衛門と名をかへ、紀伊大納言頼宣卿へ召し出だされ、五郎左衛門後は田屋半右衛門と云ふ由。

一七 筑前岩出城攻秀康御年十四歳にて武勇御心入の事

天正十五年四月一日筑前若出城守屋之を、秀吉公一時賢に仰せ付けられ候ふ。御先手浦生氏郷・前田利家なり。その二番備は羽柴三河少將秀康・佐々陸奥守・水野忠重なり。山平分御上りのとき、落城の間御上り候ふは御無利家氏郷より申し来る。秀康御年十四歳なり。手に御達ひ無之とて無念に思し召し落涙なされ候ふを、佐々成政深く感じ、さすが家康の御子にて候ふ。今日手に御達なしとて御

せきなされ候て落涙なされ候ふ。我れにも様々諫め申し候ふよし。家康公に似申し候ふと譽め申し候ふときに、秀吉公仰せには左やうにてなし。秀康は我が養子なれば、武勇の心入は皆々秀吉に似たるゆゑなりと仰せられきとなり。

一八 越後浪人大井田監物の事

越後浪人大井田監物は後越前黄門秀康公に御使番にて奉公仕る。その仁の筆記に、曰越後國は代々上杉家領し候ふ處に、永正十年六月廿日上杉顯定と家老長尾爲景と妻有庄長森原にて一戦候ふ。顯定討死し爲景則ち上杉庶流土條の上杉定實を婿にとり、我子長尾六郎を定實の養子分にして顯定の跡に立て上杉を繼がする。爲景八男猿王後醍醐天皇の性尋常に替はり利根聰明にして大膽なるゆゑ、爲景氣に違ひ出家にせんとて下越後極尾淨安寺へ遺はす。後見金津新兵衛供して下越後へおもむく米山越なり。米山は上り四里下り四里なり。猿王纒に入歳なれば歩侍の背に負はれて山を上る。米山の峰に草茸堂あり米山寺といふ。その堂の縁に休みて破籠とり出し、猿王にも参らせ供の侍共申食する。乳母夫の本條も作守も供なり。猿王幼ければ堂の縁に廻り遊び居られき。米山は大山にて峠の藥師城と

りは頸城府内を目の下に見おろす所なり。猿王は故郷府内の方をながめ涙ぐみて、繼母の讒言にて浪人すること無念なり、成人にして本望を遂げ此の筋にて一戦すべし、殊に此の山は府内を目の下に見おろし能陣場なりと宣ふ。木庄美作守、金津新兵衛舌をふるひ感涙を流し、その事を忘れ玉ふなと悦ぶこと限りなし。是れ則ち天文六年五月猿王八歳のときなり。九年の間猿王淨安寺にて學問せられければも出家の心なし。天文十四年四月長尾爲景、宇佐美駿河守定行兩族にて越中へとりかかれ候ふ。松倉城主唐入兵庫山下左馬介こもり候ふを、宇佐美駿河守三千にてとりつめ責め落し、山下左馬介その外二百餘人討果し、松倉城をのり取り直にその城に籠あり候ふ。爲景は八千餘にて放生津の城へとり懸り候ふ。この城には徳大寺大納言實規卿その外公家衆九人籠られ候ふ。その子細はそのころ京都大亂にて諸公家衆みな携寄々々に國々へ落ちちる。徳大寺殿は越中國島山尾服守尙慶の外孫ゆゑ、其の便にて越中へ御越候ふ。四月九日爲景は城をせめ落し、徳大寺實規を始め公卿九人上下七百餘打果し城をのつとり候ふ所へ、島山留主居推名・神保・遊佐・郡守等加州の一揆をもかたりひ後巻に出で候ふ。加州は一向宗一揆にて候ふ。偽つて降参仕と申し、道を作りおとし穴を構へ引入れ候ふ。爲景加州へ押し候ふとき推名・神保・遊佐等加州一揆をこり合ひ候ふ。爲景人數おとし穴へかか

り大かたうたれ、爲景も討死惣敗軍にて士卒散々になり越後へ引退き候ふ。宇佐美駿河守定行は十一日ふみ止り敗軍を集め、堅固に板倉をひき拂ひ越後へ歸陣する。越中勢あつたを付けんと思は候へども、宇佐美が武勇におそれて一人も付かず。爲景討死なれども、その子上杉六郎國を治めて別條なし。此年猿王は十六歳なり。爲景討死と聞き、越中の道普賢に沙汰し、三年過ば義兵を上げ越後を打平ぐべきと工夫を廻らし宇佐美駿河守をかたも候ふに、駿河守も猿王の器量只者になきと見うけ一揆任り候。天文十六年猿王十八歳元服して、長尾平三景虎と名のり、同四月九日三年忌を用ひ終つて義兵を上げ、榎尾城にたて籠る。宇佐美駿河守・本條美作守馳せ加はり候ふ。兄上杉六郎これを聞きて、妹智長尾越前守政宗に七千餘付けて、榎尾の城へ取りかゝり候ふ。景虎矢倉に上り寄手を遣見して、今宵寄手は引きとるべきものいふなり。其の退口へ突きて出でんと申され候ふ。宇佐美駿河守申し候ふは、長途を寄せ來り候敵いかで空しく引きとるべく候ふ哉突き出で候ふはいかかと意見する。景虎は白晝より寄手を見るに、軍兵計にて小荷駄なし長陣の敵にてなしと思ふなり、突いて出でよとて、夜半に切つて出る。景虎の積のごとく政景退口へ切て掛り候ふ間、政景勢惣敗軍になり候ふ。景虎勝にのりて追ひ打ちにして國中へ討つて出る。宇佐美・本條も押し續いて打つて出でて、柿崎の下

濱に陣を取る。是れによりて兄上杉六郎八千にて米山を越えて出で向ひ候ふ。景虎一戦をとり組み候ふとき、坂織部・鬼小島度々介・吉江織部をはじめさんぐに戦ひ候ふ所へ、宇佐美駿河守をとり横入にかかり、本條美作守は備なりに静々とかかり候ふとき、六郎打負け敗軍仕り、米山へかかり村内へ退き申し候ふ。景虎しつしつ眞先に追討に進み申さる。米山東坂本にて景虎申され候ふは、何といたし候やことのはかぬ候ふ間、しばらく休み打立つべきと小隊へ入つてぬぶり申され、駿河守これを見てこれはいかなる御ことにて候ふや、今敵を追立て候ふことは竹を破るが如く、其の勢失なふべからずと、米山を追ひ越し候は、頸城郡へ打ち出で、府内の城をのつとるべく候。早打立たと催し候へども、景虎は眼たしとて高軒かいて臥し申され候ふ。駿河守様々異見すれども聞かず臥し申され候ふ故、了簡もなし逆の極の極と云ふ。惣景虎は上杉六郎人數米山峠を三分二程越えたると思ふ時分早貝を吹かせ、景虎打ち立ち米山へ追ひ上り候ふ。案の如く六郎は下り坂に越き候ふ所へ追付、六郎人數龜破坂より追ひ落され死するもの數を知らず。後に宇佐美諸人に向つて、今日景虎米山坂にて逃るを追はずして眠り候ふを、各々合點致され候やと尋ね皆々合點参らずと云ふ。宇佐美が曰く府内鑿米山へ逃げ上るとき是れを追つて若し敵に返され候ふときは、上手に敵を受けて進みせば返す事必定な

リ、景虎その段を積り眠る眞似して登坂を敵に登せ濟し、下りに赴き候ふとき道ひ打ち玉ふ。我若年より數十度のこと逢ひしかども其の積りなきに、景虎十八歳にてこの智恵は軍神の化身かと存じ候ふと申し候ふ。景虎は府内をせめおとし六郎に腹切らせ其のち申され候は、主君の跡をつぎたる兄をころし候ふ上は國を取る望みなしとて、府内を出で高野山へ赴き申され候ふ。關の山迄出で候ふとき上杉家老その談合して曰はく、景虎なくば越後に重りなく我儘になり、他人の手へ越後を取らるべくとて追つかげ引き留むる。景虎居給はずば越後はたれか治むべく候ふ、上杉代々の骨折水になり候はんこと心外なりと立つて意見する。景虎さらば以來とも我ら下知を背くまじくと起請文を宿老申いたされ候はば歸るべしと云ふ。其の時上杉家臣廿六人曰來共に御意次第に仕るべくと起請文を讀く。そこに立ち歸り春日山の城に入り、上杉宣實の上條に居玉ふと申し合せ越後を治められ、長尾越前守政景を引き付け上脇平井の城に管領上杉憲政へ隨ひ申さるに付き、扱年頃不義ある者野心多き願を上ぐる者大身ども十六人林泉寺にて切腹申し付くる。然れども前に起請文ある故に餘人とかく言ふことならず。景虎越をふみ静めこれ皆宇佐美駿河守に相談して此の如し。謙信は上杉を繼ぎたる兄を殺し子孫を立つること天道に背くとて、十八歳に出家して不識菴心光謙信と號す。廿二歳にて上杉憲

政の譲りか請け上杉景虎と號す。永祿三年五月上洛して公方光源院義輝公より一字拜領し輝虎と改む。菊桐澤湯瓜の紋の幕綱代の興、文の裏書御免にて關東管領に成り、越後・佐渡・東上野・關中・能登・飛騨・加賀迄手をかけられ候ふこと、凡人にては有るべからずと云ふ。

拾遺卷の二

一九 家康公駿府御花見の事

天正十八年秀吉卿北條家を退治として、小田原へ發向の前方、家康公も頓て御出陣の前、駿府近邊花盛の候を御覽遊よし。御城中御矢倉の諸方能くみえ候ふ所へ御上りなされ、御老中御供にて御菓子御酒等下され、その後御咄の次に各々へいつぞ尋ね候はんと思ひながら取り紛れ候ふ。先年長久手一戰のとき、晝の合戦には我れら勝にて小牧の要害へ取り入り居候ふ處、秀吉は二重堀の陣場より、一戰の心掛にて馳せ來られ候へども、日暮に及び小牧城攻は明日の議と有りて、其の夜龍泉寺川原に野陣を張り居られ候ふ處を、夜軍仕かけ候はゞ然るべき由各々すゝめられ候へども、我れら不用して其の夜中に小牧の陣所へ引きとり候ふ。その夜仕かけ候はゞ太閤を必ず打ち留め申すべきと有る心にて候ふか。左様候はゞ勝利は疑なしと存せられ候ふやと御聲につき、忠勝申し上げられ候ふは、直政・康政は、掛御一戰にも逢ひ候へども、私は小牧の御留主に居り申し一入夜軍望ましく存じ候ふ、太閤を打ちとめ候ふ處までは心付き申さず、申し上げらる。井伊・榊原も申され候ふは、龍泉寺表へさし

二〇 朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事

道はし候ふ伊賀甲賀の罷り歸り、上方勢の夜守夜合戦の備もなく、無法の陣取と申し候ふに付き、御仕掛け候はゞ御勝利と存じ奉り候。秀吉は是非打ちとり候ふ處までは考へ申さずよし申し上げられ候ふ。権現嶽御聞きあそばされ、各々左様有るべしと兼ねて存する事なり。その節夜軍にかゝらば必ず勝つべしと思ひ候ふ。然しながち太閤を打ちもちし候はゞ、さんざんのこと候ふと思ひ右趣を用ひざるなり。其の子細は秀吉は一度天下一統の大功を立てんと含まれ候ふ。然るに長久手十萬の勢、味方・織田合はせても僅か三萬に及ばず。これにて戦陣も響けなるに、晝の一戰かつこと十分の仕合なり。又彼軍に勝つて秀吉を打ち洩らし候はゞ、至極の負なきはり、天下の望より先づ徳川家を潰すなりとの所存いで候はゞ無益の義なりと存せらる。其の心入申ふ此の度も北條を押したふし、夫れより出羽・奥州まで手に入れ、天下一統の功立つべくとの心掛けと相見え候ふと仰せられ候ふ。何れも感心奉りきとなり。

朝鮮の役に黒田長政後藤又兵衛將基次を物見につかはさる。基次やがて馳せ向ふ處に其の道に一ツ

の河あり。その河を打ち渡り、敵陣の近所まで行かんとせしが、日本の馬の沓川上より流れ来るを見て、早川上の味方の勢の川をわたりしと推量し、川邊より直に引き返して長政の陣に歸り、味方は人の内早川をこえ玉ふと存するなり。それゆゑ敵陣近く参りて、物見するにも及ばず立ち返り候ふ、いそぎ打ち立たせ玉ふべしと進めしかば、長政大に喜び玉ひ、後藤基次が武勇の巧者なること今に始めざることもながら、心早き物見の仕様かな、出かしたりはや打ち立んと云ひ玉ひけり。基次是れより前にも、朝鮮より長政の先手山の端を廻りけるが、敵と出で合はせ戦ひしに、そのときこゑを揚ぐるを後藤聞きて、先手のたゝかひ味方打ち負けたらといふ。長政さゝ玉ひ山のたゝかひを、汝愛に有りながら、味方の負けしとは何を以て知るぞと尋ねらる。基次承りさん候ふ。味方のときこゑ次第に近く聞ゆるは、一定負けて引くと覺え候ふ。勝軍ならば向へ進んで鬨を上ぐる故、遠うなるものに候ふと申しあへず、味方敗軍の兵ども朱になりて追ひ追ひきたれば、又兵衛がさつする處神の如しと感ぜらる。又其の後に敵の陣みえざる所なりしに、遙向に馬煙おびたしく見ゆるはいかに、軍の勝負は何とか有らんと宣へば、基次かしこまり、敵が打ち負け引くと見え候ふ。其の故はすゝむ敵の武者ほこりは此方へかゝりて黒みてみえ、北ぐる敵の武者ほこりは向の方へかゝりて遠きゆゑに、白く見

ゆるものに候ふ。遠きは色うすきゆゑに白く、近きは色の濃きがゆゑに黒し。是れは白みて見ゆるによつて敵の敗北とみえ候ふと申す、その言少しもたがはず。敵の勢敗軍におよびけり。晋州の城攻には別にして先登にすゝみ勇ふるへり。加藤清正も後藤が武勇を大に感じられけり。それより戦功を盡くしければ、黒田長政筑前入國の後、嘉摩郡大隅の城において、一萬八千石の采地を玉はりける。猶また後の大阪の役その勇戦を見るべし。

二 加藤家足輕具足を著る事

加藤の家にては足輕具足は不著、兜ばかりかぶり、兜の脇立に長二尺に白き練一幅の小じなへを兩に二本立つる。清正の物語に、他家には具足を著せ兜は不著。或は張拔の笠をかぶると見えたり。身に皮具足を著ても頭に兜をかぶらざるときは、こたへがたきものなり。兜を著れば具足は不著してもよき物なりと被申となり。

三 加藤家騎馬武者馬上鐵砲の事

同家にて大小身ともに騎馬は一尺三寸、或は一尺五寸、鐵砲を馬上に持ち、陣前にて打ち放し銃を初むるとなり。清正家中の老人後に咄ししは、馬上に火繩何とも難持者なりといへり。

二三 藤堂高虎家中具足の事

藤堂高虎の家中は足輕中間まで兜を著、金の桃形の兜に一枚綴に烏毛の引廻しを付け、鬘は古は金の銀、近年替り鬘中を三分一金する。中間は中白筋の羽織なり。物頭は錢らす兜の押付に白熊付く、白髪髪を下けたる如く鬘より下へかゝり見事なるよし。

二四 藤堂家の士梅原庄右衛門刺物頬當の事

同家士梅原庄右衛門は伊賀の武羅組なり。刺物を横に斜にさす。是れをわいれ刺といふ。右へ斜にさす時は太刀にさはる故に、左の方へ斜にさすなり。此の士の三本障に鉛子十七中るあり。此の刺物の柄を打柄にして、蘭筒・待助・合足をつよく丈夫にする。此の縁は或城衆のとき、石垣掘高き登りがたりしを、下人石垣の上へはやく登り、庄右衛門が刺物を取つて引き掲げ、一番に城をのりた

るゆゑに、以來如此するとなり。此の士元來池田伊豫守秀雄の家士なり。又此の士頬當の露おとしの穴を廣くする。此の縁は頬當を著し飯を食するとき、頬當の透よりおとがひに落ちつたりたるを、指を入れて掃ふに宜しとなり。又氣も散じかたがた宜しとなり。梅原は江戸淺草知樂院伯父なり。

三五 讚州源英公の家士西尾右兵衛が事

讚州源英公の家士西尾右兵衛浪人のとき、有馬の役に寺澤家の備をかる。猿々皮の羽織に朱熊の頭刺物をさす。此の士の喉に鉛子ありたるに、頬當を掛けざるゆゑ、柔にして弱くありたるゆゑか、喉の皮に玉留り死脱る。その鉛子後まで留りたるまゝにして有りきとなり。其の鉛子年々に下へ下りたりとなり。右のゆゑに一生涯頬當を用ゐずとなり。

二六 高麗陣の時突耳太郎兵衛南大門一番のりの事

戸川肥後守の父戸川平右衛門家士、高麗陣の砌、馬場重助と云ふもの、南天門の棟へ上りて内を見れば、人一人となし。ときに味方をかへりみ招く。同家士突耳太郎兵衛續いて上り、大門の一番のり

共耳大郎兵衛と名のる、之れに依つて重助功を空しくす。斯様のとき武功有るべきことなり。

二七 高麗陣清正が家來矢木八右衛門矢疵の事

同役清正家來矢木八右衛門と云ふ者、晋州の城攻のとき具足の細腰に矢を射付けられ、取りて抜き
けれども、矢柄計り抜いて根は止まりけれども、その場急なるゆゑに其のまゝ城へのり込み、さてそ
の夜陣屋へ歸り、矢の根を抜きけれども、肉に喰ひしめて抜けざるゆゑ、手負を足に踏み付けて、矢
の根を鐵鍬を以て漸々抜きたりとなり。或老功の者云ひしは、矢根を當坐に抜かざる時は肉に喰ひ
しめ不拔物といへり。

二八 大猷院様日光山繪圖御覽の事

大猷院様日光山の様子圖にて御覽遊ばさるべしと、畫師參り委しく圖するといへどもしかと埒あか
ず。北條新藏守長をつかはされ候ふ節一覽仕り、歸りて御庭の砂にて山の圖を仕り、御目にかへ候ふ
ところ、則ち安房守を奉行に仰せ付けられ御普請出來の由なり。

二九 關ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事

慶長五庚子年關原御一戰、九月十五日其の前日晝前に、大御所は赤坂へ御着陣被遊候ふ。晝時分に
石田三成方より、嶋左近・蒲生備中大將にて杭瀬川をこえ、刈田誘引をかけ其の口中村一學陣取の際
なり。竹田五郎兵衛二千石取三間計の鳥毛の棒のさし物にて陣所の塹をはれこえ、治部が勢へかけ合ひ
三人鎧付け候ふを鐵砲にて打ち倒し候ふ。竹田が討たれ候ふを見て、中村が兵ども櫓を踏み破り争
うて掛け出だし候ふ。野一色頼母・金の三郎・藤内匠推しつゝきかゝり候ふ。治部方には水野庄次郎・
後藤清春・林半介・渡部・伊前頼母など、かれこれ五百余進み候ふ。備前勢をば明石掃部一萬石・本多對馬
守兩大將に、稻葉助之丞・不破内匠等八百餘出で候ふ。石田が物頭島左近・蒲生備中伏兵を、木戸一
色村の藪に伏せ置きてひき候ふにより、中村が勢是れをしらず進み申さるゝ處を、打ち立て射立て候
ふと兩方こたへ初り候ふ。中村が内成合平左衛門一番やり仕り、討死仕り候ふ。首は猪尾甚大夫と
り中村勢敗軍仕り候ふ。家老野一色頼母、鳥毛二の團子の馬印をとりて、川の東におし立て一足も引
くまじく候ふ。さてさて何も敗軍見苦しく候ふと留り候ふ。藪内匠の申老その脇を引きて通り候ふ。

内匠に何とて返し不申やと頼母言をかけ候ふ。内匠ふり願り手負ひ候ふ故歸りて是等のこと歸り、川を西へのり渡り候ふ。服部小膳・鷹屋九兵衛何れも弓鐵砲のもの頭ごもにて、覺の兵にて候へども押し立てられて崩れ申し候ふ。野一色頼母は金の三幣のさしものにて、馬をひき返し數度たしかひ候ふ。治部少輔は内海北市郎右衛門鐵砲にて打ち申し候ふ。頼母之にあたり馬より落ち則ち討死。其の組子松村清助頼母が死體の締纏をとりて引きすり退き候へども、治部人數付け立て候ふゆゑ、頼母表帯を切り刃脇差ばかりとりて退き申し候ふ。あとにて頼母首は富村と申す兵とり申し候ふ。治部方多勢追ひ重なり候ふゆゑ、中村家人・中村新介、河毛新八・同次郎・原山梅津・天野・堀口等二十八人討死仕り候ふ。甘利左兵衛は川中にて立ち合ひ防ぎたしかひ候ふ。劔手二か所負ひ退きかれ候ふを、石田が兵ごも追ひ付き候ふ。吉田左大夫返し合はせ追ひ拂うて甘利をしりぞけ候ふ。中村並の陣は有馬玄番頭豊氏にて候ふ。此の合戦を見て有馬が兵ごもも數十人柵をこえて進み、稻次郎右近鳥毛半月さしもの、岡本五郎右衛門眞先に進んで川をのり渡し、治部方の勢中村收軍を追ひ來り候ふ。出合頭にいたし候ふ。稻次右近馬を岸へのり上げ候ふと、金の制札の頭上立物の兜きて、横山監物と名のりかゝり候ふ。右近と互に馬上にてわたり合ひ、そのうち馬より下り立ち組打になり、右近下になり申

すを、右近郎等岸又左衛門監物が鎧の締纏とりて引きかへし候へば、右近上になり候ふ。監物若黨かけ付け、右近が兜の鍔にとり付き引き仰ぎ候ふを、右近ふり放さんと頭をふる處へ、右近が若黨かけ付け監物郎等を切り候へば、右近が兜を放し抜き合はせ防ぎ合ひ申し候ふ。しかる所へ堀尾信濃守忠氏の母衣の衆一人かけきたり、敵味方をも辨へず、右近が若黨を味方討にいたし、首を取り引き返し候ふ。その内に右近は監物が首とり立ち上り、監物が若黨をも切りふせ、その首をとり二ツまで高名し、若黨が首を鞍の懸手に付け、監物首を奪ひ付けて手に提げ、馬を靜々と歩ませ中村が陣中を通りけるに、見る人譽めぬものはなし。其の場過ぎて備前秀家の家老明石掃部三百餘にて、池尻より福田細手へ廻りかゝり來り候ふ。中村一學人數亂れ候ふを、矢野助之進の只一騎にて取つて返し、大勢の敵へ立ち向ひ候ふ。林文大夫赤母衣金のも返し合ひ、傍輩の梅田大藏が深手負ひて退きかれ候ふを助け退き申し候ふ。助の進吃と見付けて梅田を助け退き候はんより、此の大勢の敵を防ぎ候へと言葉をかけられ、文大夫は梅田をすて、馬に聲をかけたのり出だし、助の進も馬を踏み立て二騎連れて掛り入ると、明石掃部・蒲生備中が人數崩れ申し候ふ。兩人勝ちに乗つて追ひ打ち候ふ。赤坂御本陣より大御所御遠見なされ大事の合戦を明日にかゝへ無益の軍いたし人數を損じ申し候ふ。早々引き揚げ